

# 杉田東漸寺貝塚発掘調査報告

- 横浜市立杉田小学校改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

2004年3月

横浜市教育委員会

財団法人 横浜市ふるさと歴史財団



# 杉田東漸寺貝塚発掘調査報告

- 横浜市立杉田小学校改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

2004年3月

横浜市教育委員会

財団法人 横浜市ふるさと歴史財団





1号土器集中出土土器群  
 (古墳時代前期)  
 1027・1034・1036～1039 (図30)



6号土坑出土土器群 (古墳時代前期)  
 1046・1048～1050・1052・1053 (図36)



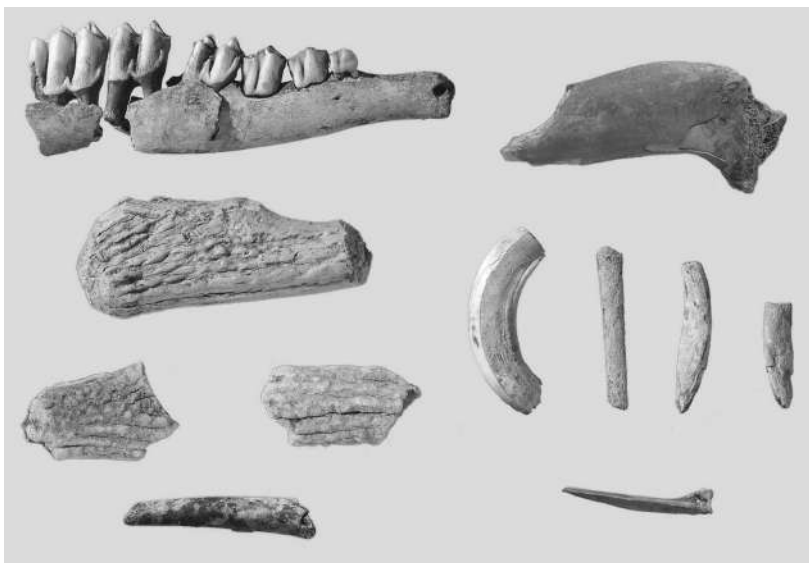
2号溝状遺構出土かわらけ類 (中世)  
 1061・1064～1079 (図42)



遺構出土土錘類  
4001・4003～4020



包含層出土土錘類  
4021～4036 ( 図64 )



出土獣・魚骨類  
( 左列 2 段目は加工痕のある鹿角 )  
6001～6003他

## 例 言

- 1 本書は、横浜市教育委員会の委託により、平成14年度および平成15年度に実施した横浜市立杉田小学校の改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。各年度の委託件名および業務内容は次のとおりである。

[平成14年度]

委託件名 杉田小学校改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託（その1）

業務内容 既存校舎北側を対象として本発掘調査を実施し、写真撮影・測図作成等の記録業務を行なう。また、新校舎建設予定地について確認調査を実施し、遺構等の遺存状況・土層の堆積状況の確認を行なう。

[平成15年度]

委託件名 杉田小学校改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託（その2）

業務内容 前年度に実施した確認調査結果により、新校舎建設予定地を対象に本発掘調査を実施し、検出された遺構等について写真撮影・実測図作成等の記録業務を行なう。

- 2 資料整理・報告書作成作業は、平成15年11月13日から平成16年3月31日まで財団法人横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センターにおいて実施した。

自然遺物等については、多くのものが未整理の状態にあり、同定・分析を経ていない。これらについては、機会を得て比較資料等として同定・分析に供したい。

### 3 調査組織

#### （1）調査主体

財団法人 横浜市ふるさと歴史財団

理事長 平野邦雄

#### （2）調査・資料整理担当

埋蔵文化財センター

所 長 遠藤滋久

調査第二係長 鈴木重信

調査第二係 平子順一・橋本昌幸

財団総務企画課庶務係 中島悦子

調査補助員 川村篤史（鶴見大学）・栗原恵美子・佐藤文子（鶴見大学大学院）・  
武田芳雅（國學院大学大学院）・松澤弘三（鶴見大学）・山宮美穂

- 4 本書の遺構・遺物挿図の指示は次のとおりである。

挿図の縮尺

・遺構等 各挿図キャプションに縮尺を示した

- ・土器・石器 1 / 4
- ・土器拓影図・土製品 1 / 3
- ・銭等拓影図 1 / 2
- ・その他 図面ごとに縮尺を示した

#### 遺構挿図

- ・挿図中の方位は全て磁北を示し、水系レベルは標高を示す。

#### 遺物挿図

- ・遺物番号は、4桁の数字で次のように表す。

実測対象土器は上一桁を「1」で表す。 例 1001

拓本対象土器は上一桁を「2」で表す。 例 2001



石器・石製品は上一桁を「3」で表す。 例 3001

土製品は上一桁を「4」で表す。 例 4001

古銭等金属製品は上一桁を「5」で表す。 例 5001

鹿角・歯牙等は上一桁を「6」で表す。 例 6001

- ・遺物挿図中のスクリーン・トーンの指示は次のとおりである。

 土器の赤彩部分  破損部分

- 5 本書の執筆・編集は、鈴木重信・平子順一が担当した。
- 6 遺構写真の撮影は、鈴木重信・平子順一・橋本昌幸が担当した。  
遺物写真は、武田芳雅が担当した。
- 7 石器等の石質同定は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。  
人骨の一部の同定については聖マリアンナ医科大学解剖学教室に依頼した。
- 8 出土遺物・記録類は、財団法人横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センターが保管している。
- 9 発掘調査に際しては、次の諸氏・諸機関のご指導・ご助言・ご協力を賜った。記して深謝の意を表する（敬称略、五十音順）  
門倉工業株式会社・株式会社 斉藤建設・横浜市立杉田小学校  
五十嵐俊雄（パリノ・サーヴェイ株式会社）・劔持輝久（横須賀考古学会）・平田和明（聖マリアンナ医科大学解剖学教室）

# 目 次

例 言	i
目 次	iii
杉田東漸寺貝塚遺構全体図	iv
第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査経過	
第1節 既往の調査	2
第2節 校舎改築に伴う調査	3
第3章 発掘調査の結果	
第1節 遺跡の基本層序	7
第2節 第1次本発掘調査の結果	8
第3節 確認調査の結果	14
第4節 第2次本発掘調査の結果	
第1項 古墳時代前期の遺構と遺物	20
A 貝層と出土遺物	20
B 竪穴住居址	30
C 溝状遺構	33
D 土器集中出土地点	40
E 土坑	46
F 炉址	52
G 落ち込み	52
第2項 古墳時代後期～平安時代の遺構と遺物	
A 柱穴列	55
B 土坑	55
第3項 中世以降に属する遺構と遺物	
A 溝状遺構	56
B 竪穴状遺構	61
C 道路状遺構	63
D 井戸状遺構	64
E 土坑	66
F 墓・火葬址	70
G その他	86
第4項 ピットおよび包含層出土の遺物	86
第4章 まとめ	98
抄 録	



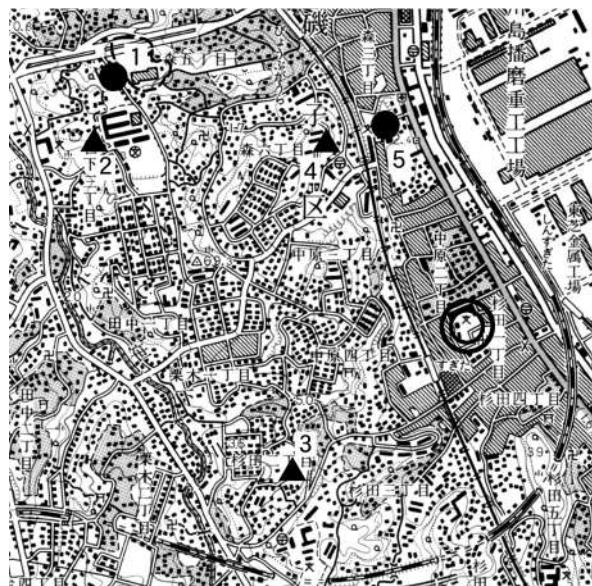
## 第1章 遺跡の位置と環境

杉田東漸寺貝塚は、京急杉田駅の北東約0.7km、JR新杉田駅の南西約1kmに位置する。その絶対位置は、北緯35度22分56秒、東経139度37分13秒である。調査地の地籍は、横浜市磯子区杉田一丁目8-1で、臨濟宗「建長寺」の末寺である霊桐山東漸寺の旧寺域内にあたる。同寺は1301年（正安3）の開創とされる古刹であり、『新編武蔵風土記稿』巻之七十九「杉田村」の項に「境内、余地、三丁に二丁」と記されている。盛時には方八町（約760,384m<sup>2</sup>）の寺域を誇ったともいわれる<sup>(1)</sup>。

本遺跡は、根岸湾に臨む沖積低地に立地し、標高4～5mを測る。西側の丘陵地から流れ出る数条の小河川のうち、河口付近で分流する注入川が形成した三角州上にあたる。1959年（昭和34）以降、臨海工業地帯造成を目的に埋立工事が進められ、現在では遺跡から海を望むことができない。調査対象地の北側には「境川」と称される支流が存在する。境川が本遺跡の北端を限るものと考えられる。

横浜市域では海浜部に立地する遺跡の発掘例はほとんどなく、本遺跡の調査は希少な事例に属する。

本遺跡の背後には、西側を大岡川の支流である笹下川によって画される標高50～70mの丘陵が北西南東方向に連なっている。この付近は、北西から延びてくる多摩丘陵と南東方向から迫る三浦丘陵とが接触する地域であり、複雑に開析された丘陵地形を呈している。この丘陵上には、縄文時代中期の集落址を主体とする佐藤内遺跡<sup>(2)</sup>や縄文時代中期の峯ヶ台貝塚、同後期の森町貝塚<sup>(3)</sup>、同中期～後・晩期の杉田貝塚<sup>(4)</sup>などの貝塚群が知られている。杉田貝塚と同一丘陵の頂部には、この地域では非常に稀な縄文時代晩期中葉～後葉の遺物が出土する地点が存在する。杉田遺跡<sup>(5)</sup>として学史的にも著名な遺跡である。弥生時代の遺跡は少ないが、佐藤内遺跡では弥生時代後期に属する資料が知られている。また、同遺跡の西側崖面<sup>(6)</sup>および屏風ヶ浦小学校<sup>(7)</sup>には古墳時代後期の横穴墓が知られている。



◎：杉田東漸寺貝塚 1：佐藤内遺跡 2：峰ヶ台貝塚  
3：杉田貝塚・杉田遺跡 4：森町貝塚 5：屏風ヶ浦小学校横穴墓

図1 遺跡の位置と周辺の遺跡（S = 1/25,000）

### 註

- 1 磯子区制50周年記念事業委員会 1978 『磯子の史話』
- 2 神沢勇一 1971 「佐藤内遺跡」『神奈川県立博物館発掘調査報告』5
- 3 西村正衛 1954 「横浜市屏風ヶ浦森町貝塚」『日本考古学年報』2
- 4 西村正衛 1961 「神奈川県横浜市杉田貝塚」『日本考古学年報』9
- 5 山田仁和 2001 「横浜市磯子区杉田貝塚 縄文時代中期～晩期にわたる貝層」『第25回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』神奈川県考古学会
- 6 横浜市教育委員会 1992 『横浜市文化財地図』
- 7 神奈川県 1979 『神奈川県史 資料編20 考古資料』

## 第2章 調査の経過

### 第1節 既往の調査

#### 1 遺跡の発見と最初の調査

1928年（昭和3）9月、「史的調査の目的を以って東漸寺に至る」に際し、中原小学校（当時）の新築工事現場にさしかかり、「偶然にも純然たる人為的貝層に遭遇した。これが本遺跡発見の端緒で、発見者は尾形順一郎と松下胤信の両名である。以後、工事の進捗に合せ、10カ月間にわたる数十回の実査が行なわれた。その成果は、『史前学雑誌』誌上に発表されている<sup>(1)</sup>。

貝層については、図2の「A点よりB点に至る四十米にして断続的に消滅し、遂に包含層近く全く其影を没する」とあり、西側のB点は遺物包含層が認められるが、貝層の分布が及んでいないことが窺える。貝層の形成時期については明言されていないが、土層堆積と遺物出土状況の観察から、弥生時代と判断しているようである。

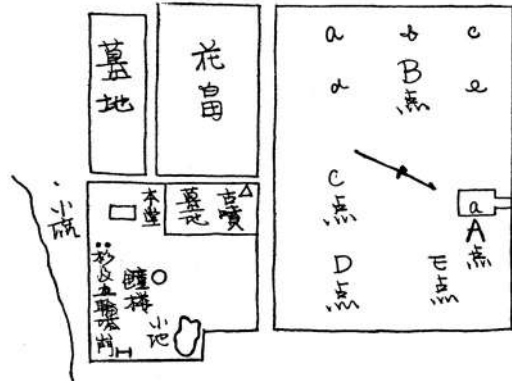


図2 1928～1929年調査時概略図  
註1文献『史前学雑誌』第2巻第2号より

#### 2 東漸寺釈迦堂の修理に伴う調査

1971年（昭和46）神奈川県指定文化財となった東漸寺釈迦堂の修理<sup>(2)</sup>が開始され、これに伴い、その翌年に釈迦堂基壇付近および本堂隣接地の発掘調査が実施された<sup>(3)</sup>。調査は数カ所に設定した小規模なトレンチ調査で、土層断面と遺物の出土状況の相関関係が観察・記録された。深さ約1mを掘削したCトレンチの所見により、土層は1～5層に分層された。要約するとおよそ次のようである。

第1層：埋土の混じる攪乱された層。

第2層：層厚約30cmの黒褐色土層で、下位約10cm位の層位に比較的多量の遺物を含むが、鬼高式・五領式の土師器が混在し、貝片・小魚骨も含まれる。

第3層：層厚約10cmの黒色土で、有機質を含む混貝土層をなす。貝層（第4層）を薄く覆うように堆積する。遺物の量もやや多く大形土器片も出土する。土器片は五領式か前野町式が多い。

第4層：厚い部分の層厚約30cmで不規則に堆積する純貝層。中位では五領式か前野町式の土器片がわずかに含まれる。魚骨等の量は割合多い。下部は混貝砂層で土器片が少量検出される程度。

第5層：鉄分を多含する黄褐色砂層で、無遺物層。湧水を見る。

以上の観察結果により、貝層を覆う黒色土（第3層）および貝層上部に弥生時代末～古墳時代前期の遺物包含層の存在が明確にされた。貝層の形成時期についてもこれに近い時期と判断されたといえる。

#### 註

- 1 尾形順一郎・松下胤信 1930 「横浜市杉田東漸寺貝塚の研究(1)～(3)」『史前学雑誌』第2巻第1・2・6号 史前学会
- 2 関口欣也 1971 「東漸寺釈迦堂」『神奈川県文化財図鑑 補遺編』神奈川県教育委員会
- 3 川上久夫・塚田明治・劍持輝久 1977 「横浜市東漸寺貝塚の調査」『横須賀考古学会年報』 20

## 第2節 校舎改築に伴う調査

### 1 横浜市教育委員会による試掘確認調査

2001年（平成13）8月30日、横浜市教育委員会文化財課による試掘確認調査が実施された。既存校舎の北側を対象とする調査で、小規模なトレンチ5区を設定して調査した。この結果、北東部に設定したトレンチ2区から貝層が検出され、遺物包含層の遺存も確認された。

### 2 平成14年度の調査（図3）

前年度の試掘確認調査の結果を受けて、平成14年度に事業地内北東部の本発掘調査（第1次本発掘調査）と新校舎建設予定地の確認調査を実施することとなった。以下が本報告書に係る調査経過である。

なお、校舎改築工事と発掘調査との工程計画のあらまは、次のとおりである。

平成14年度 第1次本発掘調査（既存校舎基礎撤去時の防震施設設置部分） 仮設校舎建設・既存校舎解体工事 新校舎建設部分の確認調査

平成15年度 確認調査の結果により第2次本発掘調査 防震施設設置工事 既存校舎基礎撤去工事 新校舎建設工事

#### （1）第1次本発掘調査

調査対象地が狭長な上、既存校舎の解体工事に先行して発掘調査を実施する関係で、掘削土の仮置き場を十分確保できない状況にあった。調査にあたっては、長さ4～6mを1区として5区に分割し、1区ずつ埋め戻しながら作業を進めることとした。さらに、校舎に沿って敷設されているガス・水道等の埋設管の存在により、調査区の幅が狭められ、結果としてトレンチ調査に類するものとなった。

西側を「1区」とし、順次東側へと調査を進めることとした。平成14年9月10日に準備作業を開始し、12日に1区の調査に着手した。途中、埋設管の存在が障害となり、調査が難航する場面もあったが、10月15日までに現地作業をほぼ終了し、18日にすべての撤収を終了した。調査実施面積は約60㎡であった。



写真1 第1次調査前近景（北東より）



写真2 第1次1区掘削風景（西より）

#### （2）確認調査

既存校舎本体部分の解体工事終了後、新校舎建設予定地約1,400㎡を対象として確認調査を実施した。幅2m、長さ4～8mの調査区14区を設定し、平成15年3月3日～17日の期間で実施した。南西部の1～3トレンチの掘削から着手し、次いで解体した校舎の基礎部分を西側の4トレンチから東側の9トレ

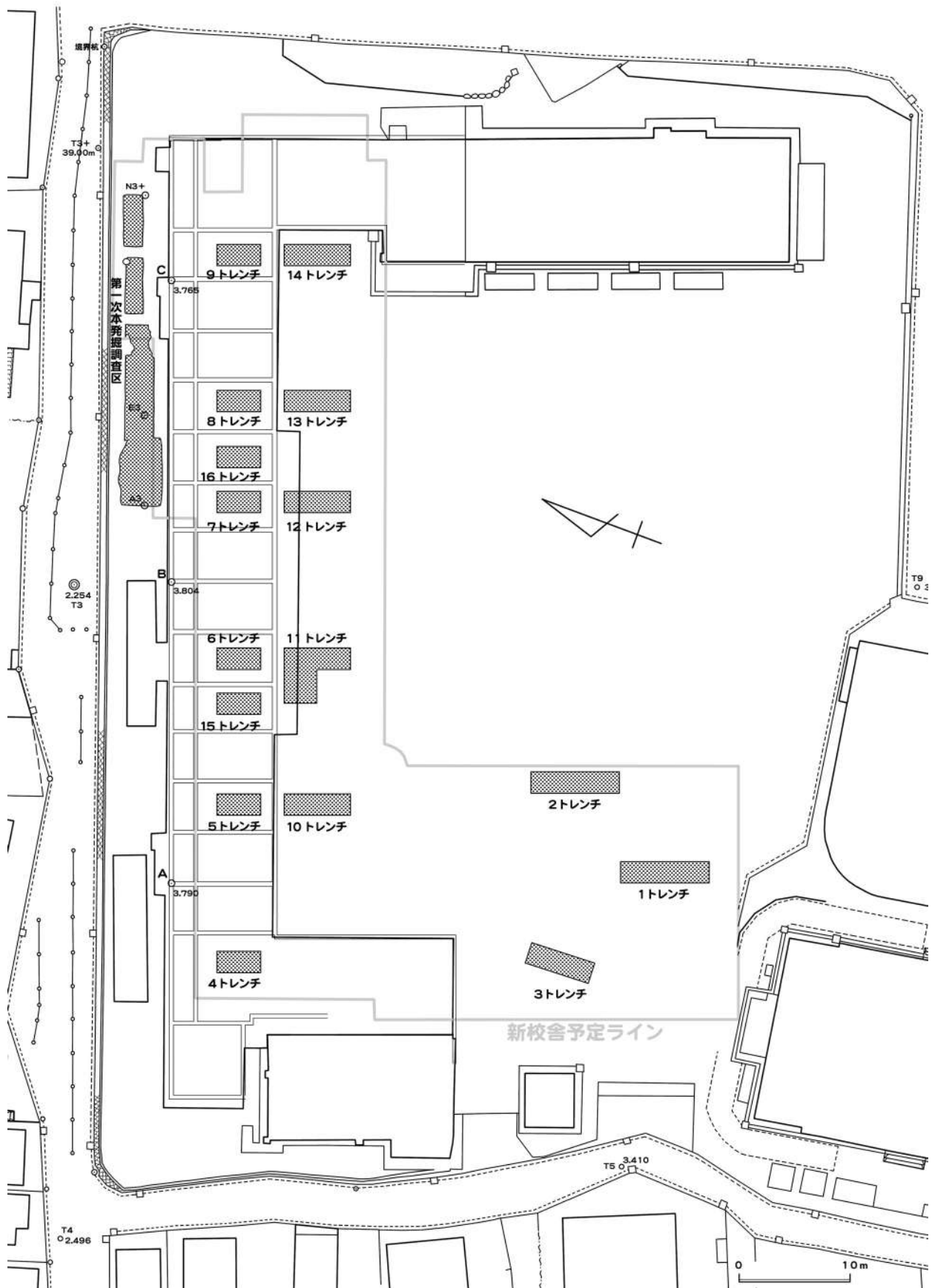


図3 第1次本発掘調査区・確認調査トレンチ配置図 ( S = 1/500 )

ンチに向って順次掘削し、基礎部分の終了後に旧校舎南側の校庭部分を同じく西側の10トレンチから東側の14トレンチに向って調査を進めた。最後に、基礎部分の15・16トレンチおよび11トレンチ拡張区を追加して掘削し、調査を終了した。調査実施面積は、177㎡であった。

### 3 平成15年度の調査

確認調査の結果により、新築校舎部分約1,400㎡を対象として本発掘調査を実施することとなった。調査にあたっては、調査区全域をカバーするように8m四方の大調査区を設定し、南北方向を北から「A・

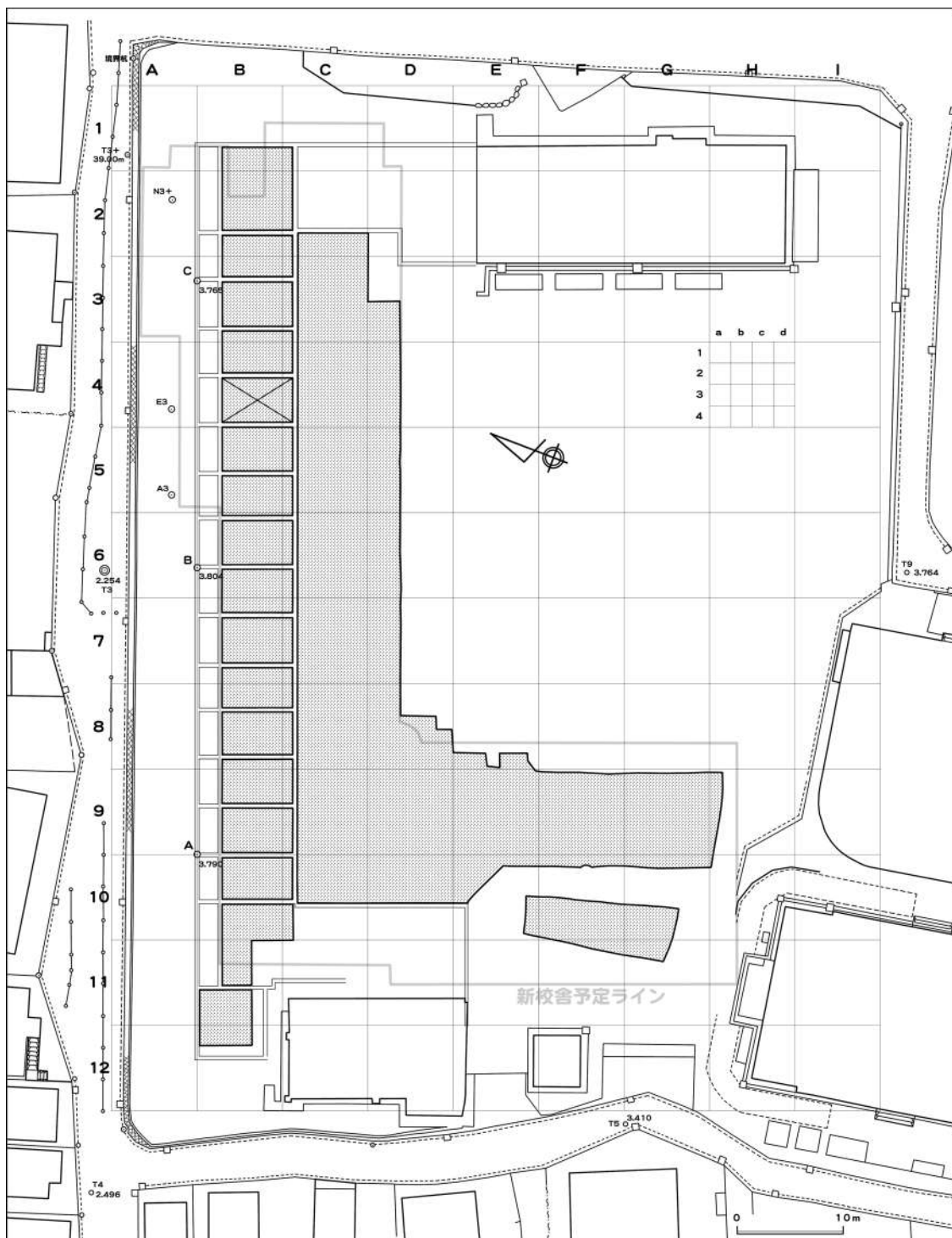


図4 本発掘調査 調査区全体図 ( S = 1/600 )

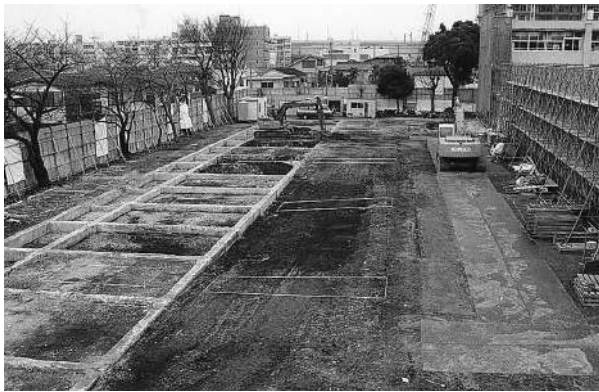


写真3 確認調査調査前近景（西南西より）



写真4 南西部確認調査調査前近景（北西より）

B・C」とアルファベット大文字で、東西方向を東から算用数字で表すこととした。また、各大調査区を2m四方で16分割し、同様に南北方向を北から「a・b・c」とアルファベット小文字で、東西方向を東から算用数字で表すこととした（図4）。

調査を進めるにあたっては、掘削土を場内で処理することとし、仮置き場を確保しつつ実施する必要がある。そのため、「L」字を呈する調査範囲の南西部から調査に着手し、終了部分を埋め戻して掘削土の仮置き場を確保することとした。南西部の調査終了後、解体校舎（旧校舎）の基礎部分を順次西から東へと進め、さらに旧校舎南側の旧校庭部分の表土除去作業を東から西に向かって折り返すこととした。この部分の遺構調査は、表土除去作業とは逆に、西から東へと進めることとした。

調査は、4月3日に調査区の設定作業を行ない、翌4日から調査区南西部の表土除去作業に着手した。4月23日に至って人骨が出土し、墓地の存在が明らかとなった。この部分は、確認調査の際に防護壁が敷設されており、試掘不能なエリアに相当し、本発掘調査に予想外の時間を要することとなった。5月16日に、墓地の主要部の調査を終了し、解体校舎の基礎部分の調査に着手した。基礎枠内を1区ずつ表土除去、遺構確認、遺構調査、記録作業を繰り返し、確認調査時に貝層が検出されていた部分を除き、6月16日まで要した。その後、旧校庭部分の表土除去作業・貝層の調査・検出遺構の調査を進め、7月23日に現地作業を終了した。

なお、調査期間中6月23日と27日に、杉田小学校の全校生徒・教職員、保護者・地域の方々を対象とする見学の機会を設けた。保護者・地域の方々には、27日の午後の時間帯で実施し、約100人が参加した。



写真5 遺跡見学会のようす1（事前説明）



写真6 遺跡見学会のようす2（調査現場の見学）

### 第3章 発掘調査の結果

#### 第1節 遺跡の基本層序

調査地の地表面での標高は、ほぼ3.8～4mを測る。全域にわたって整地されており、最上層は、これに伴う盛り土（攪乱土）であった。一方、基盤をなす砂層上面の標高は、調査区西側でおよそ3.5m、東側で2.4mを測り、約1mの比高差をもって西側が高く、東側が低い。調査区北西隅部付近では、整地層直下が砂層であり、遺物包含層は遺存しなかった。したがって、整地層の層厚は西側が薄く東側が厚い。また、遺物包含層は、東側ほど遺存状況が良好であった。

遺構の確認面は、中世以降の墓地が層中であつたのを除き、その他はいずれも砂層上面であつた。以下に、本遺跡の基本土層について説明する。

層：黒色土 砂利等を多含する盛り土層。層厚は、場所により異なる。粘性弱く、校庭部分は硬質。色調明るい。

層：黒色土 層厚約30cmの旧表土層。細粒・軟質で、粘性の弱い土質。場所により上下2層に分層が可能。墓地部分においては、原位置を止めない人骨の混入が認められる。a層は層厚15～20cmの黒褐色に近い色調を呈する。黄色粒をやや多く、赤褐色粒を少量含む。旧校庭部分では、上部が填圧され硬く締まっている。b層は、a層同様層厚15～20cmを測る。a層よりさらに粘性弱く軟質で、黒色味がより強い。黒色スコリアをやや多く、赤褐色粒を少量含む。

層：黒色土 層厚約20～30cmを測り、層より黒色味が強い。細粒・軟質（層よりやや硬質）で、黒色スコリアを多く、微細な黄白色粒少量、赤褐色粒を微量含む。部分的に混土貝層として存在し、また、貝層を覆っている。古墳時代前期を主体とする遺物包含層である。場所により灰黒色を呈する極軟質な砂質土（b層＝層との漸移的な層）として存在する。遺物はほとんど伴わないが、微量の摩耗した縄文土器片の出土が確認されている。

層：基盤をなす砂層以下を一括する。砂層は灰黄褐色を呈するが、部分的に褐色味の強い場所も存在する。上部に自然貝層が存在する部分もあり、当初層中の人為的な貝層との判別が困難であった。調査区北東部の1-1号溝状遺構壁面の観察では、層厚約40cmの砂層下に約20cmの混砂・シルト岩自然貝層、10cmの混破碎貝灰黒色砂層、10cmのシルト岩層、25cmの混シルト岩自然貝層、混貝シルト岩層の堆積が観察されている。

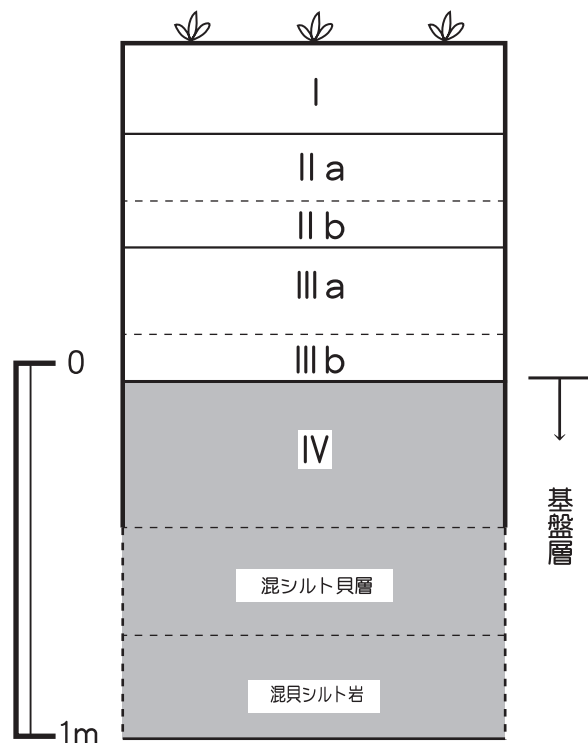


図5 土層模式図 (S=1/20)

## 第2節 第1次本発掘調査の結果

5区に分割し、西側を「1区」として、順次埋め戻しながら調査を実施した。調査区が狭い上に、校舎と平行する埋設管が存在したため、調査可能範囲がさらに限定された。貝層1カ所、井戸状遺構1基、溝状遺構1条が検出された。検出遺構はすべて部分的な調査にとどまり、完掘されたものはない。

1区では、層厚約65cmの客土層（層）下に10cm程の旧表土層（層）を介して30cm程度の厚さで層相当層が認められた。調査区北西端部付近の砂層（層）上面の標高は、およそ2.6mである。西端部で深さ約10cmの黒色土の落ち込みの一部が検出されたが、出土遺物もなく遺構と認定できなかった。

2区から3区にかけて、層中より貝層が検出された。下部は層にほぼ接しており、約30cmの堆積が認められた。3区北東端部での層上面の標高は2.3mを測る。

4・5区では遺構が検出されなかった。4区では、砂層を掘り込むゴミ穴や北西 南東方向の土管埋設溝などの攪乱が存在した。この部分の客土層は約1mに及ぶ。層上面の標高は2.3m程である。

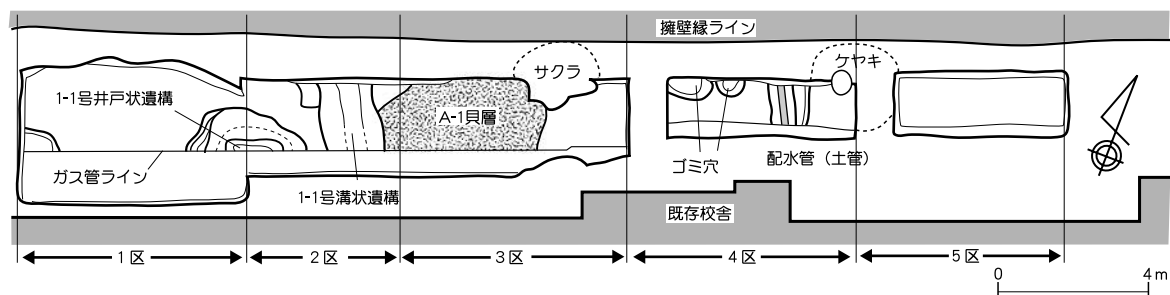


図6 第1次本発掘調査区全体図（S = 1/200）

### 1 1-A貝層（図7、写真7～9）

2区東端部から3区で検出された。東西約4.5mの広がりを持ち、西端部は1-1号溝状遺構に切られている。層が貝層を覆い、貝層は5層に分層される。1層は、貝の密度が高く、破損度の低い貝を多く含む。2層は、破碎貝を主体とする混貝土層で、砂を多く含んでいた。3層は、灰色味を帯びた破碎貝層で、砂を含んでいる。上面は明瞭な面を形成し、人為的に踏みならされた可能性が考えられる。4層は、2層に類似した混貝砂層で、上面は3層から連続する面を形成している。5層は、軟質灰褐色砂層に破碎貝を混入する混貝砂層である。

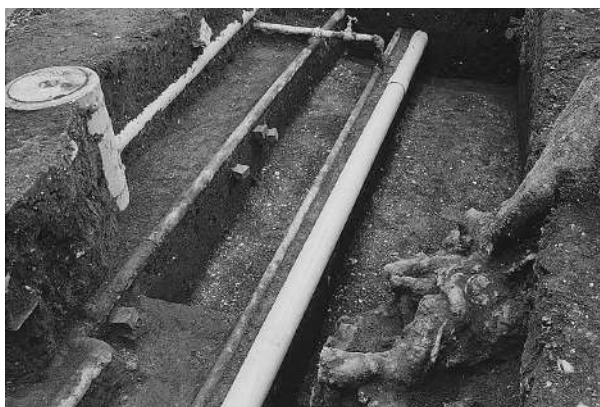


写真7 1-A貝層検出状況（北東より）



写真8 1-A貝層貝層断面（北より）

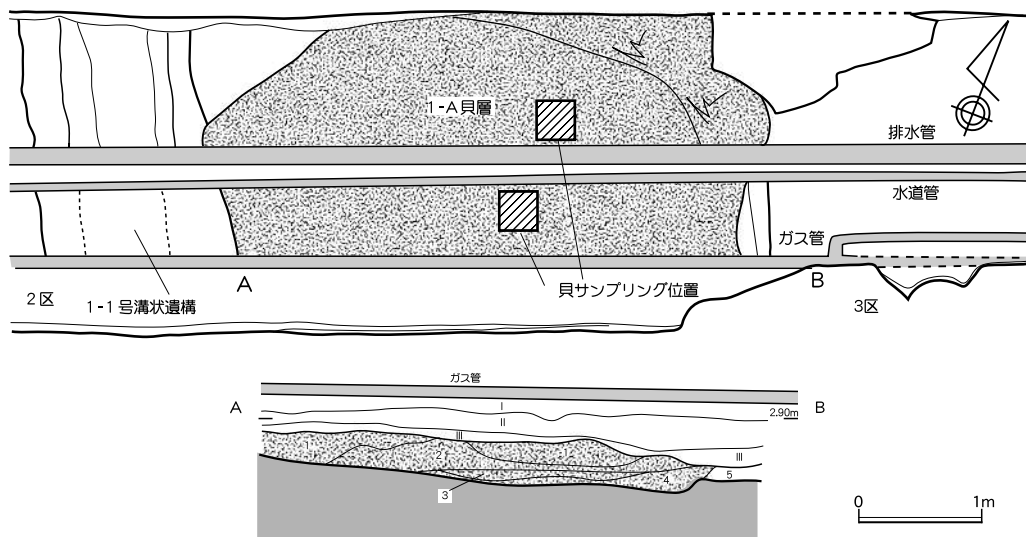


図7 1-A貝層実測図 (S=1/60)

以上のうち、破碎貝を含む3層以下は、自然堆積層の可能性が高く、1・2層が人為的に形成された貝層と考えられる。貝種は、ハマグリを主体とし、アサリ・シオフキガイ・アカニシ・キサゴ・ウミニナなどが見られる。

出土遺物は微量で、2001~2003の3点の土器片を図示し得るのみであった(図9)。2001は壺胴部下半の破片、2002と2003は八ケ目調整甕の頸部破片である。いずれも古墳時代前期に属するものであり、貝層の形成時期もこの時期に比定される。



写真9 1-A貝層出土の貝

## 2 1号井戸状遺構 (図8、写真10~12)

1区東端部から2区西端部にかけて位置する。南側はガス管等の埋設管により、調査不能であった。調査区境界部に存在することから、調査は2分割して実施した。確認面はb層上面である。覆土は細粒、軟質で粘性の弱い黒色土を主体とする自然堆積土であった。掘り込み面は、層より上位にあるものと考えられるが、土層断面の観察では明確にできなかった。やや不整な隅円方形を呈するものと推定される。規模は、東西上端で3.1m、同下端で1.4m、深さ0.86mを測る。底面では湧水が見られた。その性格は明らかでないが、井戸状の遺構と推定した。



写真10 第1次1区掘削後全景(南西より)

出土遺物(図9)は少量あり、1001のかわらけ、

2004のS字状口縁台付甕口縁部、2005・2006の陶器甕胴部片を図示した。2004は混入品で、2006は常滑焼と思われる。これらの出土遺物と覆土から、本址の所産時期は中世に属するものと考えられる。



写真11 1-1号井戸状遺構（北東より）



写真12 1-1号井戸状遺構東側部分（北東より）

### 3 1-1号溝状遺構（図8、写真13～15）

本址は、2区東端部に位置する北北西 南南東の走行方向を示す溝状の遺構である。長さ約1.8mが調査可能であったに過ぎない。確認面は b層上面であったが、土層断面の観察により a層上面より上から掘り込まれていることが確認された。覆土は、細粒、軟質で粘性に乏しい黒褐色土を主体とする自然堆積土と観察された。

規模は、上端の幅1.4～1.5m、下端の幅0.5m、確認面からの深さ約1.5mを測る。底面は、標高約1.45mで、破碎貝混じりのシルト岩層に達し、湧水を見る。南側は埋設管に阻まれ、底面まで掘り上げることができなかつたため、そのレベルは不明であるが、排水溝としての機能をもっていたと考えられる。

出土遺物（図9）は少なく、大半が混入品と考えられる。1002と2010～2012は、中世に属するもの

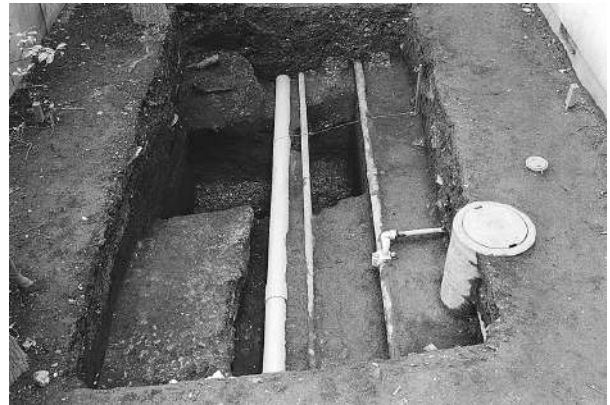


写真13 第1次2区上部掘削後全景（南西より）

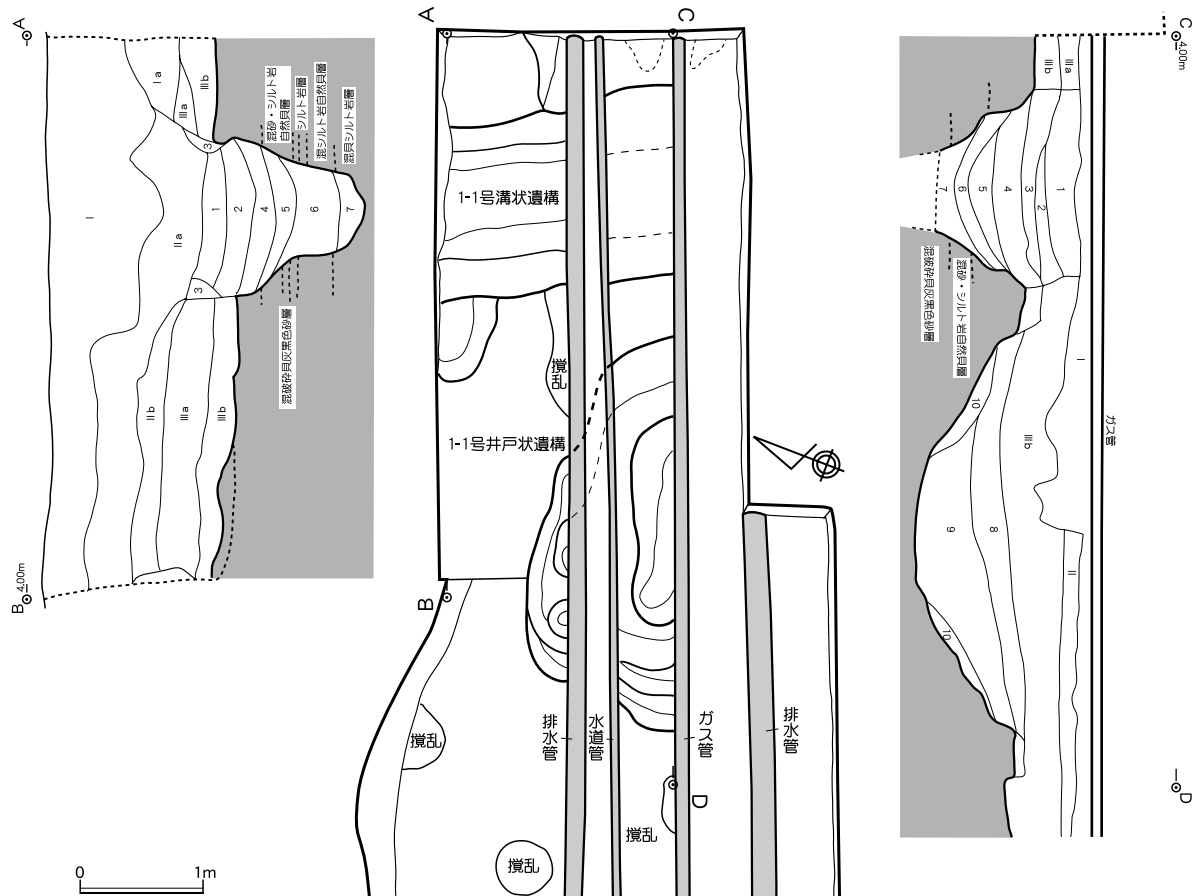


写真14 第1次2区下部掘削後（南西より）



写真15 1-1号溝状遺構（東より）

で、1002と2010・2011はかわらけ、2007は古墳時代前期の甕口縁部、2008は土師器坏口縁部破片で、内面に縦方向の浅く細い線刻がある。2009は須恵器甕の肩部破片で、白斑が認められる。2012は須恵器甕の胴部破片である。4001は、管状土錘で一部を欠く。重量は残存部で2.1 gを測る。これらの遺物と覆土から、中世以降の所産と考えられる。



1-1号溝状遺構 (A-B)

- 1: 褐色土 土粒細。粘性弱。軟質。粗粒スコリア多、褐色砂粒極多。シルト岩ブロック (径1cm大) 微量。
- 2: 黒褐色土 土粒細。粘性弱。軟質。褐色砂粒やや多。やや明るい。
- 3: 黒褐色土 土粒細。粘性弱。軟質 (1・2層より硬質)。褐色砂粒少、シルト岩ブロック (径3cm大) 微量。1・2層より黒色味強い。
- 4: 黒褐色土 土粒細。粘性弱。軟質 (3層に類似)。褐色砂粒少。3層より黒色味強い。
- 5: 黒褐色土 土粒細。粘性弱。軟質 (3・4層より硬質)。褐色砂粒やや多。4層よりやや明るい。
- 6: 褐色土 土粒極細。粘性弱。軟質 (3層に類似)。黒色土主体、褐色砂粒極多。
- 7: 黒色土 土粒極細。粘性弱。極軟質。灰黄色砂粒・破砕貝殻やや多。やや明るい。

1次2区北壁 (C-D)

- 1: 黒褐色土 土粒細。粘性弱。軟質。粗粒スコリア多、褐色砂粒小。やや明るい。
- 2: 黒褐色土 土粒細。粘性弱。軟質 (1層より軟質)。褐色砂粒やや多。褐色味強い。
- 3: 黒色土 土粒細。粘性弱。極軟質。粗粒スコリア多。III層の流入土。
- 4: 黒褐色土 土粒細。粘性弱。軟質 (2層に類似)。粗粒スコリア・褐色砂粒やや多。
- 5: 褐色土 土粒極細。粘性弱。軟質 (2層に類似)。黒色土主体、褐色砂粒極多。
- 6: 黒色土 土粒極細。粘性弱。極軟質。灰黄色砂粒・破砕貝殻やや多。やや明るい。
- 7: 黒色土 土粒極細。粘性弱。砂質。極軟質。灰黄色砂粒・破砕貝殻極多。

1-1号井戸状遺構

- 8: 黒色土 土粒細。粘性弱。軟質 (IIIa層より軟質)。砂粒やや多。やや明るい。
- 9: 黒色土 土粒細。粘性弱。軟質 (IIIa層に類似)。砂粒多、赤褐色粒少。やや明るい (8層より黒色味強い)。
- 10: 灰黒色土 土粒細。粘性弱。軟質。黒色土主体、砂粒極多。灰黄色味強い。

図8 1-1号井戸状遺構・1-1号溝状遺構実測図 (S=1/60)

4 包含層出土の遺物 (図10)

包含層出土の遺物は、総体的に少なく、細片が多い。古墳時代前期および中世の土器・陶磁器を主体としている。表土層ないし攪乱土より現代の磁器類、4区の層 (旧表土層) 中で「KOKUEKIMACH」銘のある金属製マッチ入れの残欠品1点が出土している。これらについては割愛した。

1区出土遺物は、1003・2013~2017が古墳時代前期に比定されるもので、1003が口唇部を欠く手捏の小型鉢形土器、2013が内外面に赤彩が施される複合口縁壺形土器の頸部、2014が壺形土器の胴部

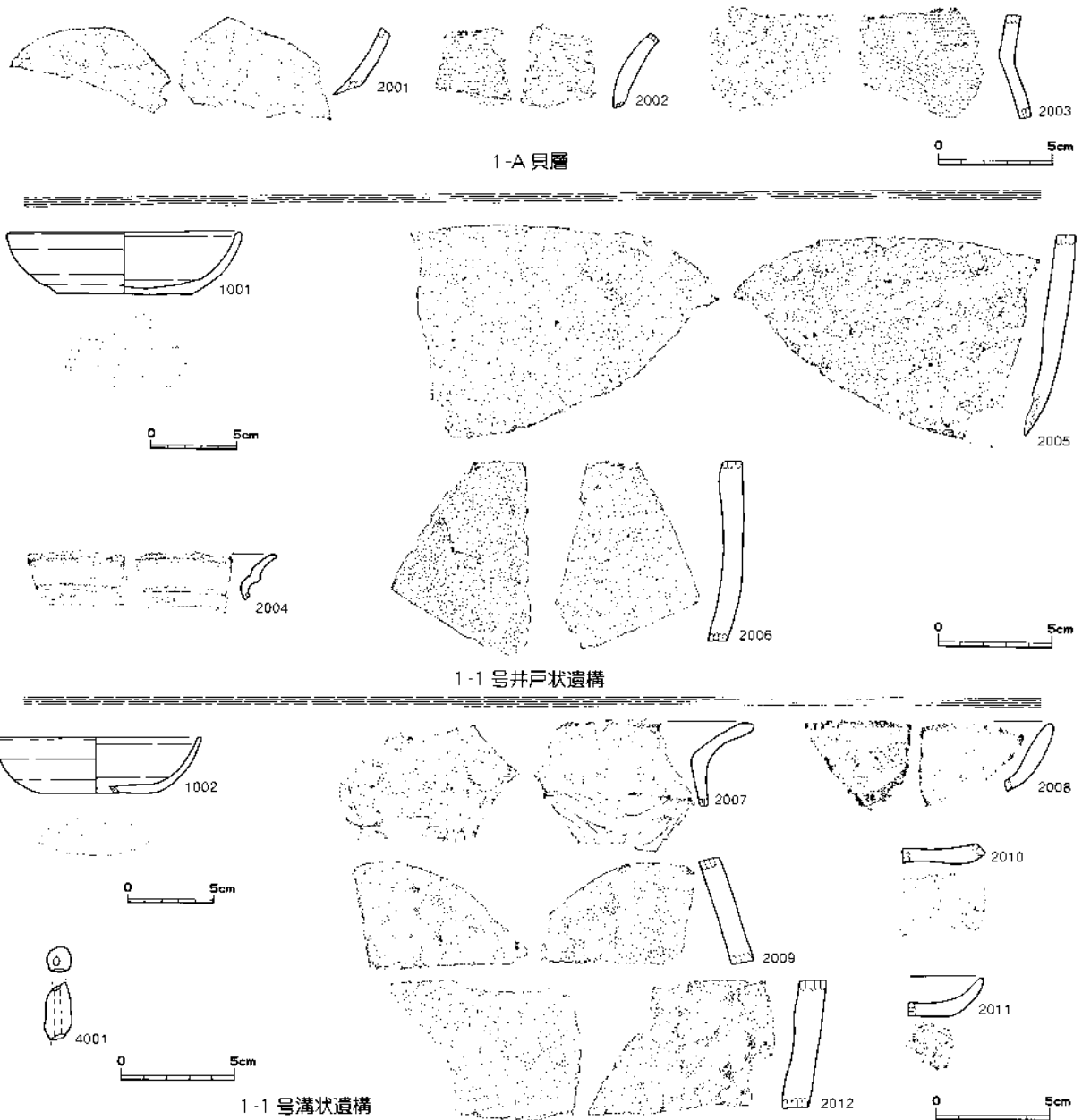


図9 第1次本発掘調査遺構出土遺物実測図



写真16 第1次4区掘削状況(南西より)



写真17 第1次5区掘削状況(東北東より)

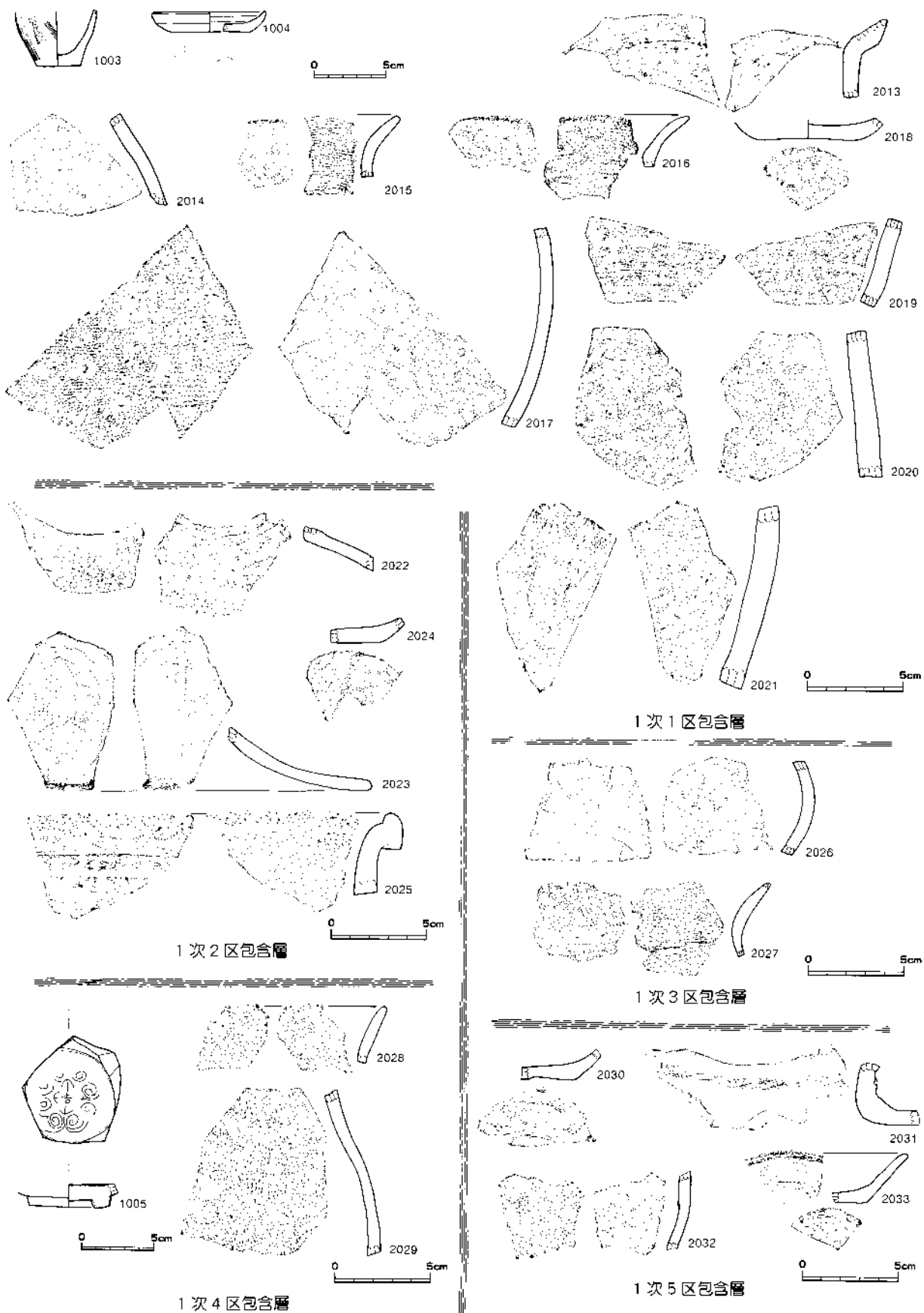


图10 第1次本発掘調査包含層出土遺物実測図

破片、2015・2016が甕形土器口縁部破片、2017が胴部破片である。中世の遺物は、1004・2018のかわらけ、2019～2021の陶器がある。1004は、復原口径8cm、底径5.4cm、器高1.5cmの小型品である。陶器はいずれも壺ないし甕の胴部破片で、2019は須恵器の可能性もある。2020は常滑焼であろう。

2区出土遺物は、破片資料4点を図示した。2022は壺形土器肩部破片で、赤彩されている。2023は高坏脚部破片で、外面に赤彩が施されている。以上の2点は、古墳時代前期に属するものである。2024は、かわらけ底部破片、2025は常滑焼壺形土器口縁部破片である。

3区出土遺物は、古墳時代前期に属する破片2点のみ図示した。2026は小型精製壺形土器胴部破片で、内外面に赤彩が施されている。2027は甕形土器頸部破片である。いずれも表土層からの出土である。

4区出土遺物は、いずれも表土層から出土した3点を図示した。1005は高台付青磁碗の底部破片である。見込み部中央に「吉」の字を配し、矢印状文を四方に描き、その外周に唐草文が配されている。2028と2029はハケ目調整の甕形土器口縁部、および肩部から胴上部の破片である。

5区出土遺物は、4点を図示した。2030はかわらけ底部破片で、外面にスノコ痕が認められる。2031は壺形土器頸基部破片で、ハケによる疑似縄文風の刻みを伴う隆帯が巡らされている。2932は外面ハケ目調整の甕形土器胴部片で、内面に輪積み痕が認められる。この2点は古墳時代前期に比定され、2031は東海系土器であろう。2033は平安時代の須恵器坏の破片で、底部外面は回転糸切り痕がある。

### 第3節 確認調査の結果

トレンチ（以下、「T」と表記）法による調査の結果、全域に攪乱が及んでいるが、遺物包含層は調査区東側で比較的良好に遺存することが判明した。また、12Tと16Tを結ぶラインのほぼ東側に貝層が存在すること、遺構は中世のものも存在することが明らかになった。結果については、表1にまとめる。

表1 確認調査結果一覧

トレンチ番	長さ (m)	確認面	掘削深度 (cm)	検出された遺構	出土遺物
1T	2×8	層	63	中世の掘り込みおよび近世以降の方形状掘り込み。	古式土師器、かわらけ
2T	2×8	層	63	中世以降の掘り込み1。	古式土師器、中世の土器片
3T	2×6	層	63	中世の溝状遺構1。	古式土師器、中世の土器片
4T	2×4	層	24	中世以降の溝状遺構または落込み1。	古式土師器、中世の土器片少
5T	2×4	層	91	なし。包含層も遺存しない。	古式土師器、中世の土器片
6T	2×4	層	70	黒色土を覆土とする落込み1。	古式土師器、中世の土器片
7T	2×4	層	53～75	黒色土を覆土とする落込み1。	古式土師器、中世の土器片
8T	2×4	層	90	ほぼ全面旧校舎のコンクリート基礎。	攪乱土より土器片少
9T	2×4	層	85	なし。	古式土師器、中世の土器片
10T	2×6	層	55～70	なし。	古式土師器、中世の土器片
11T	2×6	層	30～68	中世の土坑1、古墳時代前期のピット状落込み3。 1穴に大型土器破片。南側の攪乱著しい。	古式土師器・土錘、中世の土器片。
11T拡張区	3×3	層	32		
12T	2×6	層	73	層中に貝層1（2層あるか？）。	古式土師器、中世の土器片
13T	2×6	層	140～160	8Tから続く旧校舎の基礎。南端部は層が遺存。	土器片少
14T	2×6	～層	100	北東半部に層（混貝土層）が遺存。	古式土師器・中世の土器片
15T	2×4	層	44	中世以降の黒色土の落込み1。	古式土師器・中世の土器片
16T	2×4	層	52	層中に貝層あり。	古式土師器・中世の土器片少

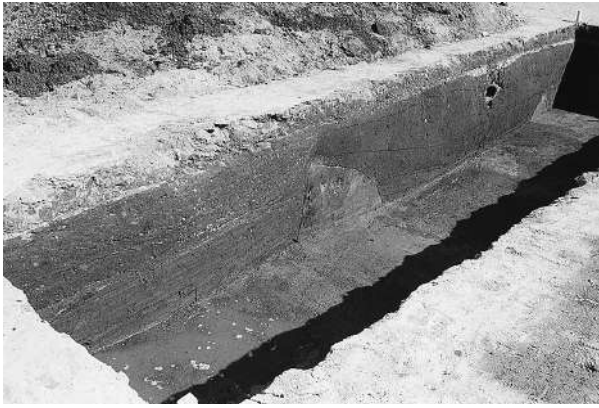


写真18 1 T東壁土層断面（西より）



写真19 3 T溝状遺構検出状況（北より）



図11 確認調査トレンチ出土遺物実測図1

出土遺物は、古墳時代前期と中世に属する土器類を主体とし、古墳時代後期～平安時代に属するものが少量、弥生時代後期および縄文時代に属するものが微量存在する。縄文土器はいずれも摩耗が著しく、波に洗われていたものと推定される。4・8・13・16Tの出土遺物は図示しうるものがなかった。

1 T 出土遺物は、6点を図示した。2034は壺形土器底部破片で、内面ハケ目調整、外面ナデ調整が施されている。2035は甕形土器口縁部破片で、口唇部に面を有する。以上の2点は古墳時代前期に属するものである。2036と2037はかわらけ底部破片、2038と2039は中世陶器甕形土器の胴上半部破片で、2038の外面にはスタンプ文が認められる。瀬戸・美濃系と考えられる。いずれも表土層出土である。

2 T 出土遺物は、表土層出土の2点を図示した。1006は精製の埴形土器で、外面に赤彩が施されてい

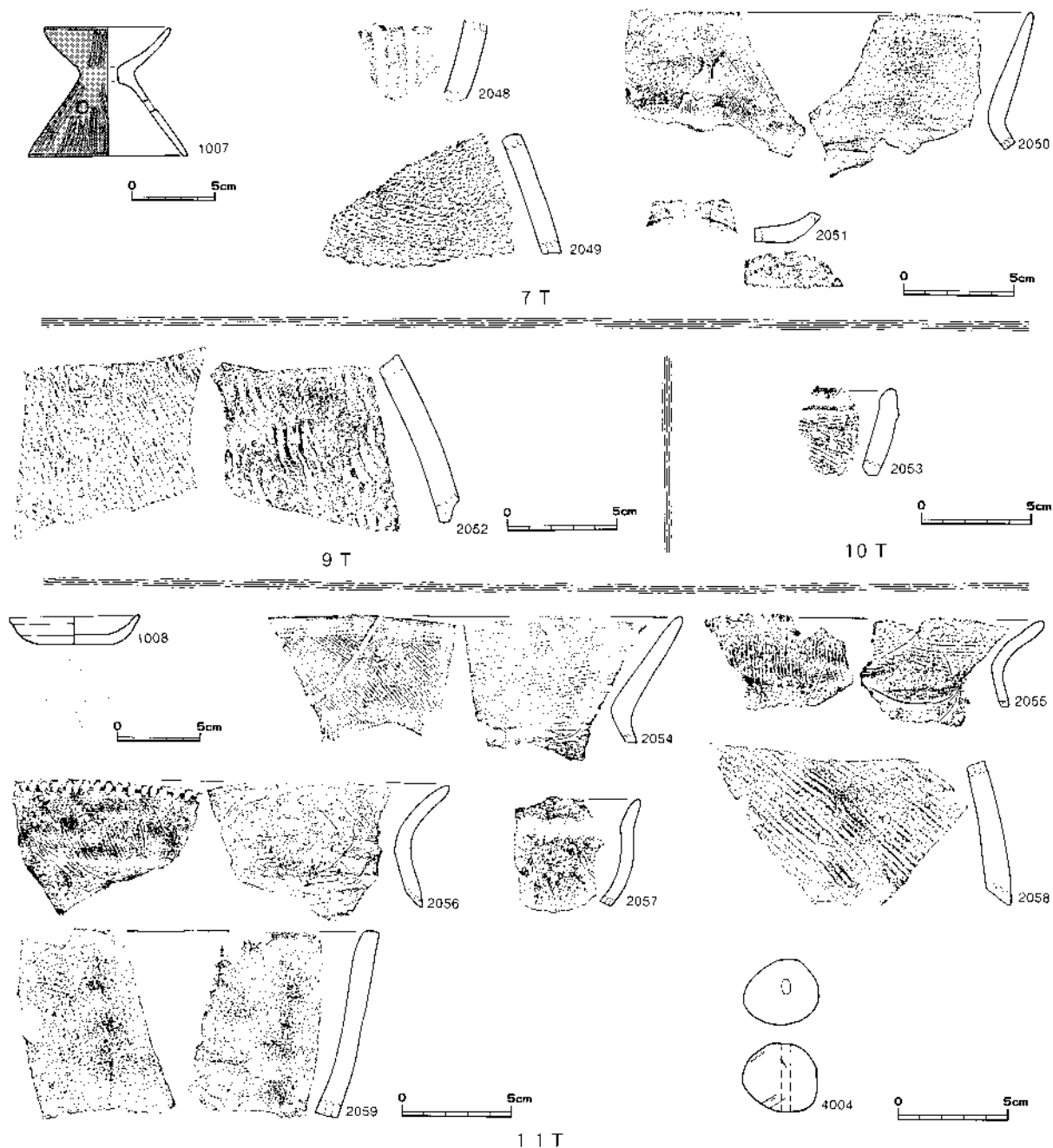


図12 確認調査トレンチ出土遺物実測図2

る。4002は動物形土製品と考えられるもので、長さ7.6cmを測る。図の左側の両脇に耳のような突起があり、顔に相当する部分を欠いている。その反対側の上部には尻尾とみられる突起がある。足は一部を欠くが、折り曲げられて表現されている。かがんだポーズをとる犬あるいは猪の類いと思われる。

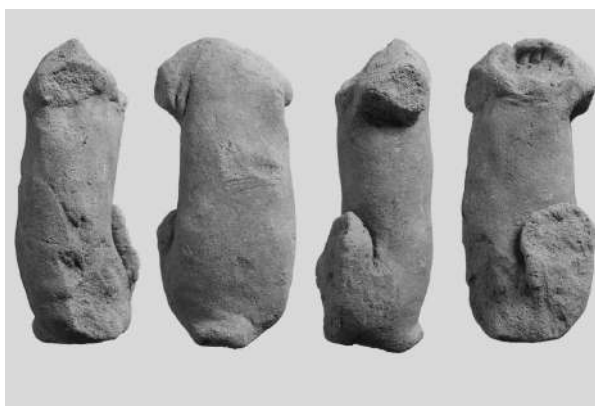


写真20 4002展開写真

3 T出土遺物は、2040の壺形土器口縁部破片、2041・2043の甕形土器口縁部破片が古墳時代前期に属するものである。2042は須恵器甕胴部破片で、平安時代のもと考えられる。2044・2045は、かわら

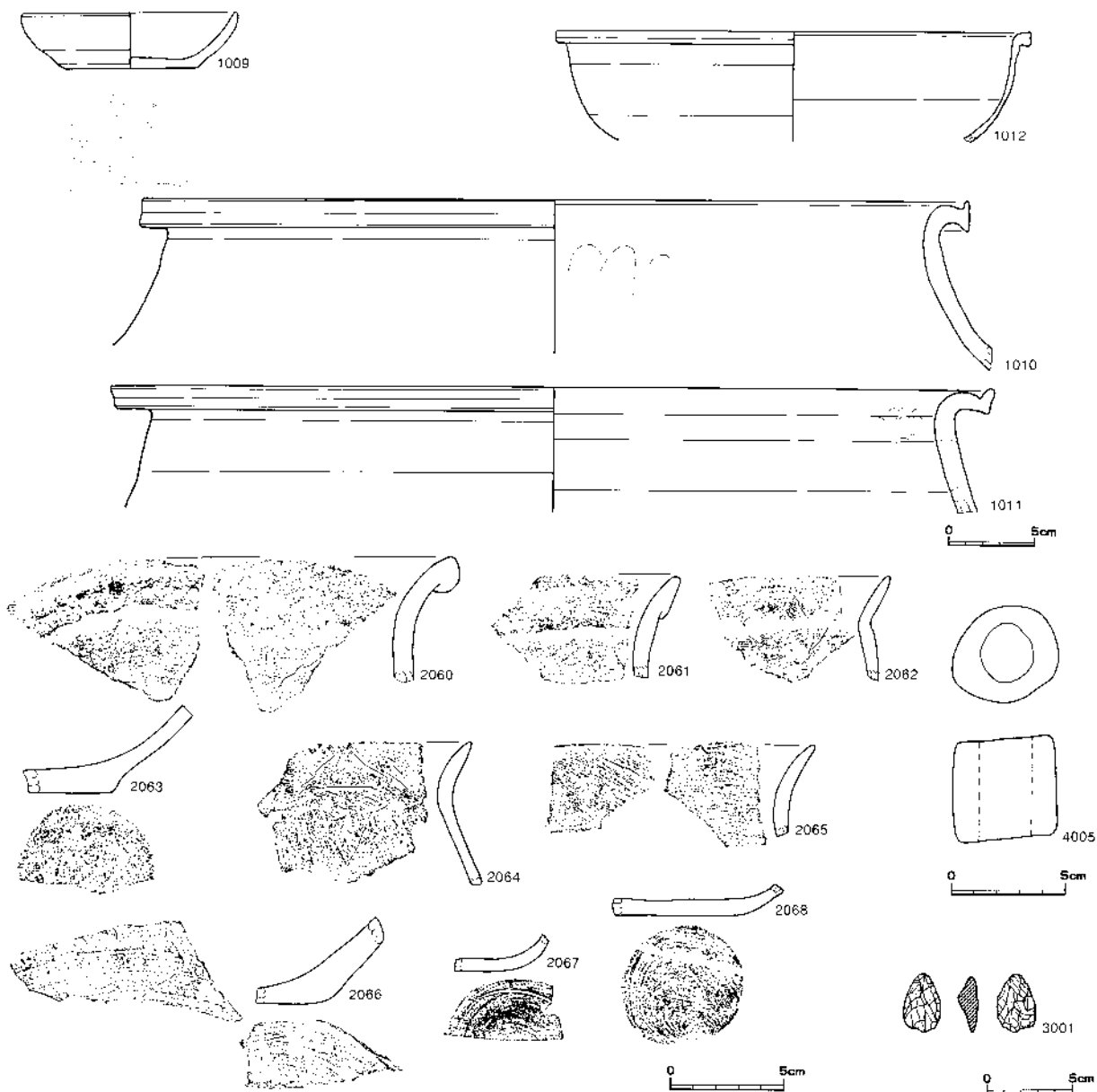


図13 確認調査トレンチ出土遺物実測図3

け底部破片である。4003は管状土錘である。一方の先端部の一部を欠く。残存長4.2cm、外径1.2cm、重量7.0gを測る。表土層の出土で、所属時期を特定できない。このほか、緑釉陶器皿の細片1点がある。

6 T出土遺物は僅少であり、2点のかわらけ片(2046・2047)のみ図示した。

7 T出土遺物は、5点を図示した。1007は精製小型器台で、外面に赤彩が施されている。口径7.6cm、脚端部径9.7cm、器高7.9cmを測る。表土層からの出土である。2048は従位の沈線が見られる後期縄文土器片である。2049はアミ目状文が施される後期弥生土器壺の肩部破片である。2050は甕形土器口縁部破片である。2051はかわらけ底部破片、以上のうち、1007と2050が古墳時代前期に比定される。

9 T出土遺物は、2052の須恵器甕胴部破片のみを図示した。表土層出土である。外面に平行叩き目、内面当て具痕が残されている。胎土には白色海綿体骨針が含まれ、断面の色調はセピア色を呈する。古墳時代後期に比定される。

10 T出土遺物は、2053の短頸広口壺ないし鉢形土器口縁部破片1点のみ図示した。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には粗砂・細礫が目立つ。表土層の出土である。

11 T出土遺物は、1008が完形のかわけで、トレンチ壁面の崩落土から出土である。口径7.8cm、底径4.4cm、器高1.8cm小型品で、底部外面に回転糸切り痕が残されている。2054は壺形土器口頸部破片で、口唇部外面がヨコナデ調整されている。2055と2056は甕形土器口頸部破片で、2056の口唇部外面に刻み目が施されている。2057は小型短頸埴の口縁部から胴部の破片で、内外面に赤彩が施されている。2058は須恵器甕胴部破片である。外面に平行叩き目、内面ナデ調整が施されている。2059は常滑焼とみられる鉢の口縁部破片である。4004は球状土錘で径3.2cm、重量34.4gを測る。表土層の出土である。

12 T出土遺物は比較的多く、図示可能なものもやや多い。1009は推定口径12.5cm、同底径7.6cm、器高

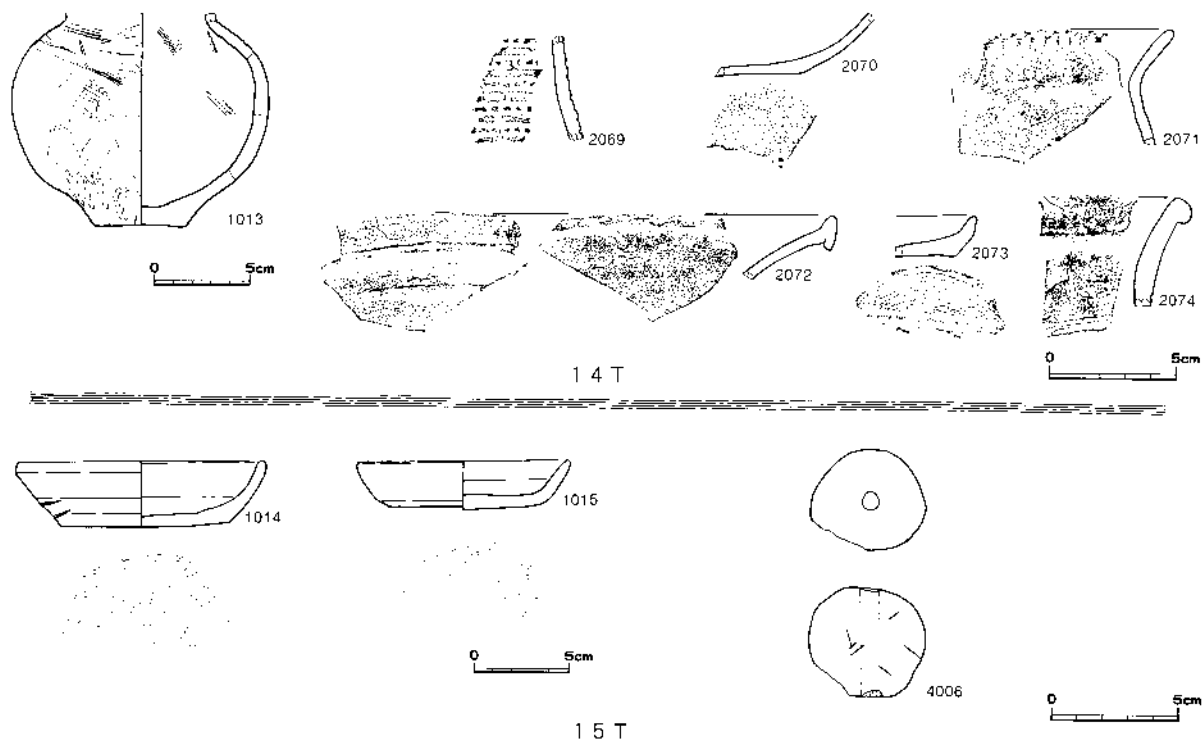


図14 確認調査トレンチ出土遺物実測図4

3.3cmを測るかわらけで、底部外面に回転系切り痕を残す。1010と1011は常滑焼とみられる甕の口縁部破片である。1012は瀬戸・美濃系の盤である。2060は口縁部内面に羽状縄文を施す折返し口縁壺形土器で、弥生時代後期に属するものである。出土層位は 層下部である。2061と2062は比較的小型の壺形土器口縁部破片、2063は同底部破片である。2064と2065は甕形土器口縁部破片である。これらは層下部から出土したものである。2066は須恵器壺底部破片で、平安時代に属するものと思われる。2067と2068はかわらけ底部破片である。3001はチャート製の石鏃で、層下部からの出土である。長さ3.4cm、幅2.2cm、重量7.5gを測る。4005は筒形を呈する管状土錘で、層下部からの出土。長さ・径とも4.4cm、重量100.1gを測る。

14T出土遺物は、7点の土器を図示した。1013は表土層から出土した頸部以上を欠く小型壺形土器である。2069は5段の横位半截竹管刺突文が見られる薄手の縄文土器片で、前期北白川 式に比定される。表土層からの出土で、摩耗著しい。2070は薄手のつくりの小型壺形土器胴下半から底部にかけての破片で、胴部外面に赤彩の痕跡がある。5071は口唇部に刻み目のある甕形土器口縁部破片である。いずれも表土層出土。2072は須恵器甕口縁部破片で、胎土は緻密、焼成も良好である。層上部より出土。東海地方産であろう。2073はかわらけで、器高1.6cmの小型品である。2074は陶器壺口頸部破片である。頸基部に横位の沈線が認められる。瀬戸・美濃系と思われる。

15T出土遺物は、表土層から出土したかわらけ2点と球状土錘1点を図示した。1014は口径13.2cm、底径8.2cm、器高3.5cmを測り、1015は推定口径11.4cm、器高2.6cmを測る。胎土には白色海綿体骨針が含まれる。1014の底部外面には回転系切り痕とスノコ痕が残る。4006はほぼ完形品で、長さ3.9cm、径4.2cm、重量77.4gを測る。



写真21 6・11・15T掘削状況(南南東より)

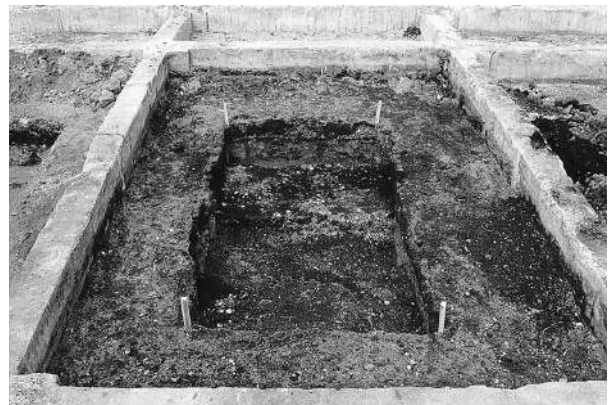


写真22 16T貝層検出状況(北西より)

## 第4節 第2次本発掘調査の結果

### 第1項 古墳時代前期の遺構と遺物

該期の遺構には、貝層・竪穴住居址・溝状遺構・土坑・炉址などがある。これらは、攪乱によりかなり断片的な状況で検出されており、性格が明らかでないものが多い。竪穴住居址と判断されたものは1軒のみであるが、海浜部に存在する遺構として注目されるものであろう。

#### A 貝層と出土遺物

貝層はA 4区東半部とC 5区を結ぶラインより東側に分布し、1-A貝層とA・I～K貝層とC～H貝層の3ブロックに大別できる。それぞれのブロックは攪乱等により分断されており、小ブロックごとに

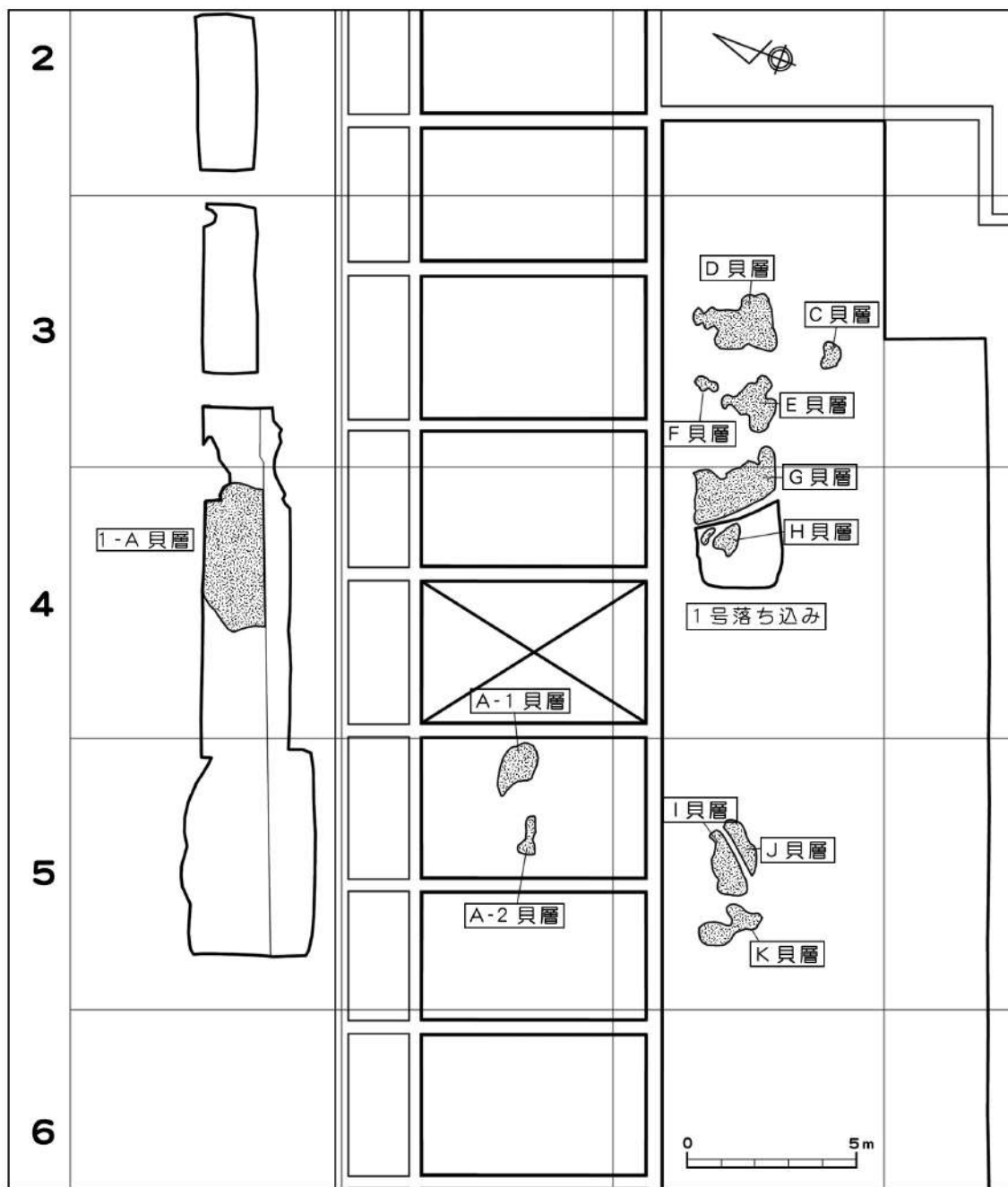


図15 貝層分布図 ( S = 1/200 )

調査を進めた。当初、B5区南西部に存在した貝層を「B貝層」として調査したが、自然貝層と判断されたため、欠番としている（写真23・24）。また、B6・7区境界部付近およびD6区東側の調査区境付近でも自然貝層が確認されている。これらには遺物を伴っていない。

貝層の厚さは総体的に薄く、伴出遺物も少なかった。貝種は、ハマグリ・シオフキガイを主体とし、サルボウ・マガキ・アカニシ・ツメタガイ・キサゴ・ウミナナなどがあり、稀にアワビが含まれていた。



**写真23 B貝層検出状況（北西より）**  
溝状に掘られた旧校舎の基礎により分断されている。当初人為的に形成された貝層として調査した。



**写真24 B貝層断面（北東より）**  
砂混じりの破碎貝層に挟まれてハマグリを主体とする自然貝層がある。砂層上面より盛り上がり、層に覆われている。

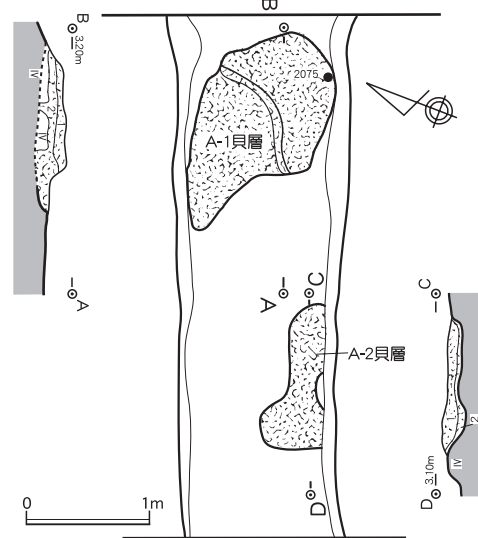
・ **A貝層**（図16、写真25～29）

B5区東半部に位置し、小さな2つのブロックとして存在する。南北を旧校舎の基礎工事の際に破壊されている。東側のブロックをA-1貝層、西側のブロックをA-2貝層とした。A-2貝層は遺存状態が極めて悪い。ともに破碎貝を多含する層上に形成されている。

A-1貝層は、東西1.5m、南北1.1mの範囲に遺存する。貝層の厚さは約10cmで、層を混じえる。層との間に層を主体とし、細かな破碎貝を混入する



**写真25 A貝層検出状況（東より）**



**A-1貝層（A-B）**  
1：混土貝層 III層に相当する黒色土中に比較的形の整った貝を多く含む。優占貝種は、シオフキ・ハマグリ他にイタボガキ・サルボウ・ツメタガイを若干含む。  
2：混土貝層 III層に相当する黒色土。細かい破碎層を含む。  
IV：赤褐色混砂貝層 赤褐色砂層中に形成された自然貝層。貝の密度は高く、整った形を持つ。優占種はシオフキ・ハマグリ。  
**A-2貝層（C-D）**  
1：混土貝層 III層に相当する黒色土、比較的形の整った貝を多く含む。優占貝種は、シオフキ・ハマグリ。ツメダイ・オキシジミ・オオヘビガイなどを含む。  
2：混土貝層 III層に相当する黒色土。細かい破碎層を含む。  
IV：赤褐色混砂貝層 A-1貝層のIV層と同一層。

**図16 A貝層実測図（S=1/60）**

厚さ5cm程の層が介在する。この層は、B貝層では認められなかった。貝種は、ハマグリ・シオフキガイを主体にオキシジミ・ツメタガイ・オオヘビガイなどが含まれていた。A-2貝層は、東西1.5m、南北0.5mの範囲に遺存する。土層の堆積状況はA-1貝層と同様で、貝種も大差がなかった。

出土遺物は僅少で、A-1貝層では数点の土器片と自然礫、A-2貝層では土器細片一点が出土したに過ぎなかった。A-1貝層から出土した2075の1点のみ図示した(図18)。内外面ともナデ調整が施された甕形土器胴部破片で、胎土には粗砂が多量に混入する。色調は外面が暗褐色、内面が灰褐色を呈する。焼成は普通である。本貝層は、出土遺物から古墳時代前期に形成されたものと考えられる。



写真26 A 1貝層検出状況(東より)



写真27 A 1貝層断面(北西より)



写真28 A 2貝層検出状況(東より)



写真29 A 2貝層断面(北東より)

#### ・C～H貝層(図17～19、写真30～38)

C3・4区に位置する。旧校舎の基礎工事等の攪乱により分断されており、本来の広がりには明らかでない。D貝層とした部分には4号土坑が存在し、貝層が覆っている点から4号土坑が古い。また、G・H貝層とした部分では、貝層下に層相当の黒色土の落ち込み(1・3号落ち込み)が存在した。

C貝層は、南北0.55m、東西0.8m程の範囲で検出された。層厚10～15cm程度の混貝土層として存在する。貝種はハマグリ・シオフキガイを主体とし、キサゴなどが混入していた。出土遺物は皆無であった。

D貝層はC貝層の北側1.5mに位置し、両者の間に旧校舎の基礎工事に伴う溝状の攪乱が存在する。南北2.5m、東西2.0mの範囲に遺存する。混貝土層として存在し、層厚は5～8cmと薄い。貝種はハマグリ・シオフキガイを主体とし、サルボウ・カガミガイ・イタボガキ・キサゴ・アカニシ・ウミナナなどが見

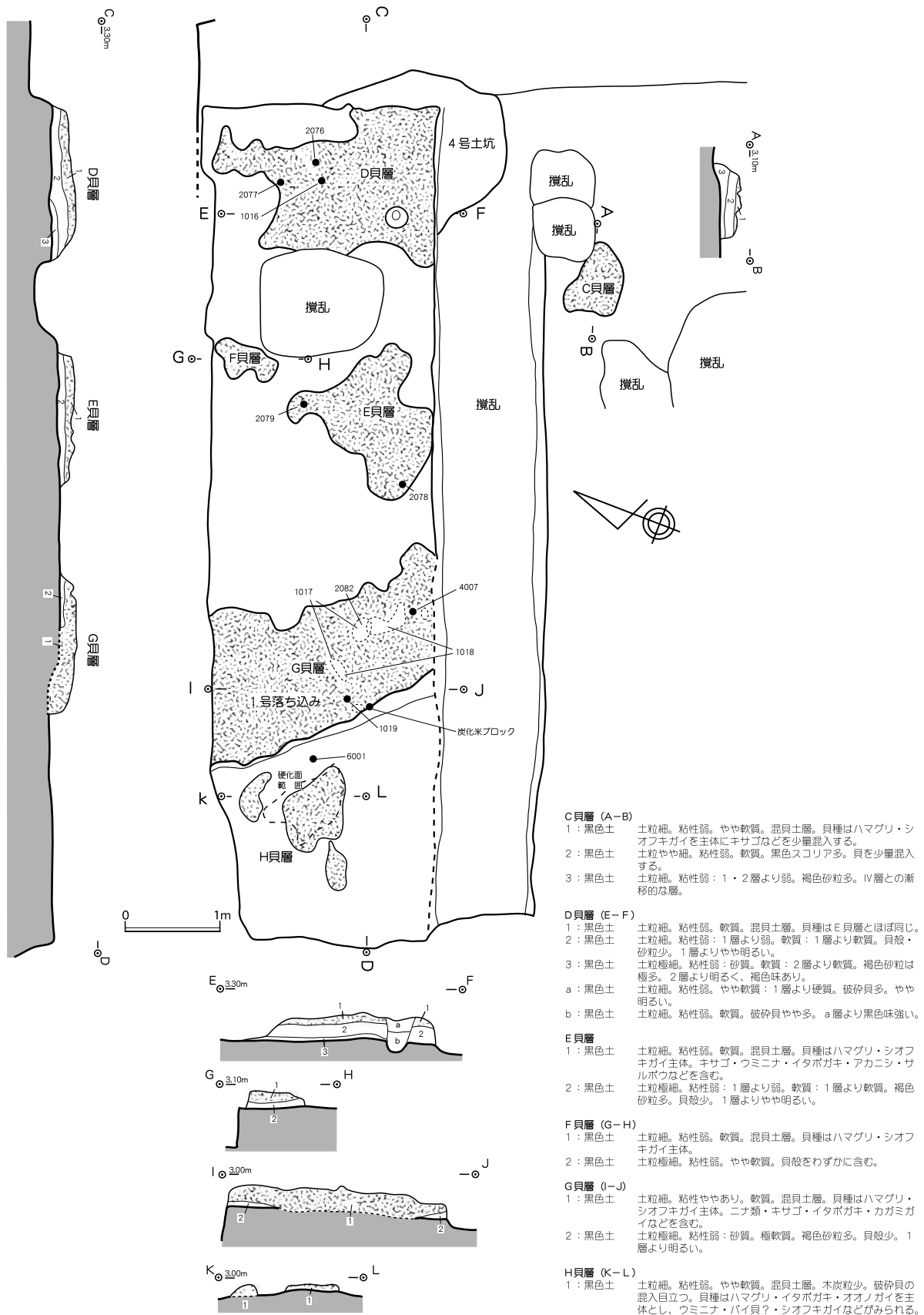


図17 C～H貝層実測図 (S=1/60)



写真30 C～H貝層検出状況（北東より）



写真31 D貝層検出状況（北北東より）



写真32 D～F貝層検出状況（西より）

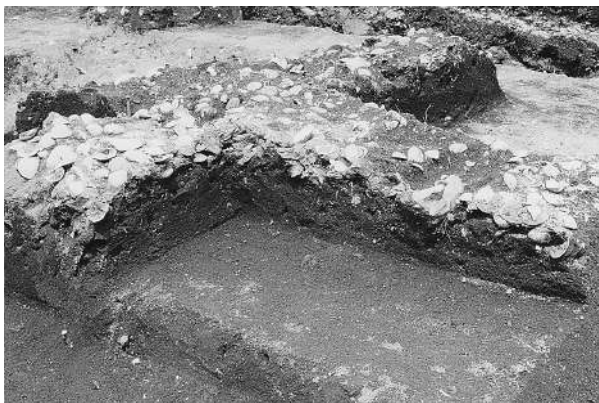


写真33 D貝層断面（北東より）



写真34 E貝層断面（東より）

られる。

出土遺物は、復原可能なもの1点と2点の破片資料を図示した。1016は推定口径9.1cm、胴部径14cm、残存部器高15.1cmの小形甕形土器である。2076と2077はハケ目調整の見られる壺形土器肩部破片で、2076の内面調整のナデはやや雑である。胎土にはともに粗砂粒を多含し、焼成は良好である。

E貝層は、C貝層の北西約1.7m、D貝層の南西約1mに位置し、それぞれ攪乱によって隔てられている。貝層の範囲は、南北約1.5m、東西約1.3mである。貝層は混貝土層として存在し、層厚は10cm程を測る。貝種はD貝層とほぼ同様である。

出土遺物は、2点を図示した。2078は小形壺形土器肩部破片で、外面縦方向のナデ、内面横方向のヘラナデ調整が施されている。胎土には微砂粒を多含し、焼成は普通である。2079はハケ目調整の甕形土器口頸部破片で、口縁部外面はヨコナデ調整後口唇部に刻みが施されている。内面はハケ目調整後、乾燥が進んだ段階での横方向のナデ仕上げが施されている。焼成は良好である。

F貝層は、E貝層の北0.3mに位置する。南北約0.7m、東西約0.35mの範囲に小ブロック状として存在する。本貝層も層厚10cm程度の混土貝層で、貝種もハマグリ・シオフキガイを主体とする点など、C～E貝層とほぼ同様である。

出土遺物は、2080の甕形土器胴部破片1点のみを図示し得た。外面やや粗いハケ目調整、内面ナデ調整が施されている。色調は暗灰褐色を呈し、焼成は普通である。

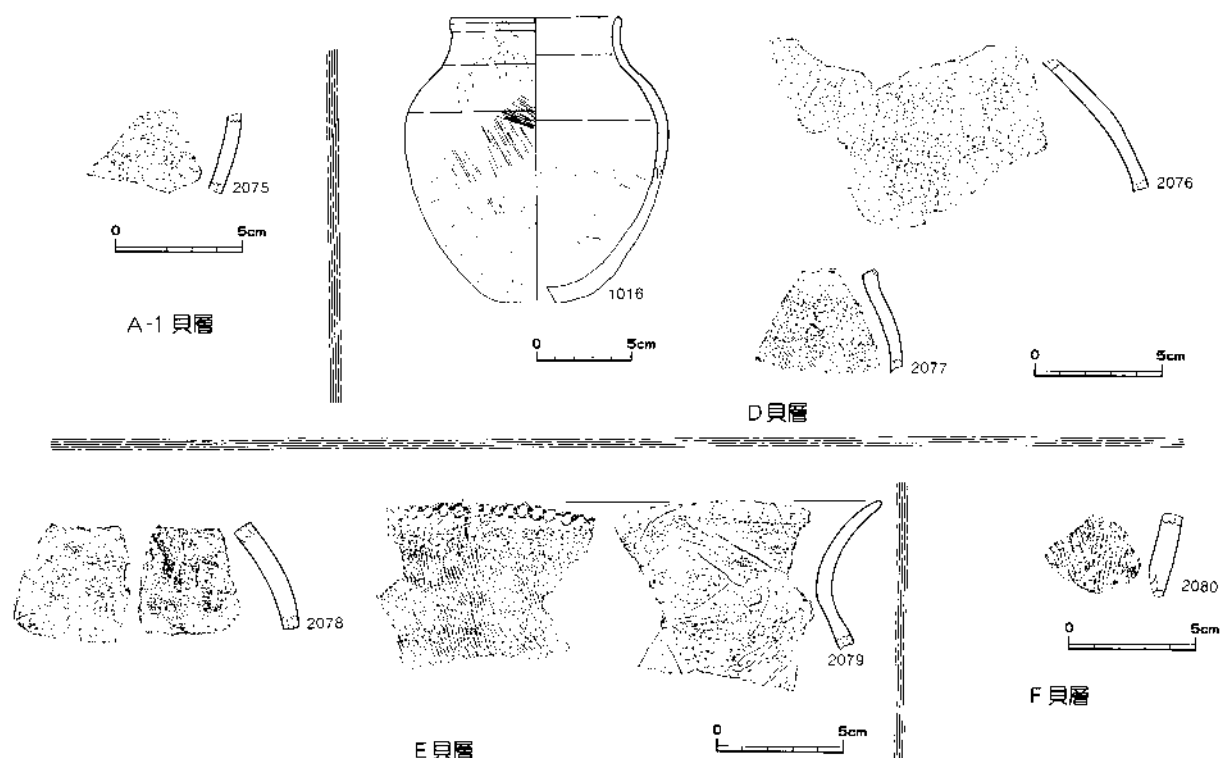


図18 A～F貝層出土遺物実測図

G・H貝層はC4区に位置する。G貝層は、E貝層の西約0.5m離れて位置する。南北を旧校舎の基礎により破壊されている。南北2.5m、東西2.8mの範囲に幅1.2～1.5mの北西～南東方向の帯状をなして遺

存する。貝層は混貝土層として存在し、層厚は20～25cmを測る。西側は層が若干落ち込んでいる。貝種および組成はC～F貝層とほぼ同様である。

G貝層の出土遺物(図19)は、他の地点より多く出土した。1017は壺形土器肩部から胴中位のかけての大形破片である。最大径は胴部中位にあり、20.7cmを測る。外面は縦方向のミガキ、内面は八ケ目調整後ナデ仕上げが施されている。1018と1019は八ケ目調整甕形土器の大形破片である。1018は頸部が短く、「くの字」に外反する。口径21.2cm、胴部最大径28cmを測る。1019は頸部が直立し、口唇部で外反する。口径19.4cmを測る。2081は折返し口縁小形広口壺ないし鉢形土器の口縁部破片である。内外面ともヨコナデが施されている。2082と2083は八ケ目調整の見られる甕形土器で、2082には口縁部外面と内面全体に横方向のやや粗い八ケ目調整が施されている。2083は口縁部内面にも八ケ目を残すが、肩部はナデ調整が施されている。2084は精製小形埴の口縁部破片で、内外面に赤彩が施されている。焼成はいずれも良好である。4007は筒状を呈する管状土錘である。完形品で、長さ4.0cm、径4.1cm、重量65.8gを測る。以上のほか、南西部で炭化米の小ブロックが出土している(写真37・38)。

H貝層はG貝層の西側に近接して存在する小ブロックで、3号落ち込み内に存在する。南北1.4m、東西1.3mの範囲に3つの小ブロックに分れている。貝層は混貝土層として存在し、層厚は7～10cm程度である。貝種はハマグリ・イタボガキ・オオノガイを主体とし、シオフキガイ・ツメタガイ・キサゴ・ウミニナなどが見られる。



写真35 G・H貝層検出状況(西より)



写真36 G貝層断面(東より)



写真37 G貝層遺物出土状態(東より)



写真38 G貝層出土炭化米ブロック

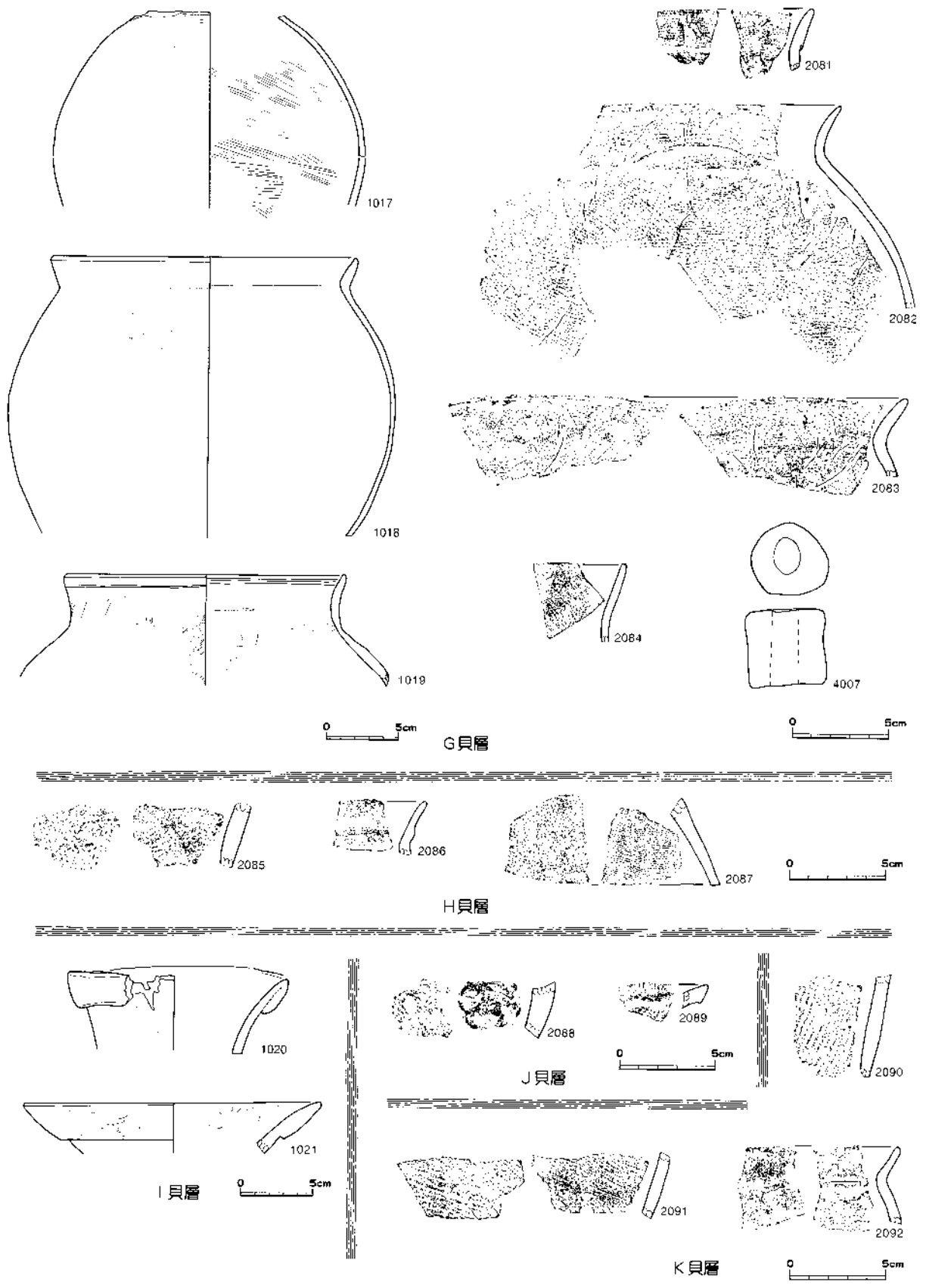


图19 G ~ K貝層出土遺物実測図

出土遺物は少なく、3点を図示した。2085は胎土に繊維を含み、暗褐色を呈する。摩耗が著しいが、縄文時代早期条痕文土器片とみられる混入品である。2086はS字状口縁台付甕の口縁部破片である。粗砂・細礫をやや多含し、焼成は良好である。2087は台付甕脚台部破片で、内外面八ケ目調整である。

以上の貝層の形成時期は、出土遺物と貝を包含する土層から、いずれも古墳時代前期と考えられるが、H貝層は、1号落ち込み内に堆積し、その覆土中より出土した2171(図37)の土器器甕片が1点存在し、時期の判定に問題を残している。

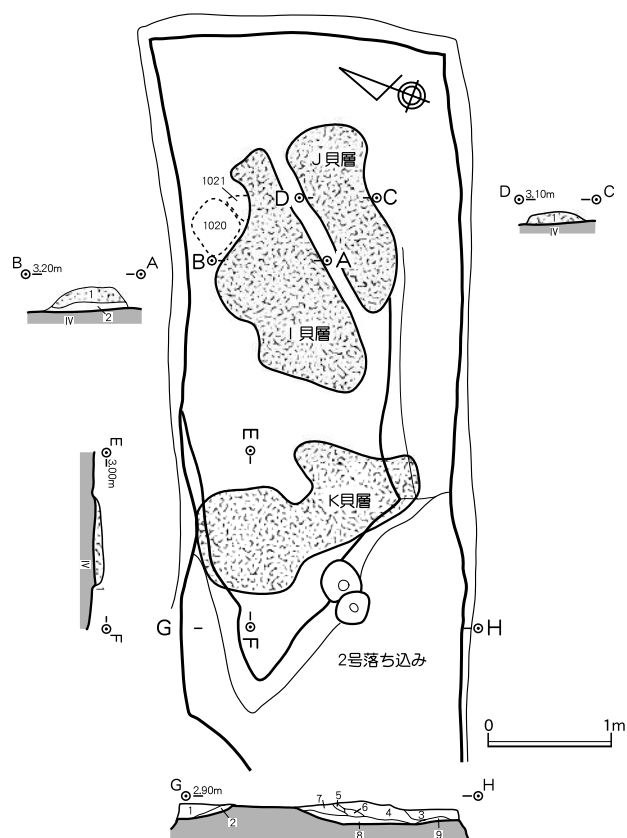
・ I ~ K 貝層 (図19・20、写真39~44)

I ~ K 貝層はC 5 区に位置し、A 貝層の南約 5 m、C ~ H 貝層の南西約 8 m の距離を隔てている。I・J 貝層は本来ひとつのブロックをなすものとみられるが、北東 南西方向の幅 10 ~ 15 cm で帯状に分断されており、便宜的に北西側の貝層を I 貝層、南東側を J 貝層とした。これらの貝層は南北 1.7 m、東西 2 m 程の範囲に遺存する。ともに貝層は混貝土層として存在し、その層厚は 10 cm 程度である。貝種はハマグリ・シオフキガイを主体とし、カガミガイ・キサゴ・ツメタガイなどを含む。

I 貝層とした部分から出土した遺物は、2点を図示した。1020・1021ともに折返し口縁壺形土器の口頸部である。ともに丁寧なミガキ調整が施されている。1020は頸部が直立に近く立ち上がり、口径 15.5 cm を測る。1021は頸部が大きく外傾し、口径 20.8 cm を測る。焼成はいずれも普通である。J 貝層とした部分からの出土遺物も少なく、2点のみ図示した。2088は2085に類似する特徴をもつ条痕文土器胴下部の破片である。2089は小形器台ないし小形壺形土器の口縁部の細片である。内外面ともナデ調整が施されている。

K 貝層は、I 貝層の南西 0.45 m に位置する。東西・南北とも 1.5 m 程の範囲に、北西 南東方向の帯状に遺存する。北西および南東側は 2 号落ち込みにより切られているような状況で検出された。貝層は層厚 8 cm 程度の混貝土層として存在し、貝種および組成は、I・J 貝層とほぼ同様である。

出土遺物は少なく、3点を図示した。2090は単節 LR の縄文を地文とし、色調は暗褐色を呈する。摩耗著しい。縄文時代中期に比定される混入



- I 貝層 (A-B)  
 1: 混土貝層 シオフキ・ハマグリを主体とする混土貝層。他にツメタガイなどを含む。貝層中にはⅢ層に相当する黒色土を含む。破砕貝を多く含む。  
 2: 灰褐色砂質土 細かく破砕された貝と砂を多く含む。形の整った貝は含まない。  
 Ⅳ: 灰褐色砂質土 砂の粒子は粗く破砕された貝と砂を多く含む。貝を多く含む。
- J 貝層 (C-D)  
 1: 混土貝層 シオフキ・ハマグリを主体とする。他にはツメタガイをわずかに含む。貝の密度は比較的低く、破砕貝を多く含む。Ⅲ層に相当する黒色土をベースとする。  
 Ⅳ: 灰褐色砂質土 砂の粒子は粗くシオフキ・ハマグリ等の形の整った貝を多く含む。自然貝層を形成。
- K 貝層 (E-F)  
 1: 混土貝層 シオフキ・ハマグリを主体とする混土貝層。ツメタガイ・カガミガイを少量含む。Ⅲ層に相当する黒色土を含む。  
 Ⅳ: 灰褐色砂質土 砂の粒子は粗い、J 貝層のⅣ層に同じ。
- 2号落ち込み (G-H)  
 1: 黒色土 土粒細。粘性弱。軟質。黄褐色砂粒・赤褐色粒微量。黒色味強く、場所によっては下部にやや硬質な部分が認められる。  
 2: 黒色土 土粒細。粘性弱(砂質)。軟質(1層に類似)。黄褐色砂粒極多。明るい。  
 3: 黒色土 土粒細。粘性ややあり。軟質。黄褐色砂粒少。赤褐色粒・破砕貝微量。黒色味強い。  
 4: 黒色土 土粒細。粘性弱。軟質(3層より硬質)。ハマグリ・シオフキを主体とする破砕貝多。やや明るい。  
 5: 黄褐色土 土粒細。粘性弱(砂質)。やや軟質。地山砂層中に存在する土層。覆土中にブロックとして存在する。  
 6: 黒色土 土粒極細。粘性弱。極軟質。破砕貝微量。黒色味強い。  
 7: 黒色土 土粒極細。粘性弱(砂質)。極軟質(6層に類似)。破砕貝(自然貝層に由来する)多。明るい。  
 8: 黒色土 土粒細。粘性弱。軟質。黄褐色砂粒やや多。赤褐色粒微量。やや明るい。  
 9: 灰黄褐色土 破砕貝を多含する。黄褐色砂質土層(Ⅳ層)。極軟質。

図20 I ~ K 貝層実測図 (S = 1/60)

品である。2091は外面ハケ目調整、内面ササラ状工具による丁寧なナデが施されている。内面の調整痕から壺形土器胴部破片と推定される。2092は埴形土器の口縁部から肩部破片で、内外面に赤彩が施されている。胎土には粗砂がやや多含され、焼成は良好である。

I ~ K貝層の形成時期は、出土遺物等から古墳時代前期と考えられる。



写真39 I ~ K貝層検出状況（東より）



写真40 I・J貝層検出状況（西より）



写真41 I貝層断面（東より）



写真42 J貝層断面（南西より）



写真43 K貝層検出状況（北西より）



写真44 K貝層断面（北西より）

## B 竪穴住居址

### ・1号住居址 (図21・22、写真45～47)

本址はC・D5区を中心に位置し、南側は僅かに調査区外に及んでいる。北側の大半は旧校舎の基礎工事により破壊されている。北西側にはI～K貝層が近接して存在する。また、西隅部には本址より新しい8号土坑が重複している。遺構確認の段階で上部に硬化面が認められ。特に西壁際では壁に沿うような状況で帯状の良好な硬化面が存在した。この帯状の硬化面は8号土坑とも切り合い、8号土坑が新しいと観察された。以上の観察結果から硬化面の形成は少なくとも1号住居址廃絶以降、8号土坑掘削以前とみられる。



写真45 1号住居址全景 (東より)

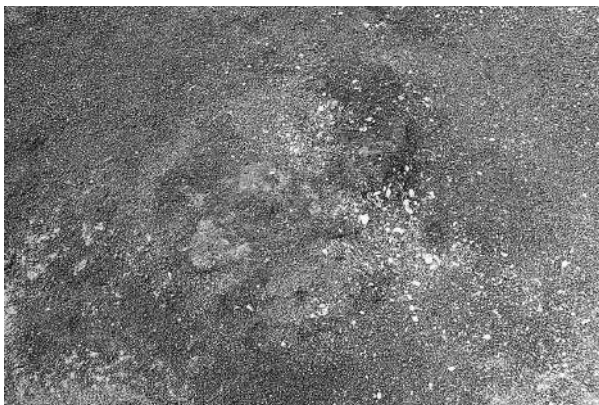
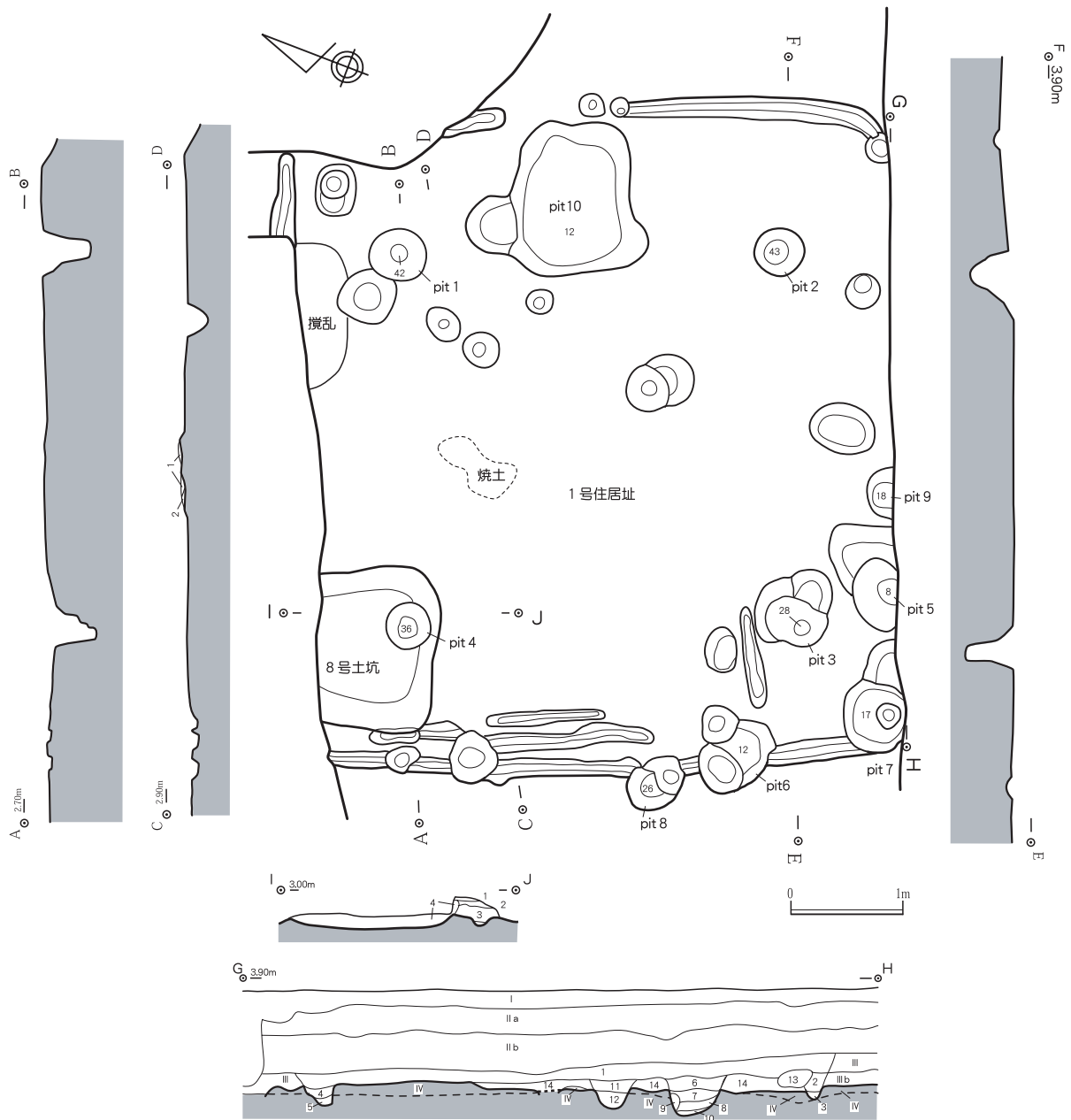


写真46 1号住居址炉址 (南東より)



写真47 1号住居址「貯蔵穴」(北より)



- 1b: 黒色土 土粒細。粘性弱。軟質（1層より軟質）。黒色スコリア少。破砕貝・褐色砂粒多。やや明るい。J層と、層の漸移的な層。部分的に存在する。
- 炉址 (C-D)**  
 1: 灰黒色土 土粒極細。粘性弱。軟質。黒色土主体。焼土粒混じりの灰多。  
 2: 黒色土 土粒細。粘性弱。軟質（1層より軟質）。焼土粒・木炭粒少。
- 1号住居址 (G-H)**  
 1: 黒色土 土粒細。粘性弱。軟質。黒色スコリアやや多。褐色砂粒少。b層より黒色味強い。  
 2: 黒色土 土粒細。粘性ややあり。軟質（1層より硬質）。破砕貝・灰褐色砂粒多。やや明るい。  
 3: 黒色土 土粒極細。粘性弱（砂質）。軟質（2層より軟質）。黒色土主体。灰褐色砂粒多。明るい。  
 4: 黒色土 土粒極細。粘性弱。軟質（1層より軟質）。灰黄褐色砂粒やや多。明るい。  
 5: 黒色土 3層に類似。  
 6: 黒色土 土粒細。粘性弱。軟質（1層より軟質）。黒色スコリア・破砕貝やや多。1層より明るい。  
 7: 黒色土 土粒極細。粘性弱（6層より弱）。軟質（1・2層より硬質）。微細な砂粒多。6層より明るい。
- 8: 黒色土 土粒極細。粘性弱（7層に類似）。軟質（7層に類似）。微細な砂粒やや多。6層より黒色味強い。  
 9: 暗灰黄色土 土粒細。粘性弱（砂質）。極軟質。砂質土主体。黒色土少。  
 10: 灰黒色土 土粒細。粘性弱（砂質）。軟質（7・8層に類似）。黒色土主体。暗灰黄色砂粒極多。  
 11: 黒色土 土粒細。粘性弱（やや砂質）。軟質（1層に類似）。破砕貝（1層に類似）。破砕貝・砂粒多。やや明るい。  
 12: 灰黒色土 10層に類似。10層より軟質。  
 13: 灰黄色土 土粒細。粘性強。やや硬質。ブロック状に存在する粘質土。  
 14: 黒色土 土粒細。粘性弱。軟質（1・6・11層より硬質）。破砕貝多。砂粒やや多。部分的に径2～3cm位の黒色硬化ブロックを混入する。
- 8号土坑 (I-J)**  
 1: 黒色土 土粒細。粘性弱。極硬質。砂粒を多含する。硬化層。  
 2: 黒褐色土 土粒細。粘性弱（砂質）。軟質。ブロック状をなす黄褐色砂粒多。破砕貝微量。  
 3: 黒色土 土粒細。粘性弱（2層に類似）。黒色土を主体とし、砂粒極多。破砕貝少。  
 4: 黒色土 土粒細。粘性やや強。やや軟質。炭化粒（米）を混入。微細な赤褐色粒少。やや明るい。

图21 1号住居址・8号土坑実測図 (S = 1/60)

本址の掘り込み面は、調査区境の土層断面の観察から a層と判断され、b層が覆土を覆っていた。主軸長約5.9m、副軸長6.04mを測る平面隅円方形を呈するものと推定される。主軸方位はN-22°Wを指向する。ピット1～ピット4が主柱穴で、ピット5が「貯蔵穴」と考えられる。中央付近の床面の一部に硬化面が存在したが、この上面では炉の存在が不明瞭であった。炉は硬化面を除去する過程で確認された。壁際には上端の幅15～20cmの壁溝が巡らされている。西側では部分的に3条認められた。柱穴の検出状況から、建替については明確でない。なお、ピット10は、不整形ながら本址に伴わない土坑とすべきかも知れない。

出土遺物は、遺構確認時に包含層出土の遺物として取り上げているものが多いため、ここでは、確実に本址に伴うものを図示した。2093は壺形土器肩部破片である。S字状結節文と羽状縄文が施文されており、一部に赤彩の痕跡が認められる。弥生時代後期に属する混入品である。2094は精製壺形土器口頸部破片である。丁寧なミガキ調整が施されており、内外面とも赤彩されている。ピット2覆土から出土した。2095は甕形土器口縁部破片で、内外面斜め方向のハケ目調整が施されている。2096も甕形土器口縁部破片で、横方向のナデにより仕上げられている。外面には斜め方向のハケ目の痕跡が認められる。ピット8覆土から出土した。2097はS字状口縁台付甕の肩部破片である。斜め方向のハケ目を切って横位のハケ目が見られる。つくりが薄く、色調は暗灰白色を呈する。2098は外面が粗いハケ目調整、内面横方向のナデ調整が施される胴部破片である。器厚などから壺形土器破片と推定される。2099は外面に細かなハケ目調整が施される甕形土器胴部破片である。ピット8覆土から出土した。2100も甕形土

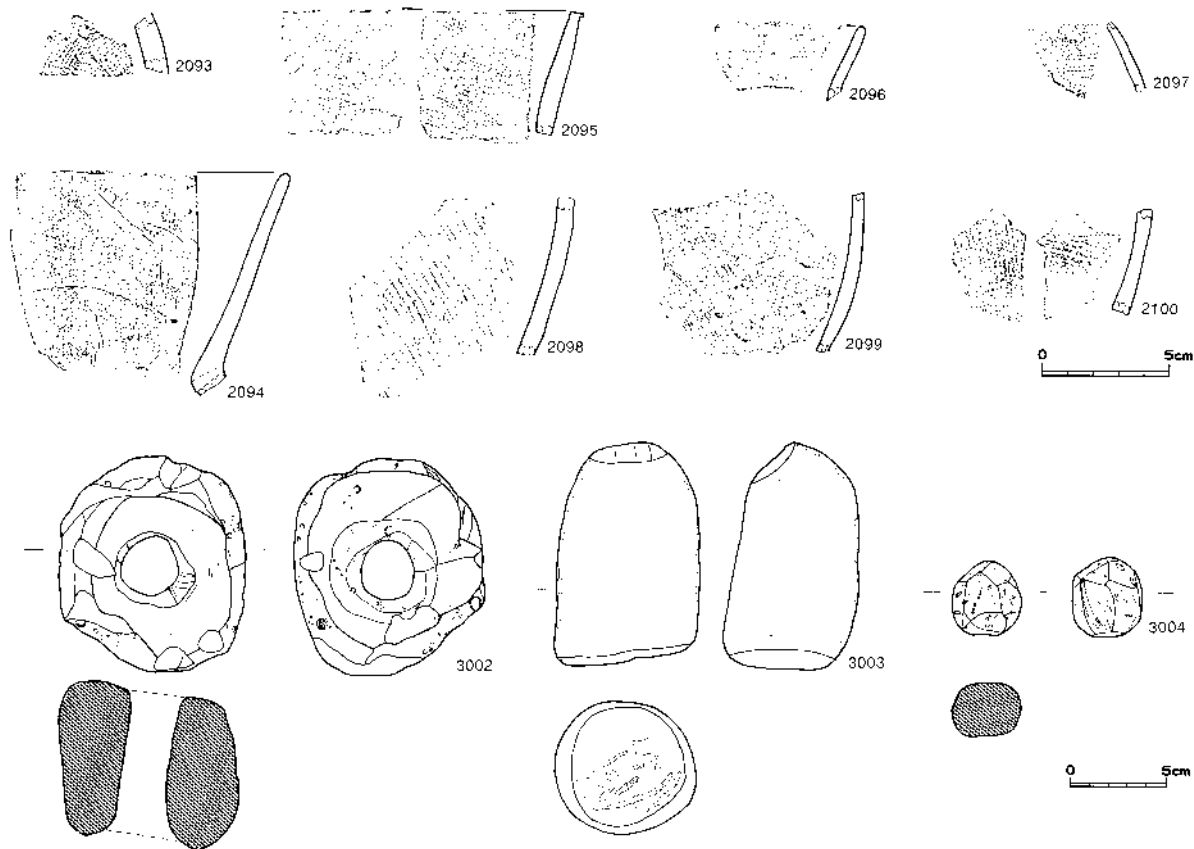


図22 1号住居址出土遺物実測図

器胴部破片で、内面の一部にも八ケ目が残されている。ピット6覆土からの出土である。3002は径3cm程の孔を有する砂質凝灰岩塊である。片面は平坦で、加工されたものである可能性がある。径約11cm、高さ8cm、重量675.6gを測る。地元で「旗立て石」と呼ばれる自然岩塊と考えられ、孔も自然の営為によるものであろう。風化著しく、使用痕は特に認められない。3003は両端に使用痕が見られる敲石で、長さ11.8cm、径7.6cm、重量1,031.7gを測る。石質は石英斑岩である。ピット1覆土から出土。3004は軽石である。使用による不定形な多面体をなす。長さ4.2cm、幅3.7、厚さ2.8cm、重量7.3gを測る。

### C 溝状遺構

#### ・ 3・4号溝状遺構 (図23・24、写真48～51)

調査区南西部、E・F9区に位置する。排土の仮置き場を確保するため、E・F区の境界線で2分して調査を実施した。遺存状況は良くない。確認面は 層のほぼ上面であった。

3号溝状遺構は、ほぼ南北方向の走行を示し、上端の幅1.6～2.5m、確認面からの深さ約30cmを測る。4号溝状遺構は、ほぼ東西の走行方向を示し、上端の幅1.4～1.9m、確認面からの深さ約25cmを測る。覆土は、 層に類似する軟質で粘性の弱い黒色土ないし黒褐色土を主体としていた。ともに平面形は整っていないが、僅かに弧を描いている。分断されているため明確ではないが、両者は互いに関連する遺構と考えられる。なお、これらの溝の内側には1・2号土坑が検出されている。



写真48 3号溝状遺構掘り上げ状況 (南南西より)

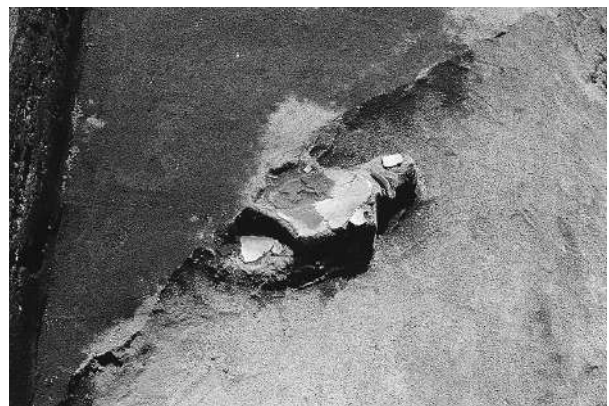


写真49 3号溝状遺構遺物出土状況 (北より)



写真50 4号溝状遺構 (西より)



写真51 4号溝状遺構 (南西より)

3号溝状遺構出土の土器は、完形に復元可能なものはないが、時期的に一定のまとまりが認められる資料が得られている。1022は精製小型壺形土器口縁部破片で、復原口径10.9cmを測る。内外面とも赤彩されており、丁寧なミガキ調整が施されている。胎土は緻密で、焼成も良好である。1023は高坏坏部約1/4の破片である。復原口径21.8cm、残存部高8.8cmを測る。内外面とも縦方向の丁寧なミガキ調整が施されている。1024は小型精製高坏の坏底部から脚上部の破片である。内外面とも赤彩が施される。2101は横位のS字状結節文と単節RL縄文が施文された壺形土器肩部破片である。縄文は羽状縄文をなすものと思われる。弥生時代後期に属する混入品である。2102は外面に鋭い沈線が見られる壺形土器胴部破片で、赤彩の痕跡が認められる。2103も壺形土器胴部破片で、内外面とも細かなハケ目調整が施されている。内面に輪積み痕が残されている。2104は内外面に赤彩が施された埴形土器口縁部破片である。

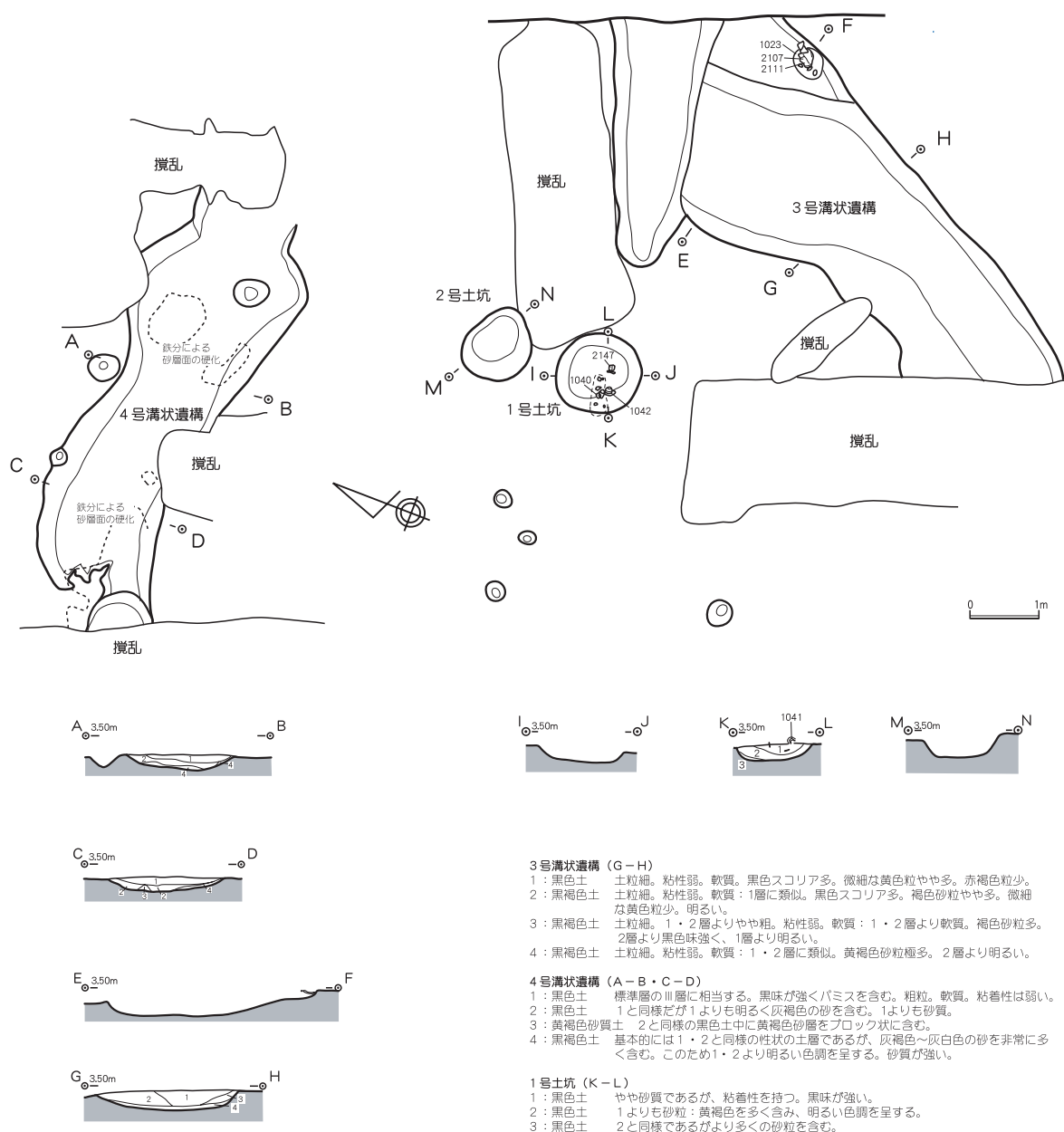


図23 3・4号溝状遺構および1・2号土坑実測図 (S = 1/100)

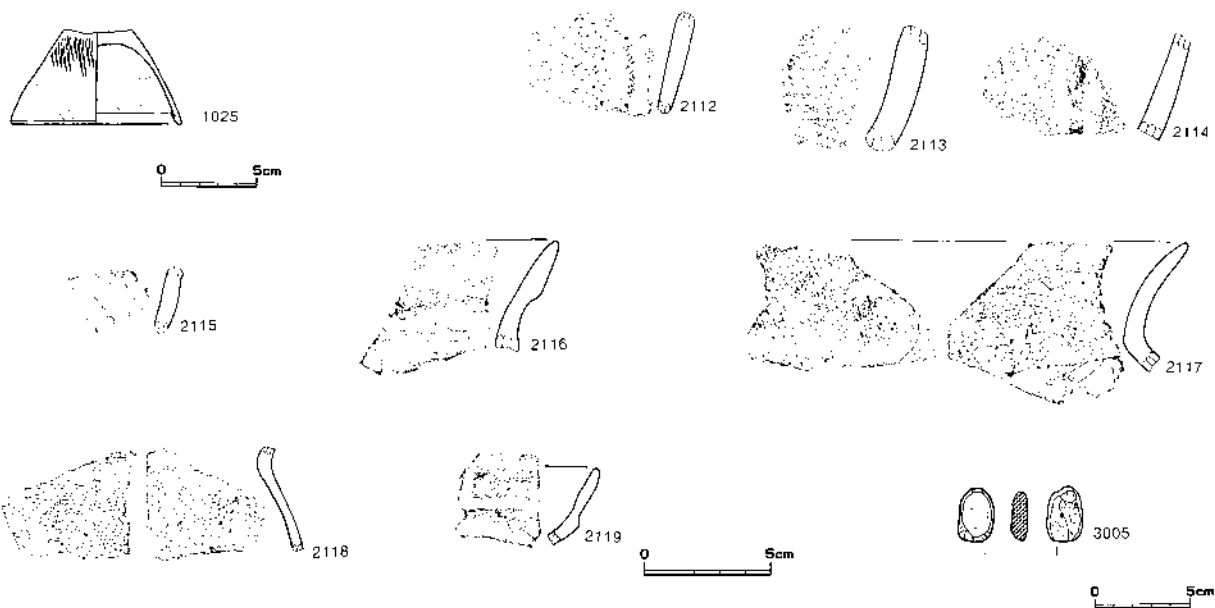
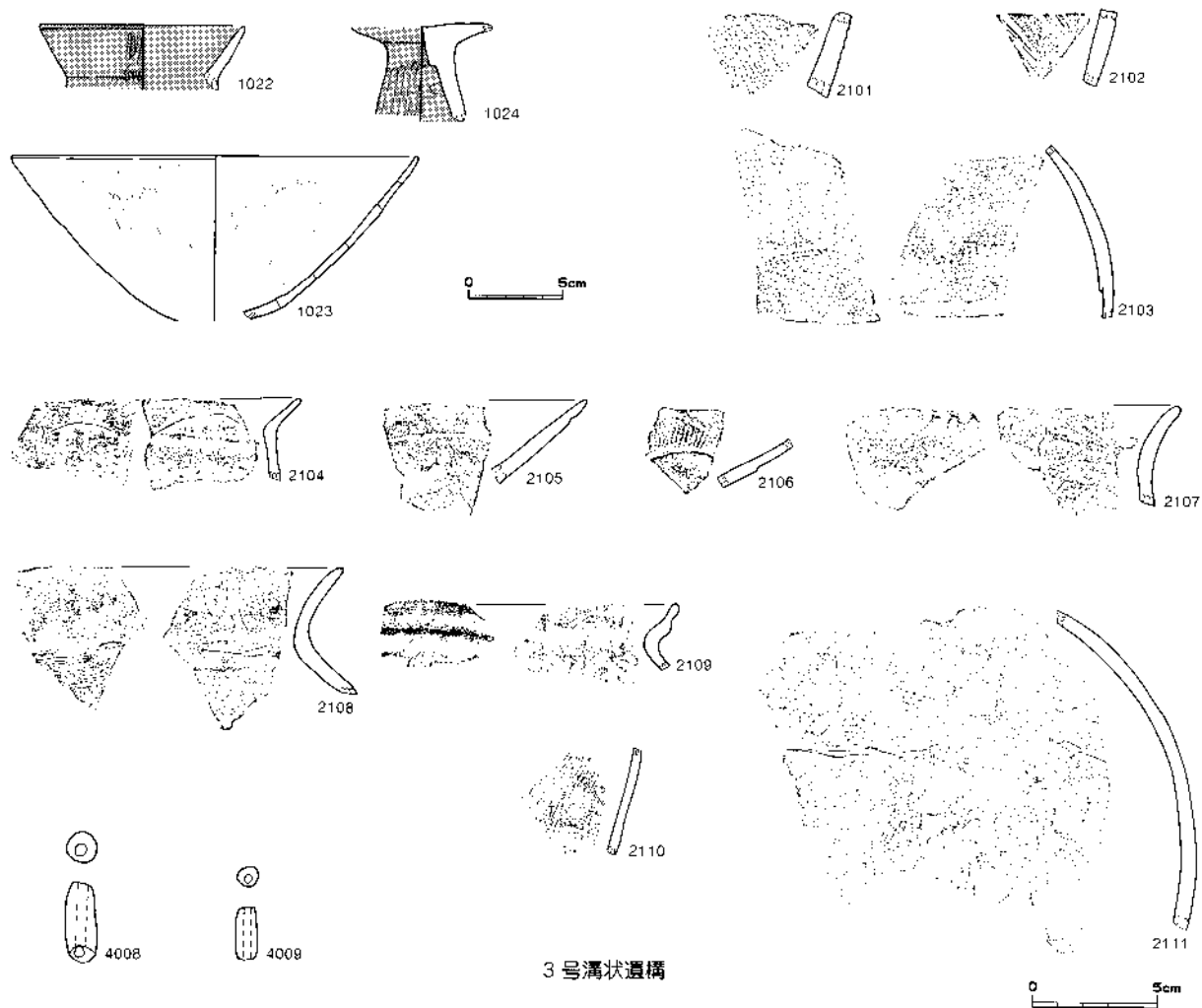


图24 3·4号沟状遺構出土遺物実測図

2105は精製高坏口縁部破片で、口縁部外面はヨコナデ調整によりハケ目が消されている。内外面とも赤彩が施され、ハケ目調整後の仕上げは丁寧である。2106は精製高坏坏部下半の破片で、外面に明瞭な段を有する。2107は甕形土器口縁部破片で、口唇部に刻みが施されている。器面の調整は内外面とも横方向のナデによる。2108は強く外反する甕形土器口縁部破片で、頸基部内面にはナデ調整が施されないまま細かな横位のハケ目が残されている。2109と2110は別個体であるが、S字状口縁台付甕の口縁部と胴部の破片である。焼成は共に良好で、2109の胎土には金雲母が含まれている。2110は甕形土器胴部破片で、胴下部にススが附着する。内外面ともナデ調整が施されており、焼成はやや甘い。4008と4009は管状土錘である。4008は一端を欠いている。残存部の長さ3.1cm、径1.2cm、重量4.6gを測る。4009は完形品で、長さ2.0cm、径0.8cm、重量1.6gを測る。

4号溝状遺構出土遺物は少ない。1025はS字状口縁台付甕の脚台部で、端部は内側に折り返されている。胎土は緻密で、焼成も良好である。2112～2115は縄文土器でいずれも摩耗が著しい。2112と2114は縄文時代中期阿玉台式に属するもので、胎土に金雲母を多含する。2113は土器片錘の可能性があるが、断定できない。沈線状の文様があるが、不明瞭である。中期後半に属するものであろう。2015は2条の沈線が見られ、後期堀之内式に比定される。2116は折返し口縁壺形土器口縁部破片である。胎土に粗砂を多く混入する。2117はやや大型な甕形土器口縁部破片で、外面に斜め方向、内面に横方向のハケ目が残されている。2118も内外面に横方向のハケ目が残される甕形土器肩部破片で、焼成は良好である。2119は古墳時代後期の土師器坏口縁部破片である。体部との境界には鈍い稜が認められる。混入品であろう。3005は長さ2.9cm、幅1.8cm、厚さ0.8cm、重量1.4gを測る軽石である。片面は摩耗痕が明瞭で、砥石として用いられたものであろう。

以上の出土遺物から、3・4号溝状遺構の所産時期は古墳時代前期に比定される。両者が互いに関連を有するものとすれば、形状・規模などから方形周溝墓の周溝の一部である可能性が考えられる。

#### ・5号溝状遺構(図25・26、写真52・53)

B6・7区の境界付近に位置する。解体校舎の基礎枠内で検出され、遺存状態は良くない。確認面は層上面であった。旧校舎の基礎工事に伴う溝状の掘り方により、南北に分断されている。南半部には中世以降に属する10・11号土坑が重複する。

なお、周辺には遺存状態の良くない混土貝層がブロック状に存在した。



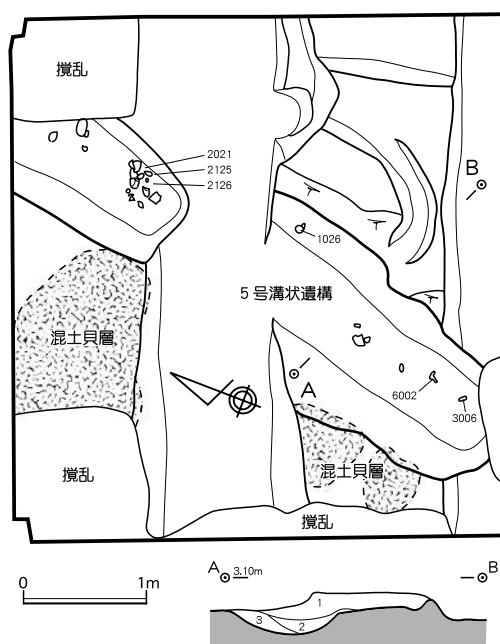
写真52 5号溝状遺構近景(南より)



写真53 5号溝状遺構遺物出土状況(南東より)

溝の走行はほぼ南北方向で、長さ約4.7mにわたって検出された。上端の幅0.9~1.4m、下端の幅0.5~0.6m、確認面からの深さ25~35cmを測る。覆土は層に相当する黒色土、ないし黒褐色土を主体とする自然堆積土であった。底面の標高は、ほぼ2.65mで北端部と南端部の比高差はない。

出土遺物は多くないが、南半部で鹿角や獣骨が検出されている。遺物は、いずれも溝底より浮いたレベルからの出土である。1026は裾がハの字状に開く高坏脚部である。内外面に赤彩が施され、外面は丁寧なミガキが施されている。1020は加曾利E式に比定される縄文土器片で、混入品である。横位の隆帯上に2孔一対の円形刺突文が施され、この隆帯の下位に斜めと縦方向の条線が施文されている。また、従位の隆帯の一部も認められる。両端の中央部が抉れており、土器片錘の可能性が高いが、摩耗が著しいため断定しなかつ



5号溝状遺構  
 1: 黒色粗粒土 標準土層のIII層に相当する。5mm~1cm大のパミスを多く含む。粘性  
 性少なく、やや砂質。  
 2: 黒褐色土 1に比べやや明るい色調を呈する。パミスの含有量は1よりは少ない。  
 また1より粘性が強い。赤褐色の砂を含む。  
 3: 赤褐色砂質土 1・2と同様の土層をベースとするが多量の赤褐色の砂を含む。

図25 5号溝状遺構実測図 (S = 1/60)

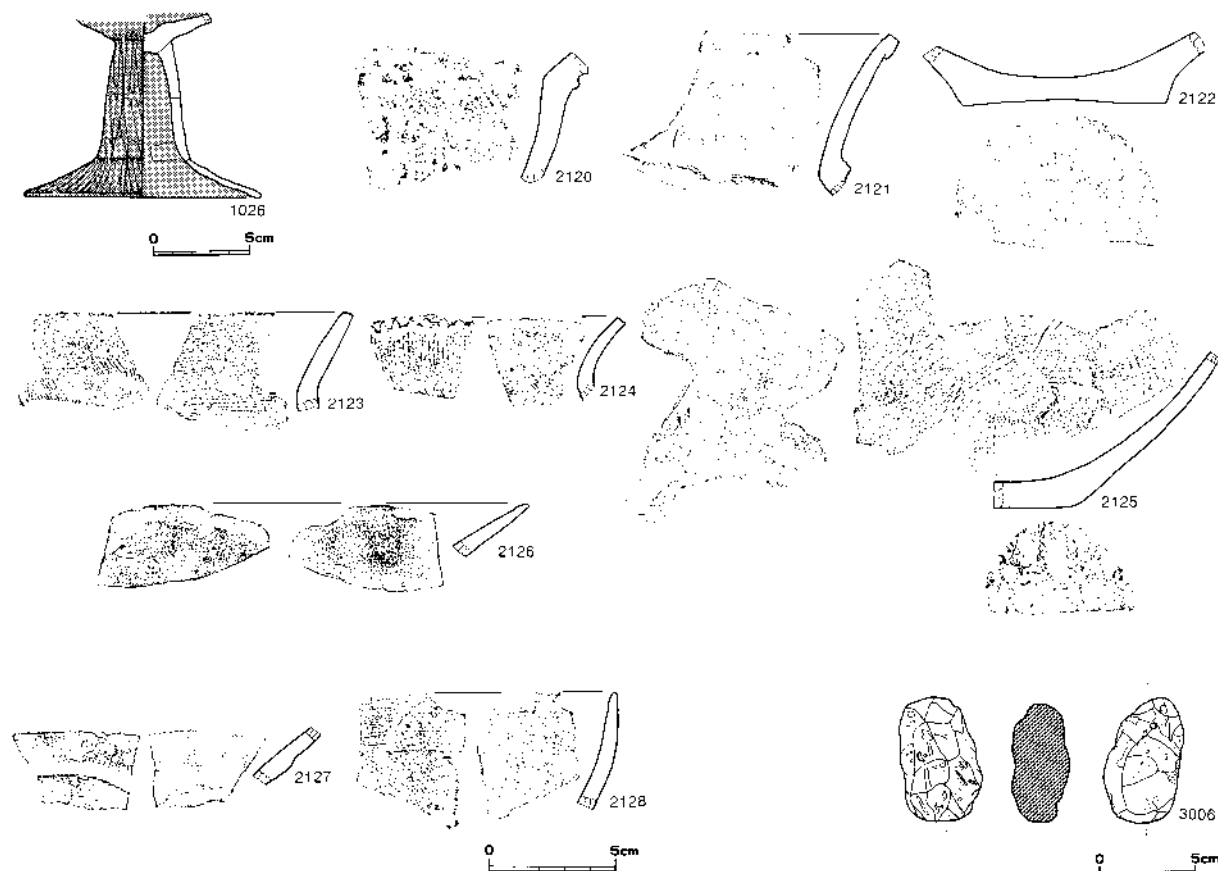


図26 5号溝状遺構出土遺物実測図

た。2121は折返し口縁壺形土器口頸部の破片である。頸基部には一条の突帯が巡らされている。調整は丁寧で、内外面細かなハケ目調整後、外面は縦方向のミガキ、内面は横方向のミガキが施されている。内外面とも赤彩される精製品である。2122は壺形土器底部破片である。胴部外面は赤彩されている。2123と2124はハケ目調整の甕形土器口縁部破片で、2124の口唇部には刻み目が施される。2125は壺形土器底部破片で、胴部外面ナデ、内面ハケ目調整が施されている。外面暗褐色、内面黒褐色を呈する。2126は高坏坏部口縁部破片である。2127は高坏坏体部破片で、外面に明瞭な段が認められる。2126・2127ともに内外面が赤彩され、従位の暗文風ミガキが施される精製品である。2128は埴形土器口縁部破片で、口縁部外面と内面はヨコナデ、体部外面は斜め方向のハケ目調整が施されている。3006は一部に擦痕が見られる軽石で、砥石と考えられる。長さ6.5cm、幅4.1cm、厚さ2.1cm、重量23.9gを測る。

出土遺物と覆土から、本址の所産時期は古墳時代前期と考えられる。性格については、明らかでない。

#### ・ 6号溝状遺構 (図27、写真54・55)

B3～5区にかけて、解体校舎基礎枠に沿うように長さ19mにわたって断続的に検出された。遺存状況は不良で、幅が判明する部分は存在しない。その走行は東北東 西南西方向を示す。遺構確認面は層上面で、深さは約25cmを測る。覆土は層に相当する黒色土を主体とする自然堆積土であった。溝底の標高は2.6m前後である。全体的に5号溝状遺構に類似するが、相互の関係は明らかでない。

出土遺物は少なく、土器片2点のみ図示した。2129は壺形土器胴部破片で、外面は細かな従位のヘラナデ、内面は細かなハケ目調整が施されている。外面には黒斑が認められ、内面は暗灰色を呈する。胎土は砂質で、白色海綿体骨針を含む。焼成は良好である。2130は、台付甕形土器脚台部の端部破片で、内外面ともハケ目調整が施されている。

僅かな出土遺物と覆土から、本址の所産時期は古墳時代前期と考えられる。性格については、5号溝状遺構同様明らかでない。



写真54 6号溝状遺構 B5区東半部 (南東より)



写真55 6号溝状遺構 B5区西半部 (南より)

#### ・ 7号溝状遺構 (図29、写真59～61)

調査区北東端部にあたるB1・2区の境界付近に位置する。長さ約7mにわたって検出された。遺構確認面は層上面であった。3号土坑と切り合い関係にあるが、本址の遺存状況が悪く、明らかにできなかった。また、北側は土器を主体に遺物が集中出土するエリアとなっているが、「1号土器集中」と

して別に項目を設けることとした。

本址の走行は、北西 南東方向を示し、南東側は不明瞭となる。北西端部付近も攪乱により不明瞭となる。北西側延長線上には第1次本発掘調査の第5区が位置するが、遺構は検出されていない。このことから、すでに失われたものか、西側に曲って行くものと思われる。

上端の幅0.6m、下端の幅0.45m、確認面～の深さ15～20cm程を測る。覆土は、層相当の黒色土を主体とする自然堆積土であった。

図示可能な出土遺物は、皆無である。1033(図31)が本址と重複する皿状のピットから出土しているが、「1号土器集中」関係の遺物に一括した。覆土から、本址の所産時期は古墳時代前期と推定される。

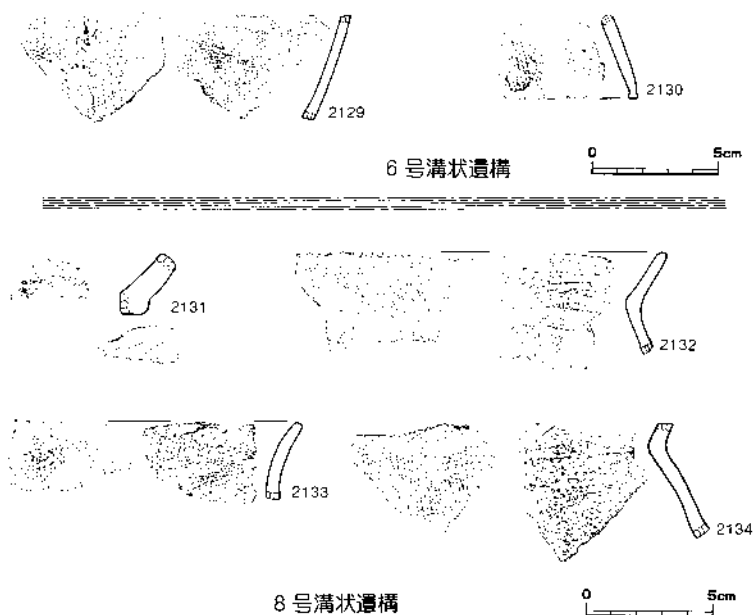


図27 6・8号溝状遺構出土遺物実測図

#### ・8号溝状遺構(図27・28、写真56・57)

C2・3区にまたがって位置する。本址は、確認調査時に検出され、トレンチ東壁際に幅50cmのサブトレンチにより、溝状の遺構であることが確認されていたものである。走行方向は北西 南東を示し、北側約9mにある7号溝状遺構とほぼ平行する関係にある。C・D2区は校舎のコンクリート基礎に工事の際に破壊されており、南東側近接地の状況確認は不能であった。北西側においても続きは確認されていない。第1次本発掘調査の第4区に続く土管の埋設溝等の攪乱が存在したため、若干掘り過ぎているが、遺構確認面は層のほぼ上面であった。上端の幅1.0m、下端の幅0.8m、深さ15cm、底面の標高2.5m程を測る。覆土は層相当の黒色土で、破砕貝を多く混入していた。

出土遺物は少なく、4点を図示した。2131は小型壺形土器底部破片で、内外面淡褐色を呈し、ナデ調



写真56 8号溝状遺構(南東より)



写真57 8号溝状遺構猪牙出土状況(北東より)

整が施されている。2132と2133はハケ目調整の甕形土器口縁部破片である。2132は口唇部に細かな刻み目が施され、肩部内面はナデ調整によりハケ目が消されている。2134も甕形土器頸基部から肩部にかけての破片である。内面は頸部との接合部に横位のハケ目を残すほかは、ナデ調整により消されている。色調は暗青灰色を呈し、焼成は良好である。胎土に少量の白色海綿体骨針を含む。このほか6003（写真57）の猪牙が1点出土している。

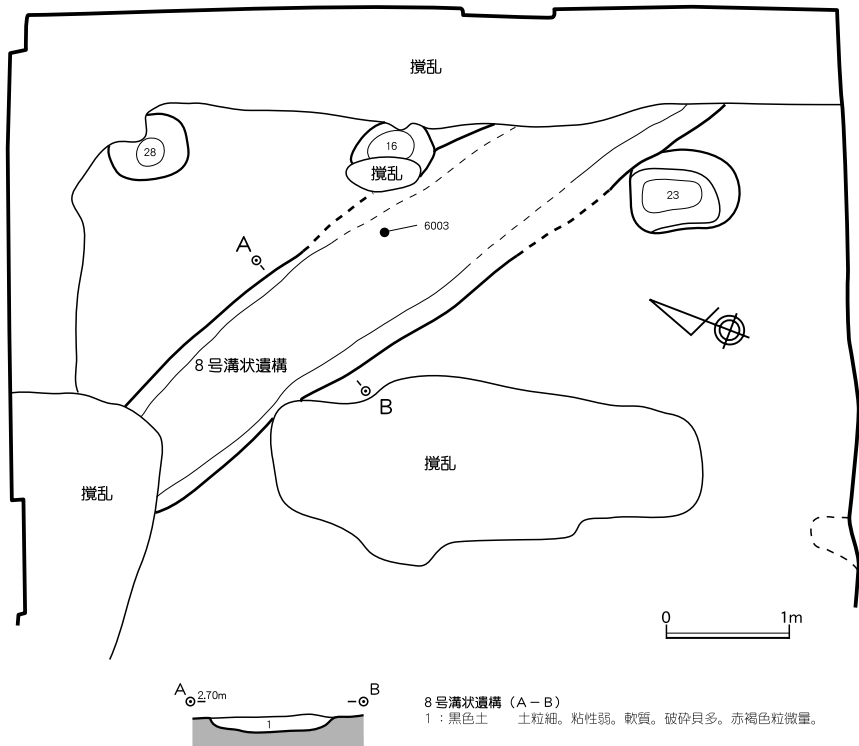


図28 8号溝状遺構実測図 (S = 1/60)

#### D 遺物集中出土地点

##### ・ 1号土器集中 (図29～31、写真58～64)

調査区北東隅部、B1区の基礎枠内で検出された。上層はすべて攪乱土で、破砕貝が層をなして多量に含まれていた。遺構確認面の標高は2.25m前後であった。この段階で北端部に層が遺存し、基盤層である層が北に向かって下っていることが判明した(写真58)。後に層と層の境界部に7号溝状遺構の存在が確認された。土層断面の観察から、本址よりも7号溝状遺構が新しいと判断された。

土器群を主体とする遺物は、7号溝状遺構の東側に集中していた。包含層位は層に相当する黒色土で、他の場所に較べて粘性が強かった。遺物は底面に接するものはほとんどなく、10cm程浮いた状況で出土した。遺物は大きく2つのブロックに分かれて集中し、北西部では稀薄であった。底面は平滑で、直上に極細粒の灰黄色砂質粘土の薄層が覆っていた。底面の標高は2m前後を測り、北東部で再び高くなっている。その部分の標高は2.2m程で、7号溝状遺構西側との比高は5cmである。全体として遺物が集中出土した部分は、北西-南東方向の溝状を呈するなだらかな窪みとなっている。その深さは20～25cmである。底面が平滑な面をなしている点や直上に灰黄色砂質粘土の薄層が覆っている点などから、何らかの遺構であると考えられるが、その性格は明らかでない。

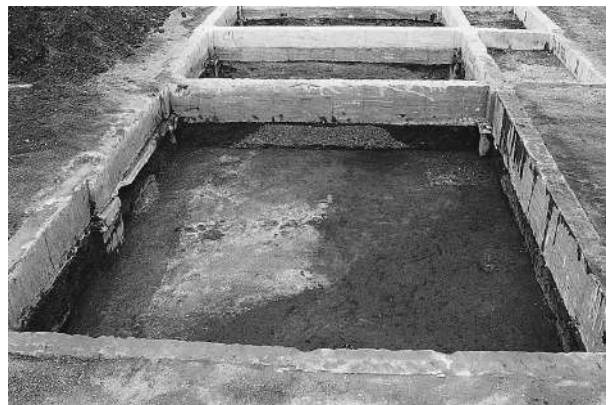


写真58 B1・2区遺構確認状況(北東より)



写真59 1号土器集中遺物出土状況2(南より)



写真60 B1・2区遺構掘削状況(南より)

出土遺物は土器片を主とするが、復原可能な個体も含まれていた。1027は小型の短頸壺形土器である。口縁部1/2と胴部の一部を欠く。口径8.9cm、胴部最大径12.6cm、底径4.3cm、器高12cmを測る。口縁



写真61 7号溝状遺構遺物出土状況(南より)

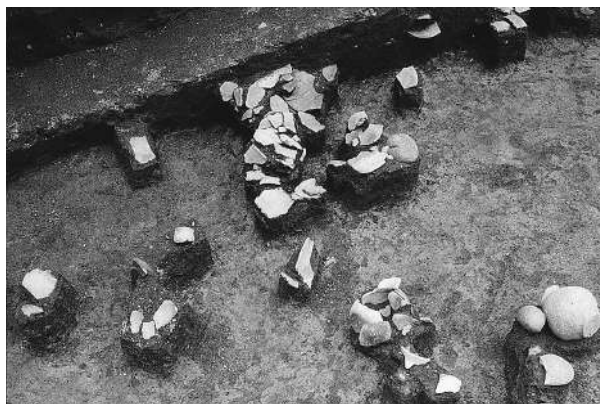


写真62 1号土器集中遺物出土状況1(西より)

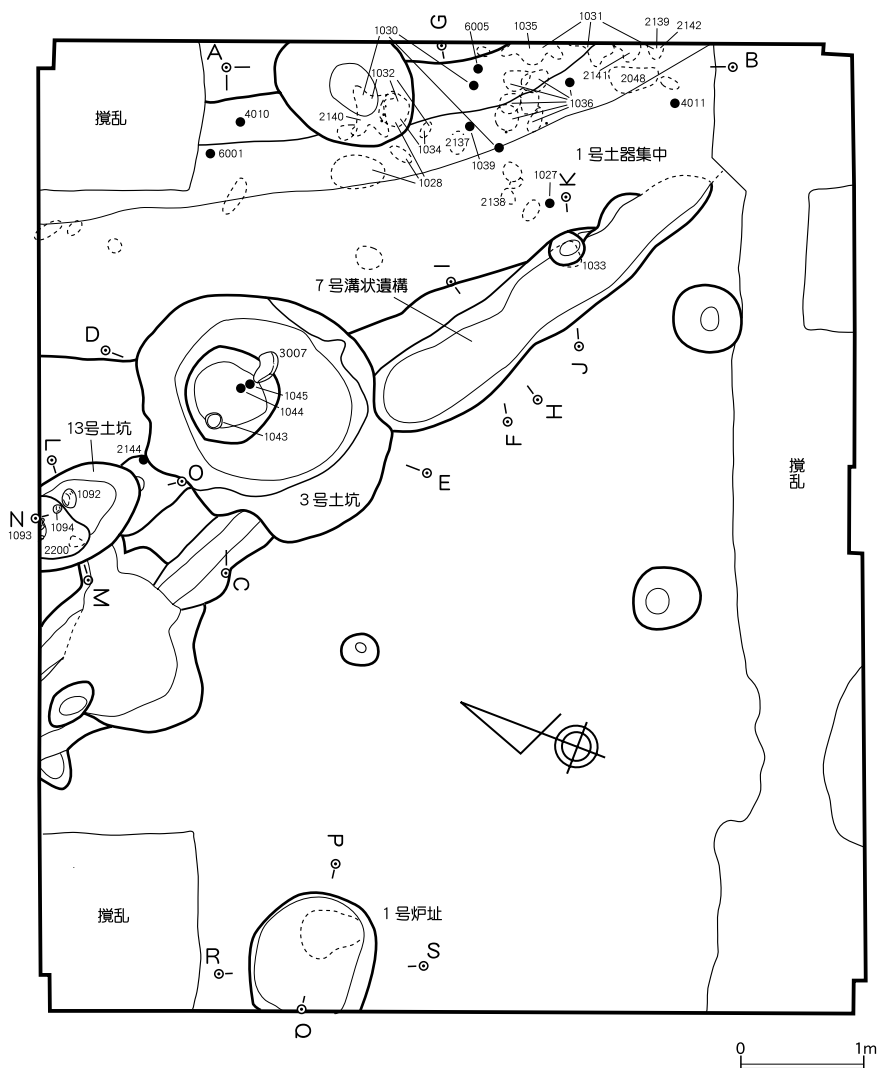


図29-1 7号溝状遺構・1号土器集中・1号炉址・3号土坑・13号土坑実測図1 (S=1/60)

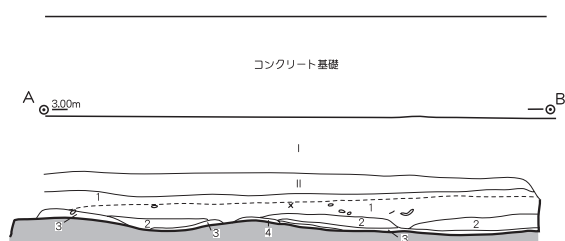
部ヨコナデ、胴上半部ハケ目調整後にナデが施され、胴下半部はハケ目調整のみである。内面は底部にハケ目を残す以外、ナデが施されている。淡褐色を呈し、胴部に黒斑が認められる。焼成は良好で、



写真63 7号溝状遺構・1号土器集中1 (南東より)



写真64 7号溝状遺構・1号土器集中2 (北西より)

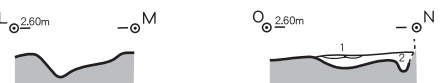


- 1 区東壁 (A-B)  
 底面にシルトを敷く埋め戻し土。  
 I: 灰黒色土 土粒細。粘性弱。やや軟質。微細な白色粒・褐色粒やや多。赤褐色粒少。明るい。  
 II: 黒色土 土粒細。粘性やや強。やや軟質 (II層より硬質)。褐色粒やや多。微細な白色粒・粗粒黒色スコリア多。明るい。遺物を多含する。  
 1: 黒色土 土粒細 (1層より細)。粘性強。やや軟質 (1層より硬質)。微細な白色粒・シルト粒多。1層より黒色味強い。  
 3: 灰黄色土 土粒極細。粘性強。軟質。粘床状に存在する。砂質粘土層。  
 4: 灰黄色土 土粒極細。粘性強。軟質 (3層に類似)。色調は2層に類似。3層と基盤をなすシルト層の間に薄層として存在する。

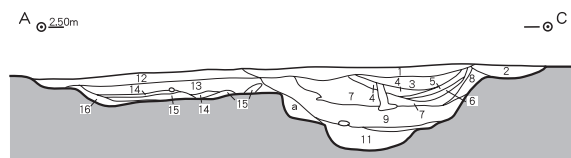


- 7号溝状遺構 (H-I)  
 1: 黒色土 土粒細。粘性やや強。やや軟質。微細な白色粒やや多。木炭粒は微量。  
 2: 灰黒色土 土粒細。粘性弱。軟質。暗灰色砂粒多。破砕貝少。  
 3: 灰黒色土 土粒極細。粘性弱。軟質 (2層より硬質)。暗灰色の砂主体。破砕貝極多。黒色は少。

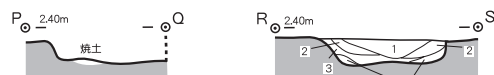
- 1号土器集中 (J-K)  
 1: 黒色土 土粒細。粘性やや強。軟質。暗灰黄褐色砂粒やや多。明るい。



- 13号土坑 (N-O)  
 1: 黒褐色土 標準土層のII層に相当する。軟質土をベースとする。白色の貝殻をまばらに含む。  
 2: 黒褐色土 標準土層のII層に相当する軟質土。灰色味を帯び、粘性性は強い。



- 7号溝状遺構・3号土坑 (A-C)  
 1: 黒色土 土粒細。粘性はやや強。やや軟質。微細な白色粒多。褐色砂粒やや多。やや灰色味あり。明るい。平安時代の遺物を含む。  
 2: 黒色土 1層に類似。1層より土粒細かく、やや軟質。  
 3: 黒褐色土 土粒やや細。粘性弱。軟質。黒色土主体。褐色砂粒極多。  
 4: 黒色土 土粒細。粘性やや強 (1層より弱)。軟質 (3層より軟質)。褐色砂粒少。  
 5: 黒褐色土 土粒細。粘性弱。軟質 (4層に類似)。黒色土主体。褐色砂粒多。3層より黒色味強い。  
 6: 黒色土 土粒細。粘性やや強 (4層より強)。軟質 (4~5層より硬質)。  
 7: 黒褐色土 土粒細。粘性弱 (砂質)。褐色砂粒主体。黒色土多。軟質 (4・5層より軟質)。  
 8: 灰黒色土 土粒細。粘性強。やや軟質 (1・2層より硬質)。鉄分を含む褐色砂質土が縞状に認められる。  
 9: 黒色土 土粒細。粘性強。やや軟質。暗灰色砂粒少。色調は5層に類似。貝殻少。  
 10: 灰褐色土 土粒細。粘性弱 (砂質)。極軟質。灰褐色砂粒主体。黒色土少。  
 11: 黒色土 土粒細。粘性強。軟質。破砕貝少。9層より黒色味強い。  
 a: 暗灰色土 土粒細。粘性強。シルト岩風化土主体。黒色土少。掘りすぎ？  
 12 (黒色土) 土粒細。粘性強。やや軟質 (1・2層より硬質)。白色粒極多。赤褐色粒微量。やや明るい。  
 13: 黒色土 土粒細。粘性強 (12層より強)。やや軟質 (1・2層より硬質で、12層より軟質)。微細な白色粒多。12層より黒色味強い。  
 14: 黒色土 土粒細。粘性は極強。軟質。微細な白色粒少。13層より黒色味強い。  
 15: 灰黄色土 土粒極細。粘性強。軟質 (14層に類似)。灰黄色砂質粘土層。  
 16: 灰黒色土 土粒細。粘性やや強。やや軟質 (13層に類似)。暗灰黄色砂粒やや多。赤褐色粒少。灰色味やや強い。



- 1号炉址 (R-S)  
 1: 黒色土 標準土層のIII層に相当する黒色土。粗粒。赤色スコリア粒・米粒大のバミスを含む。粘性性は少ない。  
 2: 黒色土 粗粒。1と同様であるが赤褐色の砂をブロック状に含む。  
 3: 黒色土 粗粒。1・2と同様であるがやや黒味が強く、粘性性を帯びる。  
 4: 黒色土 粗粒。3と同様であるが多量の砂をブロック状に含む。

図29-2 7号溝状遺構・1号土器集中・1号炉址・3号土坑・13号土坑実測図2 (S = 1/60)

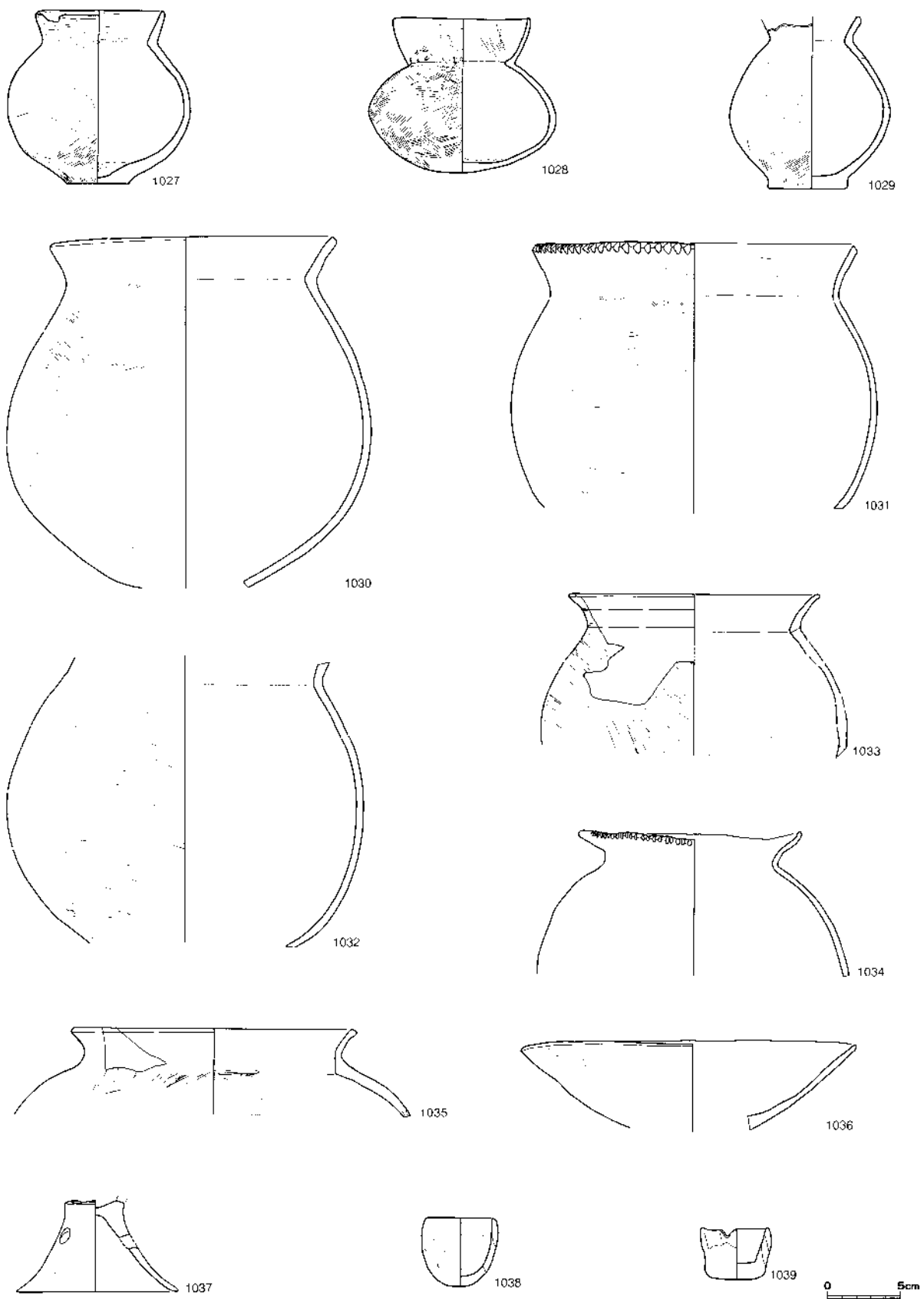


图30 1号土器集中出土遺物実測図1

胎土には微量の金雲母が含まれる。1028は小型の丸底壺形土器で、最大径は胴部中位にあり、口縁部はやや内彎する。口径9.5cm、頸部径7.5cm、胴部径13.0cm、器高10.7cmを測る。器面はハケ目調整の後ナデが施され、胴部内面はハケ目が消されている。1029も小型壺形土器出、口縁部を欠いている。頸部径5.7cm、胴部径11.2cm、底径5.5cm、残存部の器高12.0cmを測る。器面調整はハケ目の後ナデが施されている。1030～1035はハケ目調整の甕形土器である。1031と1034の口唇部には刻み目を施す。1034の口縁部は受け口状をなす。1035は肩部が張り、頸部内面が直立し、下端に明瞭な稜を有する。1036は高坏坏部で、口径23.3cmを測る大型品である。外面は斜め方向の荒いハケ目調整後、横位のミガキ、内面は粗いハケ目調整後、縦位のミガキが施されている。1037は高坏脚部である。脚端部径11.2cm、遺存部での器高6.4cmを測る。外面は縦位のハケ目調整後ミガキ、内面はハケ目調整後横位のナデが施されている。胎土は緻密で、焼成も良好である。1038と1039は小型手捏鉢形土器である。1038は丸底で、口径4.9cm、器高4.8cmを測る。1039は口唇部を僅かに欠いているが、口径4.8cm、器高3.6cmを測る。つくりがやや厚い。2135～2137は折返し口縁壺形土器口縁部破片である。2135には口縁部内面に2列の刺突文が巡らされている。焼成はやや軟質で、胎土には粗砂粒を多含する。2136と2137は同一個体の小型精製品で、口縁部外面ヨコナデ、頸部外面ハケ目調整後、上半部はナデが施されている。内面は丁寧なミガキ調整が施されている。口縁部外面に3条の沈線が見られる。2138と2139は小型短頸壺口縁部破片である。内外面ともナデ調整が施され、わずかにハケ目が認められる。2138の色調は淡灰褐色を呈する。2139は淡褐色を呈し、内面に赤彩の痕跡が認められる。ともに胎土には粗砂粒を多含し、焼成は良

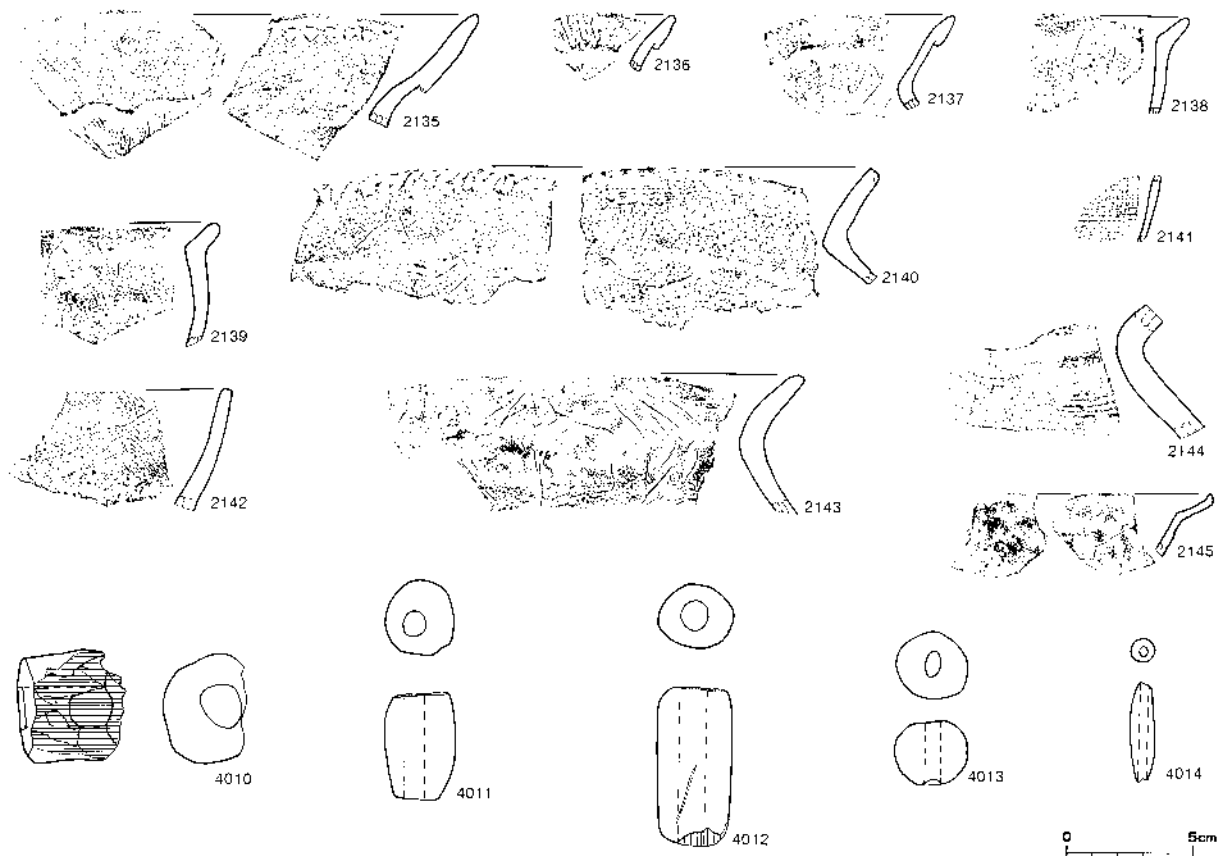


図31 1号土器集中出土遺物実測図2

好である。2140はハケ目調整の甕形土器口縁部破片で、口唇部外面に刻み目が施されている。2041はS字状口縁台付甕の肩部付近の破片で、従位のハケ目を切って横位のハケ目が施されている。器壁は薄く、焼成は良好である。2142は埴ないし壺形土器の口縁部破片で、口縁部外面には細かなハケ目が残され、下部および内面はナデ調整が施されている。2143は甕形土器口縁部破片で、内外面ともナデ調整が施され、内面は丁寧である。古墳時代後期に比定される。2144は須恵器甕肩部破片である。頸部外面および内面はナデ調整が施され、肩部外面には平行叩き目が見られる。2145は青磁折縁鉢の口縁部破片で、体部内面に蓮弁文を陰刻する。素地は淡灰色、釉は灰緑色を呈する。4010はふいご羽口の先端部と推定される土製品で、被熱している。残存部での長さ4.1cm、外径3.8cm、孔径1.6cm、重量56.7gを測る。4011～4014は完形品の土錘である。4013のみ球状を呈する。4011は長さ4.1cm、外径2.7cm、重量32.7gを測る。灰黒色を呈し、焼成は普通である。胎土は緻密であるが、微量の小礫が含まれている。4012は円筒形に近い管状土錘で、長さ6.2cm、外径2.9cm、重量50.4gを測る。淡橙褐色を呈し、焼成は普通である。4013は長さ2.5cm、外径2.5cm、重量19.6gを測る。暗灰褐色を呈し、焼成は普通である。4014は攪乱土からの出土で、棗玉形を呈する。長さ3.7cm、外径1.0cm、重量3.5gを測る。

出土遺物から、本址の所産時期は古墳時代前期と考えられる。

## E 土坑

### ・1号土坑(図23・32、写真65・66)

本址はF9区北西部、3・4号溝状遺構の内側に位置する。遺構確認面は層上面で、標高は3.25m程である。平面形は不整円形を呈し、上端の径1.0×0.94m、下端の径0.70×0.60m、深さ20cmを測る。覆土は層に相当するやや軟質の黒色土であった。

出土遺物は、確認面付近のレベルで土器片がややまとまって出土した。1040は小型壺形土器胴部で、復原径12cmを測る。外面ハケ目調整、内面は丁寧なナデ調整が施される。1041は台付甕形土器脚台部である。端部は内側に折り返されている。端部径は7.5cmを測る。外面ハケ目調整、内面ハケ目調整後、丁寧なナデ調整が施される。暗褐色を呈し、焼成は良好である。1042は精製小型丸底埴で、内外面ともに丁寧なミガキ調整がなされ、赤彩が施されている。口径10.1cm、頸部径8.6cm、器高5.8cmを測る。2146は単節LRとRLの羽状縄文が施される縄文土器破片である。胎土には繊維を含む。前期黒浜式に比定される。2147は埴形土器の口縁部から胴上部にかけての破片である。外面全体と口縁部内面に赤彩が施されている。焼成は良好である。

本址の所産時期は、出土遺物から古墳時代前期に属するものである。性格は明らかでない。

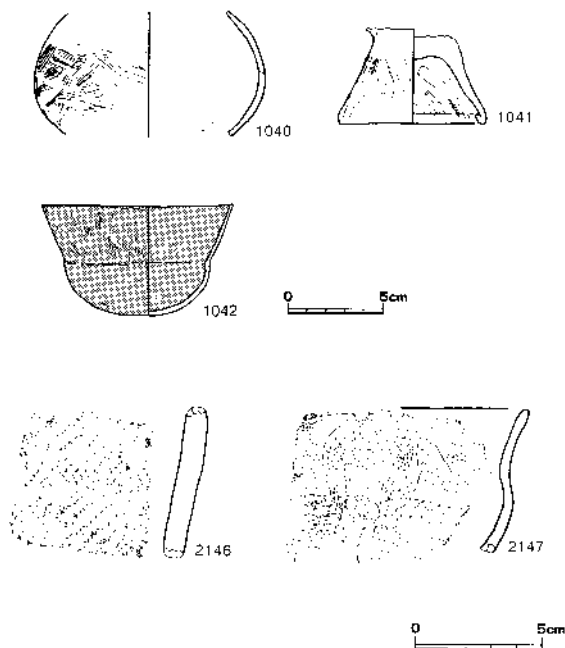


図32 1号土坑出土遺物実測図

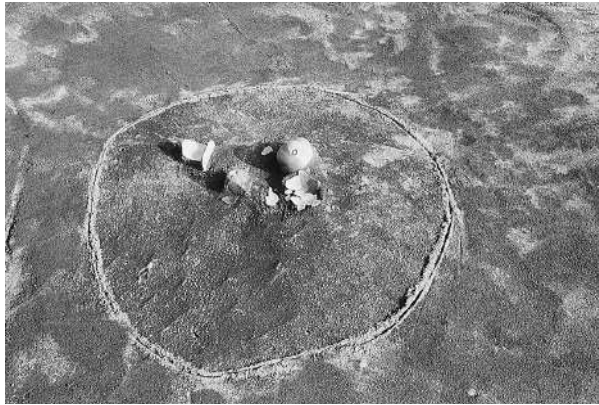


写真65 1号土坑遺物出土状況（北西より）

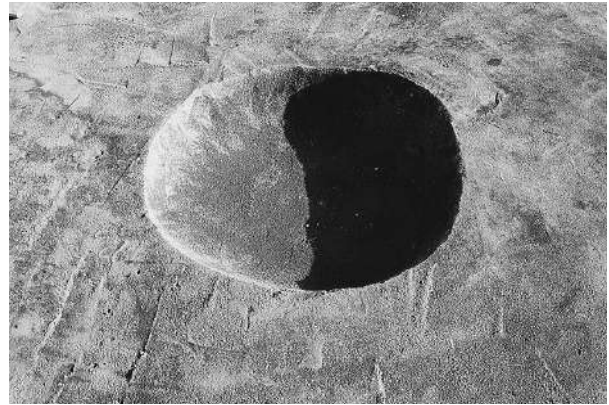


写真66 1号土坑掘り上げ状況（北北西より）

### ・2号土坑（図23、写真67）

F9区北東部、1号土坑北側に近接して存在する。遺構確認面は層上面で、1号土坑とともに検出された。平面形は不整楕円形を呈し、北西-南東方向に長い。長軸上端1.10m、下端0.75m、短軸上端0.93m、下端0.53m、深さ34cmを測る。覆土は、層に相当するやや明るい細粒軟質の黒色土であった。

出土遺物は皆無であった。

時期・性格ともに明らかでないが、覆土より古墳時代前期と推定される。1号土坑同様、3・4号溝状遺構との関係は明らかでない。

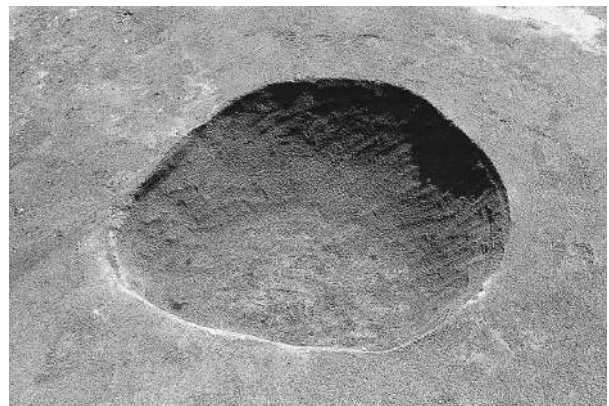


写真67 2号土坑掘り上げ状況（南より）

### ・3号土坑（図29・33、写真68～70）

本址はB2区北東端部付近に位置し、7号溝状遺構と1号土器集中と切り合い関係にある。7号溝状遺構との新旧関係は明らかでないが、土層断面の観察から1号土器集中より新しいと判断された。遺構確認面は層のほぼ上面であった。

平面形は、上端で不整楕円形、下端で不整円形を呈し、上端径2.16×1.84m、下端径1.23×1.38m、深さ50cmを測る。底面北側に寄って上端径約70cm、深さ18cm程のピット状の掘り込みがある。

覆土は、層相当の黒色土ないし黒褐色を主体とする自然堆積土であった。

出土遺物は、覆土下層から少量出土した。1043と1044は壺形土器胴部下半から底部である。1043の外面にはハケ目調整痕が残され、内面はナデ調整が施されている。底径は3.0cmを測る。1044は1/2程度の破



写真68 3号土坑遺物出土状況1（北西より）



写真69 3号土坑遺物出土状況2(南東より)



写真70 3号土坑掘り上げ状況(南より)

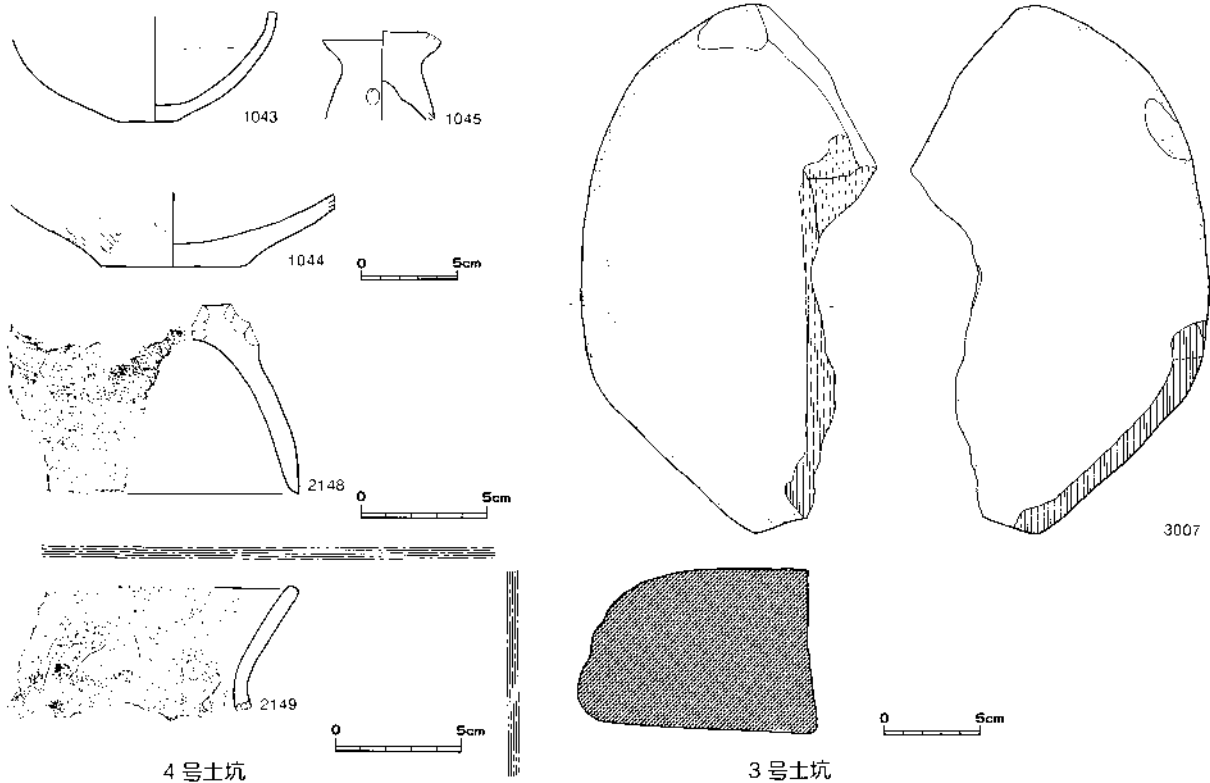


図33 3・4号土坑出土遺物実測図

片で、外面縦方向のミガキ、内面ナデ調整が施されている。復原底径は7.5cmを測る。1045は高坏脚部破片で、円形の透かし孔2孔が確認できる。2148は台付甕形土器脚台部破片である。中位が外側に膨らみ、断面は内彎する。内外面ともナデ調整が施され、胎土には粗砂粒が多含まれている。焼成はやや軟質である。3007は台石と考えられる欠損品である。表裏面とも平滑な面をなす。残存部の長さ28cm、幅15cm、厚さ8.4cm、重量4,900gを測る。石質は含かんらん石輝石安山岩である。

本址の所産時期は、出土遺物と覆土から古墳時代前期と考えられる。その性格は明らかでない。

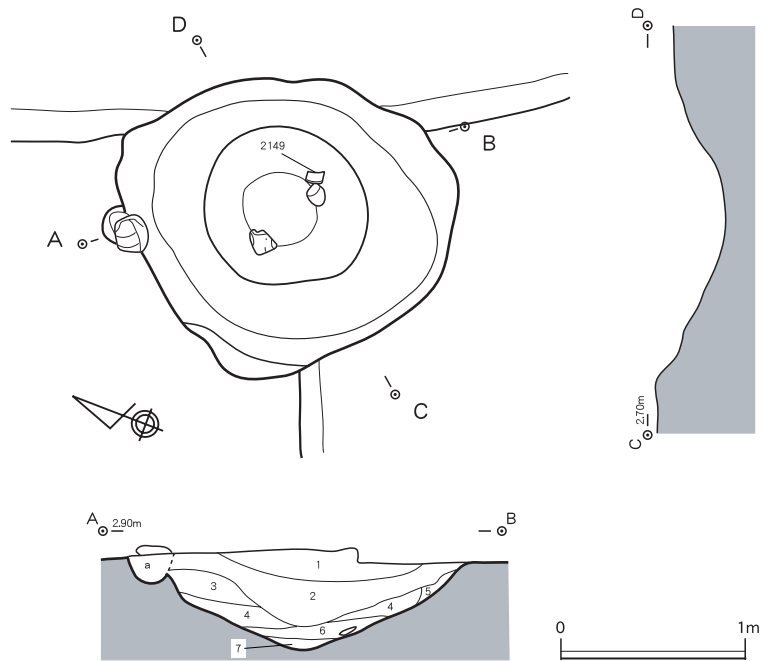
・4号土坑(図33・34、写真71・72)

C3区ほぼ中央に位置する。8号溝状遺構の南西1.6m、D貝層下にあたる。不整円形を呈し、上端径2.75×2.43m、下端径2.25×1.85mを測り、南北方向にやや長い。底面は中央部に向って傾斜しており、

中央部はなだらかな窪みが存在する。3号土坑ほど明確なピット状をなさないが、類似するあり方といえる。深さは、最も深い所で80cmを測る。覆土は層相当の軟質な黒色土を主体とする自然堆積土である。

出土遺物は極めて僅かで、土器片は2149の1点のみ図示可能であった。壺形土器口頸部の破片である。内外面ともナデ調整が施されている。焼成は良好であるが、胎土に粗砂粒が多含まれており、器面は細かくひび割れている。以上のほか、窪み内から自然礫が2点出土している。また、北西部上端には本址とは関係しない小ピットが存在し、その上から扁平な自然礫が検出されている。

本址の所産時期は、出土遺物と覆土から古墳時代前期と推定される。その性格は不明である。



4号土坑 (A-B)

- 1: 黒色土 土粒細。粘性弱。軟質。黄褐色砂粒少。破砕貝やや多。
- 2: 黒色土 土粒極細。粘性弱(やや砂質)。軟質(1層より硬質)。暗灰黄色砂粒極多。明るく、灰黄色味強い。
- 3: 黒色土 土粒細。粘性弱(1・2層より強)。軟質(1層より硬質、2層より軟質)。暗灰黄色砂粒少。1・2層より黒色味強い。
- 4: 黒色土 土粒細。粘性弱(3層に類似)。軟質(3層より軟質)。暗灰黄色砂粒やや多。木炭粒微量。
- 5: 暗灰黄色土 土粒細。粘性弱(砂質)。極軟質。黄褐色砂粒主体。黒色土・破砕貝多。IV層の崩落土。
- 6: 黒色土 土粒極細。粘性やや強。軟質(3・4層より軟質)。木炭粒・木片粒・暗灰黄色砂粒少。黒色味最も強い。
- 7: 灰黒色土 土粒細。粘性弱(砂質)。軟質(6層より軟質)。黒色土主体。暗灰黄色砂粒極多。明るく、灰黄色味強い。
- a: 黒色土 土粒細。粘性弱。軟質(2層より軟質)。破砕貝を多含する暗灰黄色砂粒多。色調は3層に類似。

図34 4号土坑実測図 (S = 1/40)

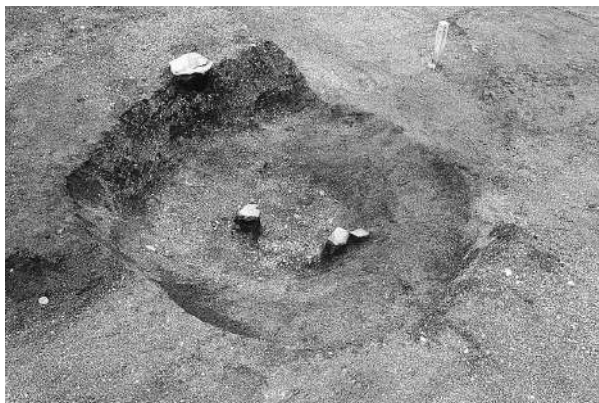


写真71 4号土坑(南より)

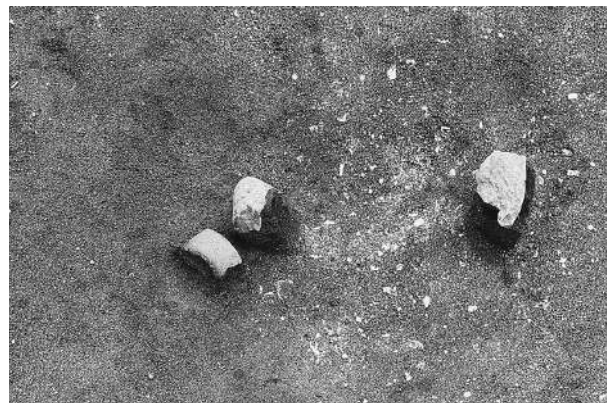


写真72 4号土坑遺物出土状況(北より)

・5号土坑(写真73)

C6区内東部に位置し、北西側に存在する攪乱により大半が破壊されている。遺構確認面は層上面であった。掘り込みも浅く遺存状態は極めて悪い。平面形は不明であるが、残存部から円形ないし楕円

形を呈するものと推定される。残存部での上端径または幅は0.92m、深さ8cmを測る。覆土は 層相当の軟質で砂質分の多い黒色土であった。

出土遺物は皆無であり、所産時期・性格とも不明であるが、覆土より古墳時代前期と推定される。



写真73 5号土坑（北東より）画面左手は攪乱



写真74 6号土坑遺物出土状況（東より）

・6号土坑（図35・36、写真74・92）

D8区北部に位置する。北側は攪乱により破壊されている。遺構確認面は 層上面で、不整円形を呈する黒色土の落ち込みとして検出された。

平面形は不整な円形を呈するものと推定される。東西の上端径2.0m、下端東西径1.13m、下端南北径1.25m、深さ80cm程を測る。下端はかなり不整形を呈する。覆土は、北側攪乱部の壁面観察により、あらかじめ異常な堆積を示すことが窺えた。上部約25cmは 層の黒色土の自然堆積土が見られ、土器片が比較的多く伴っていた。この黒色土の直下はやや凹凸の激しい硬化面として存在し、この硬化面は壁面にも及んでいた。攪乱部の壁面観察で、覆土がさらに下位にまで続いているのが判明していたため、上層の遺物を取り上げた後、硬化面を掘り下げることにした。硬化層はおよそ50cm続き、その中位に層厚6cm程の炭と灰を主体とする堆積土が認められ、上面の一部には焼土も存在した。

この硬化層が一度に形成されたものではないことを示唆している。土器片は、少量であるが硬化層からも出土している。

1046は口縁部と底部を欠く甕形土器で、器面調整は粗いハケ目調整の後ナデが施されている。内面のナデ調整は縦方向に丁寧に施されている。1047は甕形土器口縁部から肩部にかけての破片である。口唇部に刻み目を有する。1048は台付甕形土器の脚台である。端部径9.8cmを測る。外面にはヘラ状工具による縦方向のナデが施されている。1049は器形不明

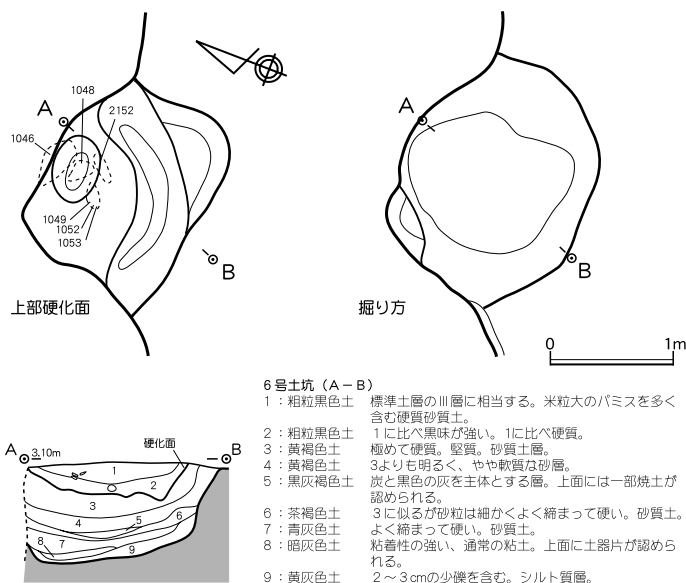


図35 6号土坑実測図 (1/60)

である。内外面ともナデ調整が施されているが、あまり丁寧ではない。内面の調整がやや雑な点から脚部と推定した。器壁が厚く、胎土には砂粒が多含まれている。淡黄褐色を呈し、焼成は普通である。

1050は底脚台付鉢形土器ないし甕形土器の下半部である。脚端部径6.2cm、脚部高2.0cmを測る。器面調整は八ケ目後、ナデ調整が施されている。1051は小型壺形土器の口縁部から肩部にかけての破片である。推定口径7.8cmを測る。器面調整は丁寧で、外面はミガキ、内面はナデが施されている。頸基部内面には接合痕が見られる。1052は高坏脚部である。脚部は椀を伏せたような特異な形状を呈する。脚端部径推定8.4cm、柱状部径4.8cm、残存部高6.5cmを測る。器面は、ナデ調整が施されている。1053は小型器台脚部である。脚端部径8.2cm、残存部高5.9cmを測る。外面は丁寧な縦方向のミガキ、内面は八ケ目調整後ナデが施されている。外面は赤彩されている。2150と2151は縄文土器破片で、混入品である。ともに摩耗が著しい。2150は阿玉台式、2151は加曽利E式に比定される。2152は短頸埴の口縁部から肩部にかけての破片である。内外面ともナデ調整が施されており、内面には輪積み痕が残されている。胎土には粗砂粒が多含まれる。焼成は良好である。

本址の所産時期は、出土遺物から古墳時代前期に比定される。本遺跡では他に例を見ない遺構であり、その性格については明らかでないが、硬化層中に焼土や灰などが見られるところから、祭祀あるいは生産に関わる遺構ではないかと考えられる。

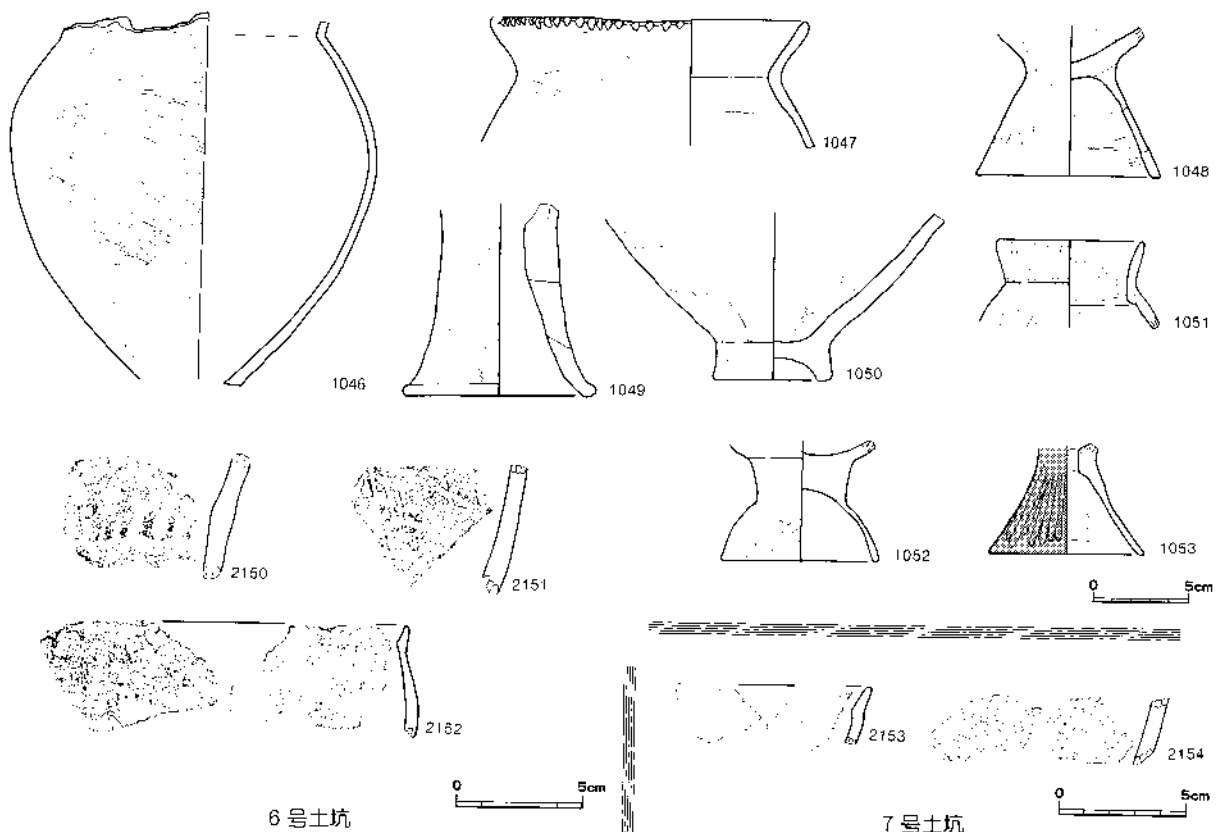


図36 6・7号土坑出土遺物実測図

・7号土坑 (図36、写真75)

B 5区西端部、解体校舎の基礎枠内で検出された。遺構確認面は 層上面であった。北東部および北

部は攪乱により破壊されている。

平面形は、東北東 西南西を長軸とする楕円形で、上端の長軸1.2m、短軸0.98m、深さ35cmを測る。下端は10～20cm掘り過ぎているため、形状・規模とも不明である。覆土は 層相当の黒色土を主体とする自然堆積土であった。

出土遺物は僅かで、2点のみ図示した。2153は短頸埴の口縁部細片である。内外面とも赤彩が施される精製品である。2154はハケ目調整の甕形土器胴部破片である。内面はナデ調整が施されているが、一部にハケ目を残している。

本址の所産時期は、僅かな出土遺物と覆土から古墳時代前期と考えられる。



写真75 7号土坑（北東より）

## F 炉址

### ・1号炉址（図29・37、写真76）

B 2区西部、解体校舎の基礎枠内で検出された。遺構確認面は 層上面である。坑底の一部に焼土が認められたため、炉址として処理することとした。

平面形は、東西方向を長軸とするやや不整な隅円長方形を呈する。長軸上端1.1m、同下端0.95m、短軸上端0.98m、同下端0.8m、深さ20cm程を測る。南西隅部付近は基礎枠の下に当たるため完掘できなかった。覆土は 層相当の黒色土を主体とし、下層には砂がブロック状に含まれていた。底面東端部付近には径40～50cmの範囲で焼土が認められた。



写真76 1号炉址（東より）

出土遺物は少なく、2点のみ図示した。2155・2156ともに甕形土器口縁部破片で、口唇部は面をなす。内外面にハケ目調整が施され、2155が内外面とも横方向、2156が外面縦方向、内面横方向である。このほか、覆土中より鉄滓が1点出土している。

本址の所産時期は、出土遺物と覆土から古墳時代前期に比定される。性格は明らかでないが、鉄滓が出土していることから、鍛冶炉である可能性も考えられる。この点、本址の北東約4mに位置する1号土器集中から、ふいごの羽口とみられる土製品の残欠（4010）が出土していることは注目される。

## G 落ち込み

### ・1号落ち込み（図37、写真77・78）

C 4区東端部に位置する。南北ともに攪乱により破壊されている。一部G・H貝層と重複する関係にある。黒色土の落ち込みとして検出された。東側はG貝層に覆われており、20cm程の比高差を有する幅

30～70cmの段状をなしている。H貝層が重複する西側には、段状部からの深さ10cm程で北北西 南南東方向に溝状の落ち込みが存在する。調査中、これらを別の遺構として調査を進めたが、ここでは一括することとした。本落ち込み内、および周辺にはピットが検出されているが、本址との関係は不明である。一部のみの遺存であり、全体の様相が把握不能なため、性格等の詳細は明らかにし得ない。



写真77 1号落ち込み全景（北西より）



写真78 1号落ち込み南東部遺物出土状況（南より）

出土遺物は、G・H貝層のものと厳密に区分することが困難な状況にあったものが含まれている。1054は埴形土器の1/3程度の破片である。最大径は口縁部にあり、体部との境界径10.4cm、底径4.2cmを測る。底部のつくりは体部および口縁部に対して厚く、1.1cmを測る。器面の調整は、外面がハケ目後丁寧なミガキで、内面も強いミガキが施されている。1055は、壺形土器底部破片である。底径5cmの小型品である。胴部外面は横方向のミガキ調整、内面はナデ調整が施されている。焼成は良好で、顕著な黒斑が認められる。1056は高坏の坏部底面から脚部にかけての破片である。外面と坏部内面が赤彩され、器面調整は丁寧なミガキが施されている。2157は壺形土器の頸基部から肩部にかけての破片である。頸

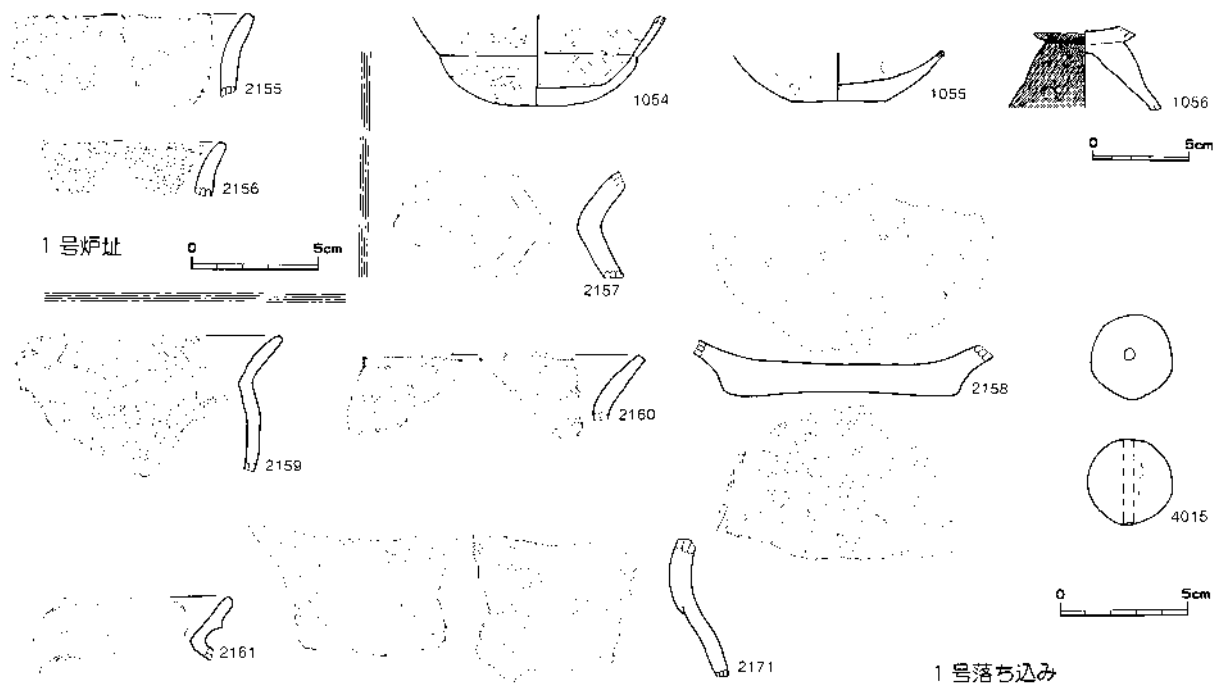


図37 1号炉址・1号落ち込み出土遺物実測図

部外面は斜め方向のハケ目調整後ナデ、肩部は縦方向のハケ目調整後ナデ、内面は横方向のナデが施されている。色調は暗灰色を呈し、焼成は普通である。胎土は緻密であるが、全体に砂質が勝っている。2158は壺形土器底部破片で、底部外面ナデ調整、胴部外面ハケ目後ナデ調整、内面は不定方向のハケ目調整のままである。灰褐色を呈し、焼成は良好である。2159～2161は甕形土器口縁部破片である。2159は小型品でハケ目調整後ナデが施されている。2160はハケ目調整後口縁部がヨコナデされている。2161はS字状口縁甕形土器で、胎土には金雲母が含まれている。2171は溝状の落ち込み部分の北西外側から出土した。土師器長胴甕の頸部破片で、頸部は内外面ヨコナデ、肩部は不定方向のナデが施されている。頸基部内面には輪積み痕が認められる。焼成は良好で、胎土は砂質である。4015は球状土錘で、中央には径0.4cmの孔が開けられている。長さ・外径とも3.3cm、36.0gを測る。

以上の出土遺物は、2171が調整技法から古墳時代後期に比定され、これ以外は、古墳時代前期に属するものである。2171は1054などの付近から出土しており、混入品と考えたい。本址の所属時期は古墳時代前期であろう。

・ 2号落ち込み (図20・38)

C5区西部に位置する。K貝層の西側に近接し、南側の一部で重複し、貝層が覆っている。北側は解体校舎の基礎工事により失われ、南半部には旧校舎の基礎工事に伴う溝状の掘り方により分断されている。幅2.2m、長さ7.6m程の範囲に検出されたが、遺存状況は良くない。西側には5号土坑が存在する。

本址は、東側の層上面から約15cmの比高差をもって窪んでおり、層相当の黒色土が堆積していたものである。検出時においては、南西方向から延びる黒色土の落ち込みが北端部で北東と南東方向に分岐する溝状の遺構と観察された。南西端部での幅は1.1m程であったが、北部では明らかにできなかった。遺存状況が悪く、詳細を明らかにすることはできなかった。

出土遺物は少ない。2162は精製壺形土器肩部破片である。外面および頸部内面に赤彩が施されている。

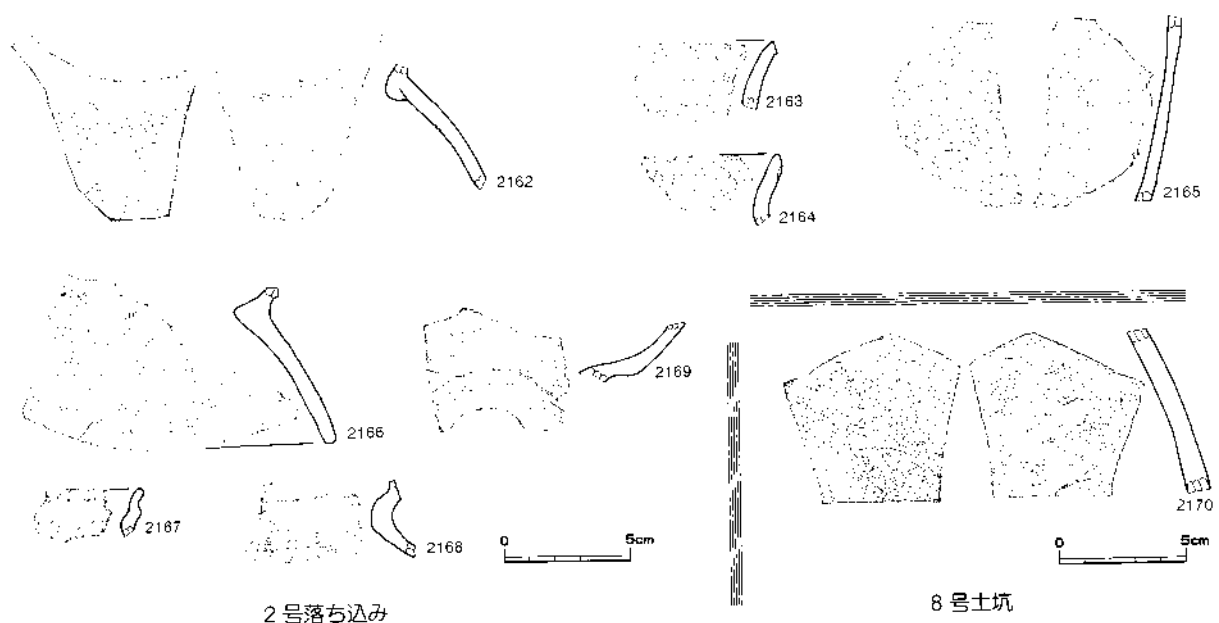


図38 2号落ち込み・8号土坑出土遺物実測図

外面の調整はハケ目後、丁寧なナデ調整、内面もナデ調整である。頸基部内面には接合痕が残されている。焼成は良好で堅く焼き締まっている。2163と2164は甕形土器口縁部破片である。両者とも口唇部外面に刻み目が施されている。2164の刻み目は口唇部下端にあり、口唇部はヨコナデされている。ともに内外面ともナデ調整が施されている。2165は甕形土器胴部破片である。内外面とも細かなハケ目調整が施され、内面はナデが加えられている。内面には輪積み痕が認められる。2166は台付甕形土器脚台部破片である。外面は縦方向のハケ目調整、端部外面から内面は横方向のナデ調整が施されている。2167と2168はS字状口縁台付甕の細片である。2168は頸部から肩部にかけての破片で、色調は灰褐色を呈し、胎土に金雲母を含む。頸基部内面には縦方向の指頭圧痕が顕著である。焼成はともに良好である。1069は高坏坏部下半の破片である。外面底部と体部の境界には明瞭な稜が存在する。内外面とも丁寧なナデ調整が施されている。色調は灰黒褐色を呈し、焼成は良好である。

## 第2項 古墳時代後期～平安時代の遺構と遺物

古墳時代後期～平安時代の遺構については、明確なものがなく、遺物の出土状況も極めて断片的なあり方を呈している。ここでは該期に属する可能性の高いものとして柱穴列と土坑各1基をまとめる。

### A 柱穴列

#### ・1号柱穴列(写真79)

B3区南西端部からB4区東半部に位置する。解体校舎基礎枠内の層上面で検出されたピット群から抽出した。3穴がほぼ東西方向に直線的に並ぶ。上端の径は40～50cm程で、確認面からの深さは、西側に位置するもの37cm、中央に位置するもの29cm、



写真79 B3・4区基礎枠内遺構調査状況(北西より)

東側に位置するもの22cmを測る。底面の標高は、それぞれ2.44m、2.41m、2.52mである。覆土はいずれも層相当の軟質黒色土を主体としていた。柱穴間の芯々距離は2.2m、1.8mを測り、西側の2穴間の距離が40cm長い。中央に位置するピットから須恵器の細片1点が出土している。ピットの組み合わせも含めて、詳細は明らかでない。

### B 土坑

#### ・8号土坑(図21・38、写真80)

C5区、1号住居址北西隅部付近に重複する。また、1号住居址西壁上部に沿うように検出された硬化面とも切り合い、本址がいずれよりも新しいと観察された。北側は旧校舎の基礎工事の際に破壊されている。平面形は隅円方形を呈し、一辺1.45mを測る。層を約10cm掘り込む程度で、検出時の遺存状態は良くない。覆土は層に相当する黒色土を主体としていたが、壁際は砂質土が多く混入し、プランが不明瞭であった。住居址の床面精査の過程で、覆土に多量の炭化米が含まれているのが確認された。

め、覆土はすべて採取することとした。

出土遺物は極めて少なく、1点のみを图示した。2170は須恵器甕形土器の肩部ないし胴部破片である。外面全面に白斑状の自然釉が認められ、外面の調整手法は明らかでない。内面は当て具痕が丁寧に磨り消されている。暗灰色を呈し、焼成は良好である。フローティングによる炭化米の抽出は、そのすべてを終了していない。計測・同定も経ていないが、長粒型のもと短粒型のもとが混在するようである。



写真80 8号土坑出土の炭化米

極めて僅かな出土遺物から、本址の所産時期は奈良時代ないし平安時代と推定される。

### 第3項 中世以降に属する遺構と遺物

この時期に属する遺構には、溝状遺構・竪穴状遺構・道路状遺構・井戸状遺構・土坑・墓・火葬址などがある。土坑は、人骨を伴わないものを一括したが、墓塚が含まれている可能性もある。また、墓については、墓塚が不明確なものも存在し、ある程度まとまりが認められる人骨の検出をもって「墓」とした。この場合、人骨の遺存状況に左右されるが、現実に頭蓋骨2個体分を一括せざるを得ない場合もあった。

#### A 溝状遺構

##### ・1号溝状遺構(図39・40、写真81・82)

調査区南西部、F・G10区東端部付近に位置する。確認調査の際、3Tで検出された。確認面は層のほぼ上面であった。走行方向は北北西 南南東を示し、直線的に延びている。総延長約12mにわたって調査された。上端の幅1~1.3m、下端の幅0.3~0.5m、深さ40~45cm程を測る。覆土は、細流・軟質で粘性に乏しい黒色土を主体とする自然堆積土であった。底面はほぼ平坦である。その標高は南端部で2.74m、北端部で2.79mを測り、僅かに北側が低い。

なお、北西延長上にあたるB11区の調査では、本址の続きは確認されなかった。

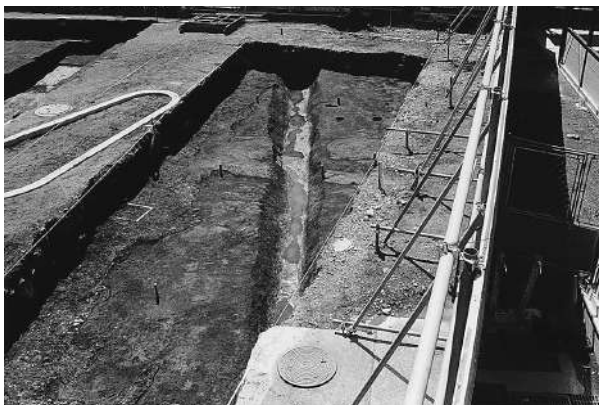
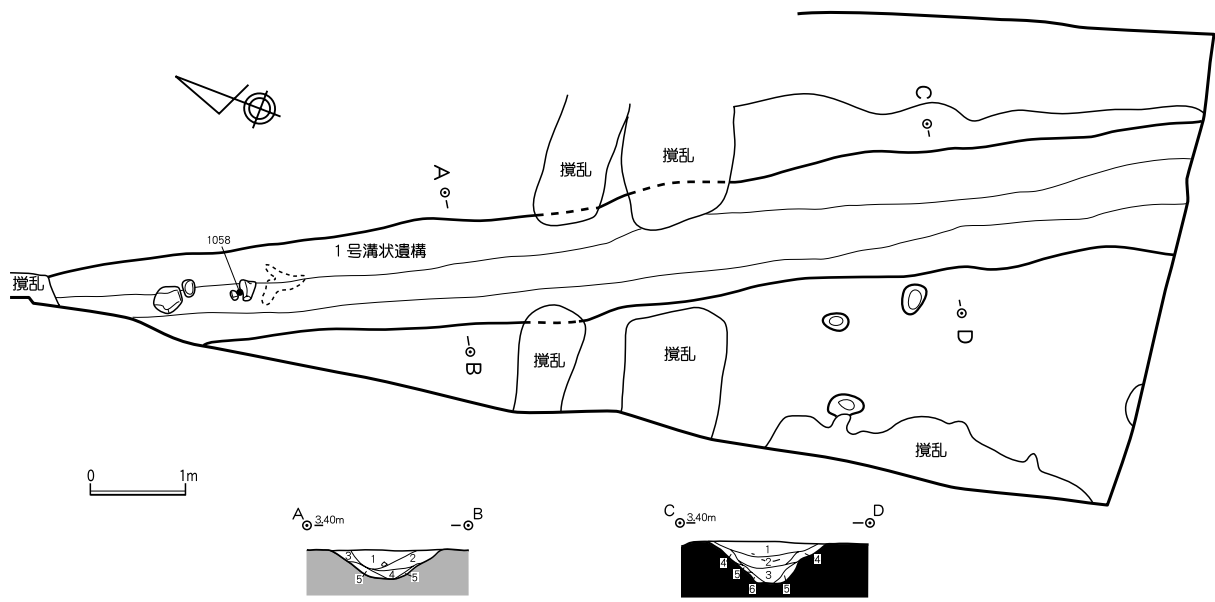


写真81 1号溝状遺構掘削後(北西より)



写真82 1号溝状遺構北西端部遺物出土状態(南東より)



1号溝状遺構 (A-B)

- 1: 黒色土 土粒細。粘性弱。やや軟質。褐色砂粒多。黄色粒やや多。赤褐色粒少。木炭粒微量。明るい。
- 2: 黒色土 土粒細。粘性は弱。軟質。微細な黄色粒・赤褐色粒少。木炭片(1cm大)微量。黒色味強い。
- 3: 黒色土 土粒細。粘性弱。やや軟質(1層より軟質)。灰褐色砂粒極多。明るい。
- 4: 黒色土 土粒細。粘性ややあり。軟質(2層より硬質)。赤褐色粒少。木炭粒微量。2層よりさらに黒色味強い。
- 5: 灰黄色土 土粒細。粘性弱。軟質(4層に類似)。砂粒極多。赤褐色粒微量。
- 6: 黒色土 土粒細。粘性弱。軟質(4・5層に類似)。砂粒多。4層より明るい。

1号溝状遺構 (C-D)

- 1: 黒色土 土粒細。粘性弱。やや軟質。黄色粒・赤褐色粒やや多。木炭粒微量に含む。やや明るい。
- 2: 黒色土 土粒細。粘性弱。軟質。黄色粒・赤褐色粒少。1層より黒色味強い。
- 3: 黒色土 土粒細。粘性ややあり。軟質(2層より硬質)。赤褐色粒少。木炭粒微量。2層よりさらに黒色味強い。
- 4: 黒色土 土粒細。粘性弱。やや軟質(1層に類似)。砂粒多。赤褐色粒は微量。明るい。
- 5: 灰黄色土 土粒細。粘性弱。軟質(3層に類似)。砂粒極多。赤褐色粒微量。
- 6: 黒色土 土粒細。粘性弱。軟質(3・5層に類似)。砂粒多。3層より明るい。

図39 1号溝状遺構実測図 (S = 1/80)

遺物は、主に上層から中層にかけて出土した。量的には多くない。1057は土師器坏である。口縁部外面および内面はヨコナデ、体部と底部はナデ調整が施され、体部外面には指頭圧痕が認められる。1058は口ケ口成形の土師器坏である。底部外面には僅かに回転糸切り痕が認められる。1059と1060はかわらけで、1059の底部外面には回転糸切り痕とスノコ痕が見られる。1060は小振りのもので、口径8.1cm、底径6.0cm、器高1.4cmを測る。ともに胎土に少量の白色海綿体骨針を含む。以上のうち、1057は奈良時代、1058は平安時代に属する混入品である。

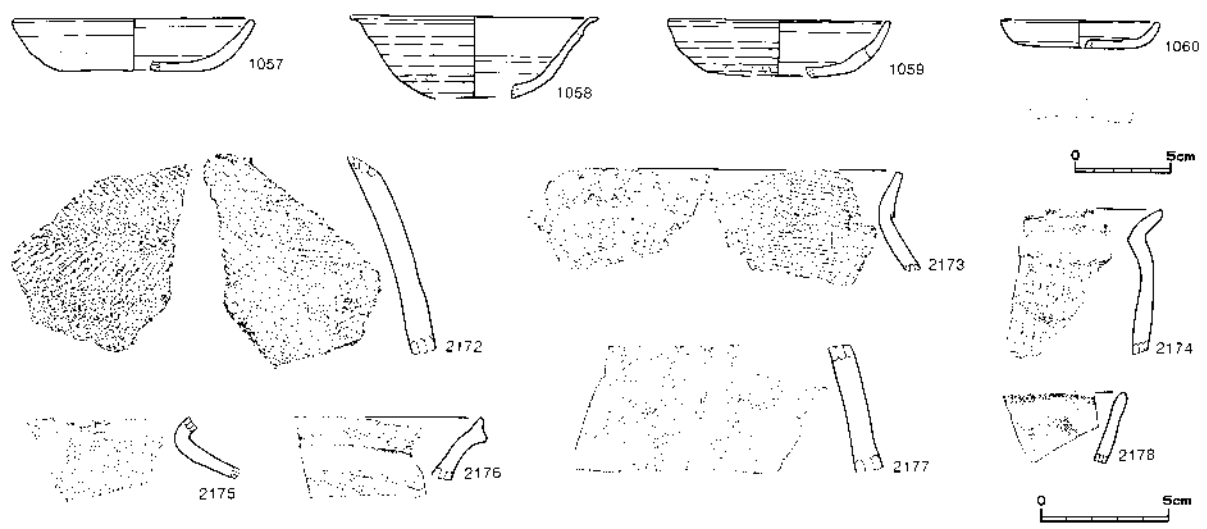


図40 1号溝状遺構出土遺物実測図

2172は壺形土器肩部付近の破片である。外面にはR LとL Rの単節縄文帯を羽状に配し、縄文帯間にS字状結節文が巡らされている。内面ハケ目調整痕が残されている。灰褐色を呈し、焼成は良好である。2173は折返し口縁風の小型壺形土器ないし甕形土器口縁部破片である。口唇部は面をなし、口縁部外面のみナデが施され、その他はハケ目痕が残されている。2174は小型短頸壺の口縁部から胴上部にかけての破片で、頸部内面に鈍い稜が認められる。内外面ともナデ調整が施されるが、外面胴部には斜め方向のハケ目の痕跡が残されている。2175はS字状口縁台付甕の肩部破片である。2176は須恵器長頸壺の口縁部破片である。内外面とも自然釉が認められ、灰色を呈する。口唇部のみ灰緑色に発色している。焼成は良好である。2177は須恵器甕形土器の胴部破片である。外面はハケ目風の平行叩き目が見られ、1条の釉が垂下している。内面の当て具痕は丁寧に磨り消されている。灰黒色を呈し、焼成は良好である。2178は外面に鏝文を陰刻する青磁碗の口縁部破片である。以上のうち、2172は弥生時代後期後半、2173～2175は古墳時代前期、2176と2177は平安時代に比定される混入品である。

本址の所産時期は、かわらけや青磁などの遺物から14～15世紀代に属するものと考えられる。遺構の性格は確定できないが、東漸寺に関連するものと推定される。

#### ・ 2号溝状遺構 (図41・42、写真83～85)

B 7～9区にかけて検出された。遺構確認面は層上面である。B 9区では遺存状況が悪く、北側の上端ラインのみ確認された。総延長約22mを測る。西南西 東北方向の走行を示し、B 7区で北へ向きを換えている。上端の幅1.6m～0.85m、下端の幅0.15～0.35m、深さ約80cmを測る。底面が遺存する西端部の標高は2.6m、屈曲部で2.31m、北端部で2.41mを測り、多少の起伏はあるが、相対的に西側が高く北



写真83 2号溝状遺構発掘風景



写真84 2号溝状遺構遺物出土状況(北より)



写真85 2号溝状遺構屈曲部(北東より)

側が低い。覆土は細粒・軟質の黒色土を主体とする自然堆積土と観察された。

遺物は、1号溝状遺構と同様に上層を中心に包含され、B 8区付近では比較的多く出土した。1061は

須恵器坏である。底部外面は回転ヘラ削り調整である。胎土は緻密で、白色海綿体骨針を含む。焼成は良好である。1062は陶器壺の口縁部破片である。口縁部は上下に拡張し、肩部の張りは弱い。灰黒色を呈し、焼成は良好である。胎土は緻密である。1063は陶器甕の口縁部破片で、口径が29.4cmに復原される大型品である。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には細礫を多含する。1064～1079は、

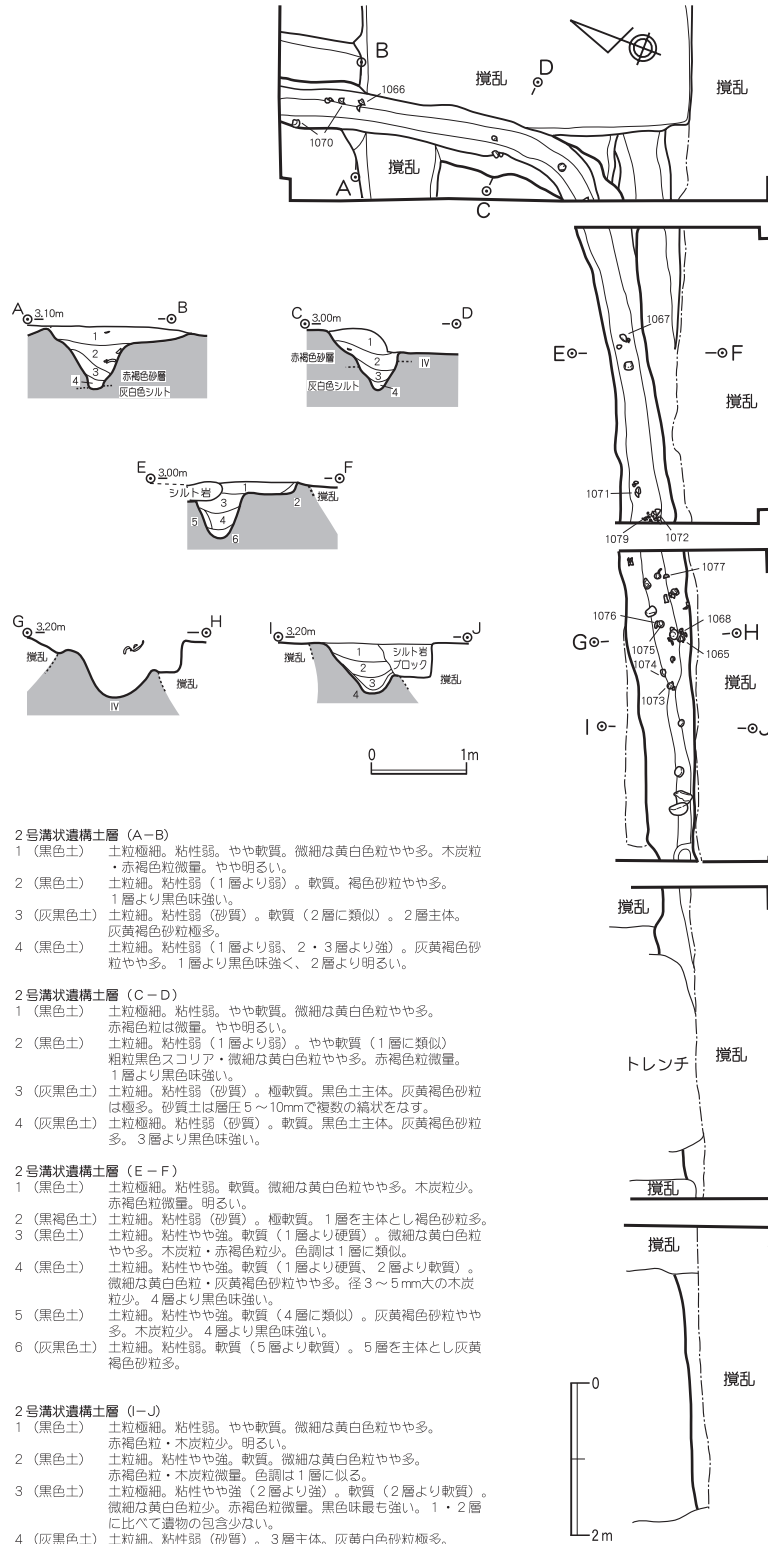


図41 2号溝状遺構平面図 (S = 1/100) 断面図 (S = 1/80)

かわらけである。これらの一群は口径が12cm前後のものと8cm前後のものに大別される。1071は口唇部ススが附着する。1064・1067～1069・1071・1073・1076～1079の胎土には、白色海綿体骨針が含まれている。2179は折返し口縁壺形土器ないし鉢形土器口縁部破片である。内外面とも八ケ目調整が施され、内面は丁寧なナデが加えられ、八ケ目が痕跡的に残る。横位の胎土は緻密で、焼成も良好である。橙褐色を呈する。2180はS字状口縁台付甕の口縁部破片である。2181は小型壺形土器の口縁部から胴部中位にかけての破片である。内外面ともナデ調整が施されている。肩部内面には輪積み痕が認められる。4016と4017はほぼ完形の管状土錘である。4016は棗玉形を呈し、長さ5.5cm、最大径2.0cm、重量23.1gを測る。4017は円筒形を呈し、長さ6.5cm、径2.6cm、重量42.4gを測る。

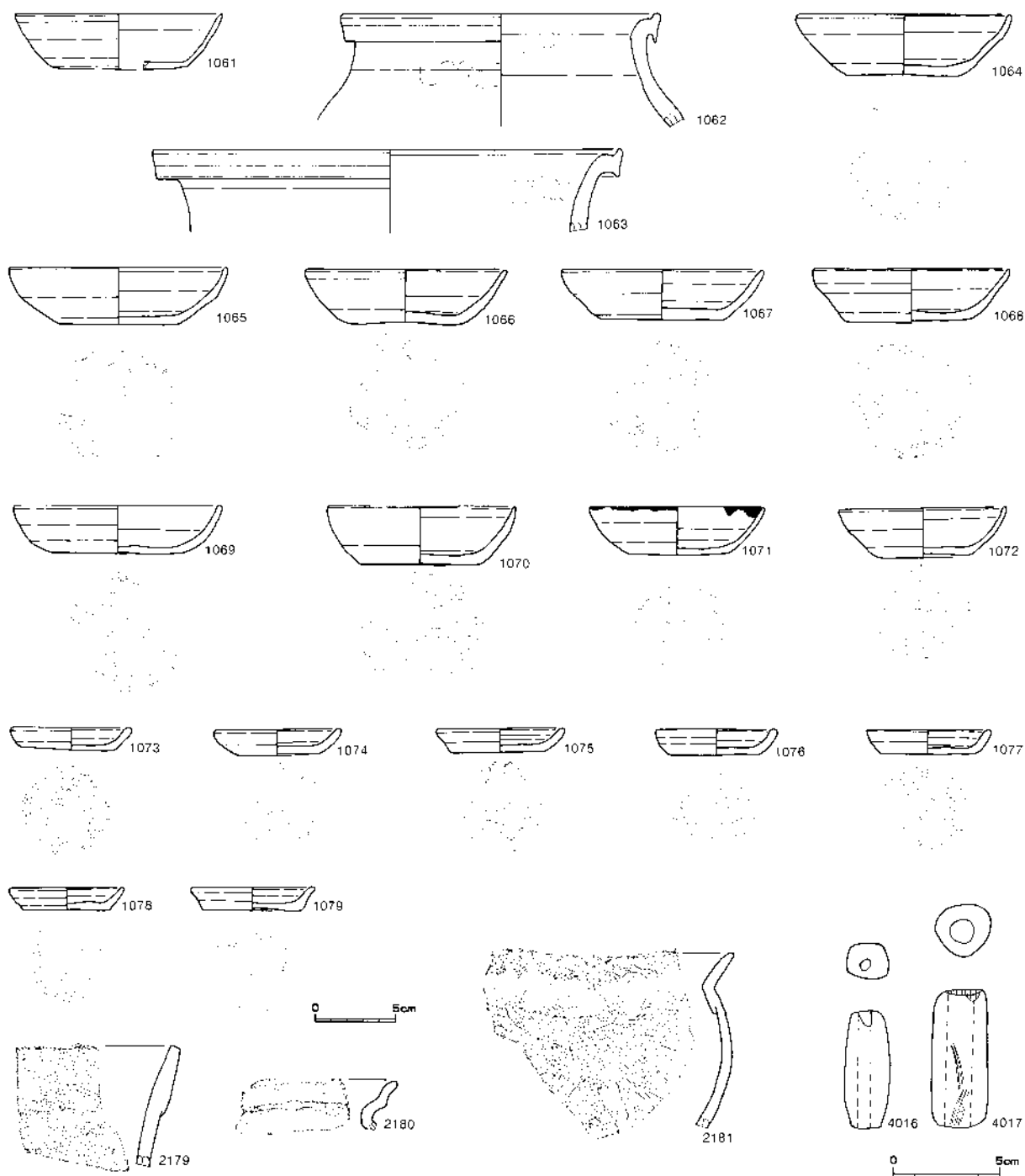


図42 2号溝状遺構出土遺物実測図

以上のうち、1061は奈良時代、2179～2181は古墳時代前期に比定される混入品である。他の事例から4016と4017も同様であろう。

本址の所産時期は、遺物から14～15世紀代に属するものと考えられる。本址も東漸寺に関連するものと推定される。なお、土器・陶器・土製品のほか、若干の自然礫が混在した。サンプルの同定結果では、輝石安山岩・細粒砂岩・粗粒砂岩・珪質頁岩が認められた。

## B 竪穴状遺構

### ・1号竪穴状遺構（図43、写真86～88）

調査区南端部、G・H9区東半部に位置する。北西壁際はイモ穴状の長方形の掘り込みによって一部を破壊され、南側は埋設管の掘り方によって破壊されている。西側には2号竪穴状遺構が僅かに切り合うが、新旧関係は明らかにできなかった。遺構確認面は層上面である。平面形は方形ないし長方形を呈すると推定され、東北東 西南西方向の上端で5.1 m、深さ40cm程を測る。覆土は、細粒・やや軟質な黒色土ないし黒褐色土を主体とする自然堆積であった。南西壁はなだらかに立ち上がり、床面との境界ラインは極めて不明瞭である。床面には若干の起伏があり、北東隅部付近に縄文時代の石皿（3009）を含む加熱痕跡のある礫の集中がみられた。この部分は若干窪んでいたが、焼土や灰は認められなかった。また、周辺部には硬化面が認められた。



写真86 1・2号竪穴状遺構（北北西より）



写真87 1号竪穴状遺構（北北西より）



写真88 1号竪穴状遺構遺物出土状況（西より）

遺物は少なく、集中して出土した礫を除いて覆土中からの出土であった。2182と2183は縄文土器片である。ともに摩耗が著しい。2182は節の大きなLR単節縄文が施文され、胎土に繊維を含む。2183は1条の隆帯が垂下し、その両側は太く浅い沈線となり、さらに斜位の条線が施されている。2182は前期黒浜式、2183は中期加曾利E式に比定される。2184は壺形土器口縁部の破片である。口唇部を欠く。内面口唇部側に細かなLR単節縄文帯が巡らされ、その下端はS字状結節文で区画されている。S字状結節文の上には径4mm程の円形浮文が1cm程の間隔で貼付されている。弥生時代後期後半に比定される。

2185は須恵器甕ないし壺型土器の頸部破片である。2186は陶器灯明皿の体部破片である。内面には全面に褐色釉が認められる。底部外面は回転糸切り痕が残されている。3008は石皿の破片である。裏面には径1～2cmの窪みが複数認められ、表面は剥離している。残存部の長さ18cm、幅8.5cm、厚さ7.5cm、重量1,104.2gを測る。石質は多孔質含かんらん石輝石安山岩である。3009は、含黒雲母軽石製の砥石と考えられる。表面に擦痕が認められる。長さ5.4cm、幅4.9cm、厚さ2.2cm、22.9gを測る。

大半の出土遺物は混入品とみられる。本址の所産時期は2186の灯明皿の時期に近いものと考えられ、江戸時代に比定しておきたい。性格については、不明である。

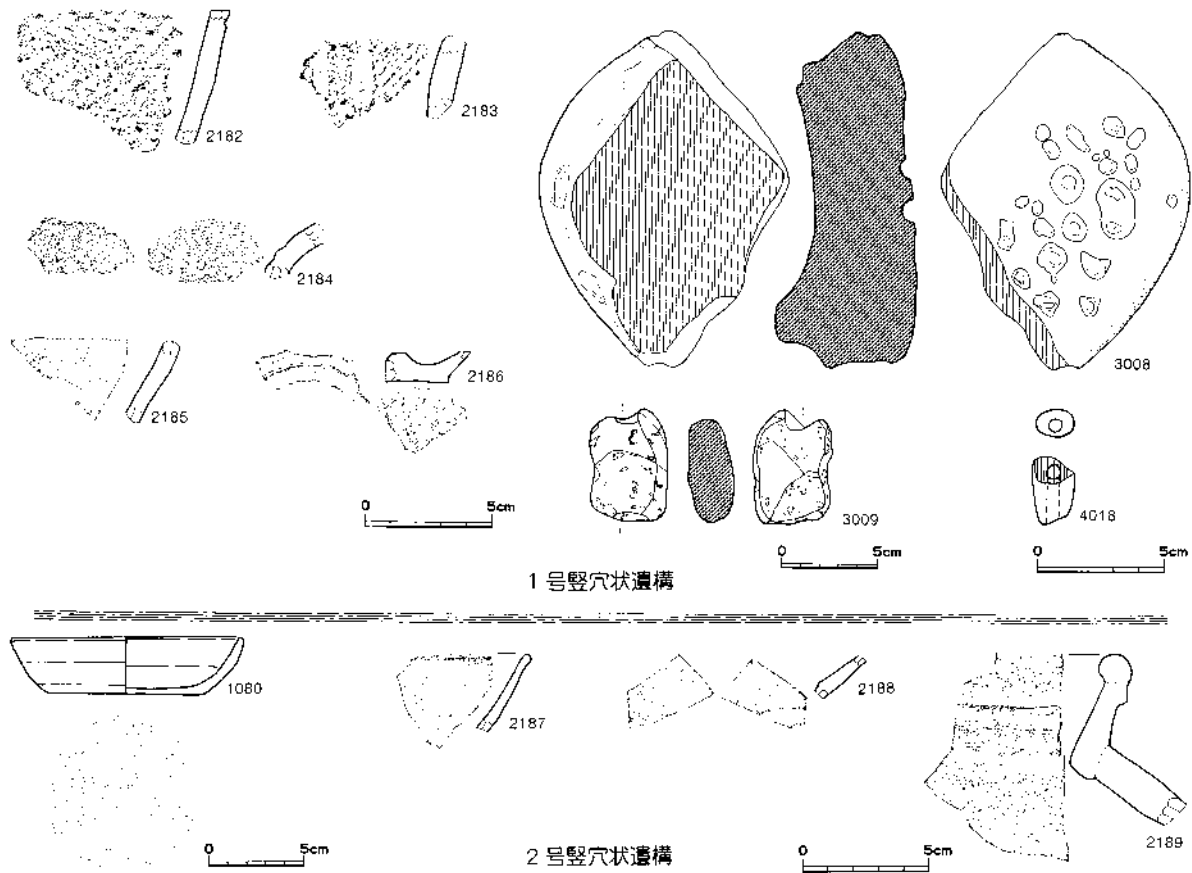


図43 1・2号竪穴状遺構出土遺物実測図

・ 2号竪穴状遺構 (図43、写真86・89・90)

G9・10区に位置する。西側は埋設管等の存在により、調査不能であった。また、本址は確認調査時の1Tにより東側2mが底面付近まで掘り抜かれている。平面長方形を呈するものと推定され、長軸は東北東 西南西方向に向ける。長軸方向は調査部分で上端4.3m、下端3.1m、短軸方向は城田4.2m、下端3.0m、層上面からの深さ75cmを測る。覆土は軟質な黒色土を主体とする自然堆積土であった。底面はほぼ平坦で、なんらの施設も認められなかった。その標高は2.64mを測り、調査中5～10cm程の滞水をみた。壁はやや外傾して直線的に立ち上がり、底面との境界ラインは比較的明瞭であった。上部はさらに大きく外傾して立ち上がる。

遺物は、北隅部壁際の上でほぼ完形のかわらけ1点が出土した以外は、覆土中より少量検出された

だけであった。1080が北隅部壁際から出土したかわらけで、口径12.3cm、底径8.2cm、器高3.0cmを測る。口縁部外面および内面はヨコナデ、体部外面は指頭による横位のナデが加えられている。底部外面には回転系切り痕とスノコ痕が認められる。焼成は普通で、胎土には微量の白色海綿体骨針を含む。

2187は灰釉陶器碗の口縁部破片である。2188は緑釉陶器段皿の体部破片で、内面下端に段が認められる。以上は平安時代に属する混入品である。2189は陶器短頸壺の口縁部から肩部にかけての破片である。口縁部は玉縁状をなし、口唇部は内側に肥厚する。外面頸部との境界に段を有する。肩部は水平に近く張っている。外面全面と頸部内面に暗褐色釉が施されている。器面調整はナデによっている。

本址の所産時期は、1080と2189により14～15世紀代に比定されよう。性格は不明である。



写真89 2号竪穴状遺構（南西より）

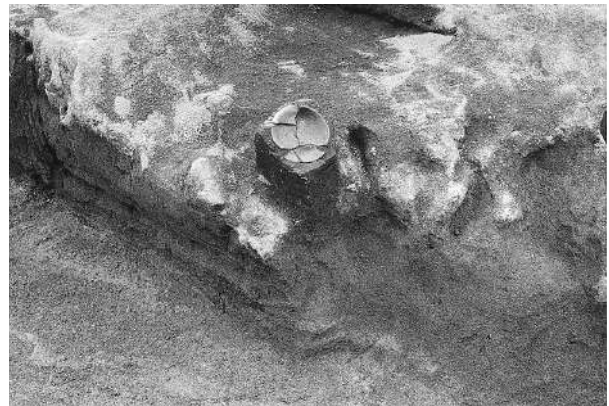


写真90 2号竪穴状遺構遺物出土状況（南より）

### ・3号竪穴状遺構（図48、写真91）

D9区南西部に位置する。墓地の調査の過程で確認された。9～11・16号墓が重複し、いずれよりも本址が古い。遺構確認面は層上面である。南北3.55m、東西3.3mのほぼ方形を呈する。深さは約20cmを測り、覆土は軟質で粘性に乏しい黒色土であった。床面はほぼ平坦で、床面施設は伴わない。壁は緩やかに外傾して立ち上がる。

図示し得る出土遺物は皆無である。覆土と墓の切り合い関係より、中世の所産と推定される。性格については不明である。



写真91 3号竪穴状遺構（北北西より）

## C 道路状遺構

### ・1号道路状遺構（写真92）

D8区東端部に位置する。走行は南南東 北北西方向を示す。南側は調査区外に及んでおり、北側は後世の掘り込みによって破壊されている。長さ約3mが遺存するに過ぎない。上端の幅は2.3m、深さ15cmを測り、全体として浅い溝状を呈する。覆土は層相当の細粒・軟質な黒色土であった。なお、北側攪乱部の対岸には1.2mの幅で周辺よりも硬化した面が検出された。

本址には、少なくとも2段階の硬化面が認められた。幅広く存在する硬化面の東側には、幅30cm、深さ8cm程の一段低い溝状をなす部分があり、幅広の硬化面を切っていることが観察された。

出土遺物は皆無であった。覆土から中世ないし近世の所産になるものと考えられる。



写真92 1号道路状遺構・6号土坑(北北西より)



写真93 1号井戸状遺構遺物出土状況(北北西より)

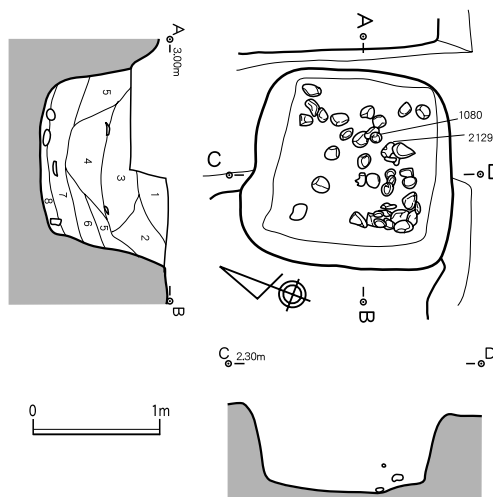
## D 井戸状遺構

### ・1号井戸状遺構(図44・45、写真93)

C7区東端部付近に位置する。東側至近には18号墓が存在する。東半部は、攪乱により上部約30cmが失われている。遺構確認面は層上面である。平面形は比較的整った隅円方形を呈し、上端で一辺1.55m、下端で1.25×1.30mを測り、南北がやや短い。深さは1.0mあり、底面はシルト岩層に達していた。

覆土は、細粒・軟質の黒色土を主体とする自然堆積土である。壁は若干外傾して立ち上がり、底面との境界ラインは比較的明瞭であった。底面は、中央部が緩やかに窪んでおり、その標高は1.98mである。底面付近の地層の境目から湧水が見られ、調査中15cm以上の滞水が確認された。

遺物は、覆土中層から下層にかけて陶器やかかわらの破片が検出された。底面のほぼ直上では、自然礫が多く出土した。1081~1083は陶器甕の口縁部破片の復原図である。1081の口唇部は上下に拡張され、頸部が長い。内外面とも褐色釉が施釉されている。1082は口唇部が上方に引き出され、肩部はナデ肩状を呈する。生地は暗灰褐色を呈し、口縁部内面および外面には灰釉が見られる。1083は口径41.7cmに復原される大型品で、口頸部のつくりが厚い。頸部は短く、肩が張る形状を示す。灰黒色を呈する。これらはいずれも焼成は良好である。1081は常滑焼、1082は瀬戸・美濃系、1083は渥美焼であろう。1084は口径9.8cmに復原され



- 1号井戸状遺構 (A-B)
- 1: 黒色土  
土粒細。粘性弱。やや軟質。粗粒黒色スコリア・赤褐色粒・木炭粒少。やや明るい。
  - 2: 暗灰黄褐色土  
土粒細。粘性弱(やや砂質)。軟質。灰褐色砂粒多。シルト岩ブロック少。木炭粒微量。
  - 3: 黒色土  
土粒細。粘性弱。やや軟質(1層より軟質)。木炭粒少。赤褐色粒微量。1層より明るい。
  - 4: 黒色土  
土粒細。粘性弱。軟質。木炭粒・小ブロック少(3層より多)。赤褐色粒微量。1・2層より黒味強い。
  - 5: 黒色土  
土粒細。粘性弱(やや砂質)。軟質(2層より軟質で、4層より硬質)。砂粒やや多。2層より黒味強く、4層より明るい。
  - 6: 黒色土  
土粒細。粘性弱(砂質)。軟質(5層に類似)。灰褐色砂粒多。シルト粒やや多。灰黒味強い。
  - 7: 黒色土  
土粒極細。粘性弱(砂質)。軟質(5・6層より軟質)。礫・シルト岩ブロックを混入。砂粒極多。
  - 8: 暗灰色土  
土粒極細。暗青灰色砂質土。極軟質。シルト質混入土層の風化土?

図44 1号井戸状遺構実測図 (S=1/60)

る青磁小皿である。生地は暗灰色を呈し、内面から外面体部に施釉されている。底部外面は生地そのまま、施釉は浸け掛けによったものとみられる。見込みにはヘラと櫛歯状工具による文様が描かれている。焼成は良好である。1085と1086はかわらけである。1085は南半部の覆土から破片で出土し、ほぼ完形に復原されたものである。口径12.6cm、底径9.0cm、器高3.5cmを測る。底部外面には明瞭な回転糸切り痕が認められる。1086は約1/2の破片で、接合する破片は確認できなかった。淡灰黄褐色を呈し、焼成

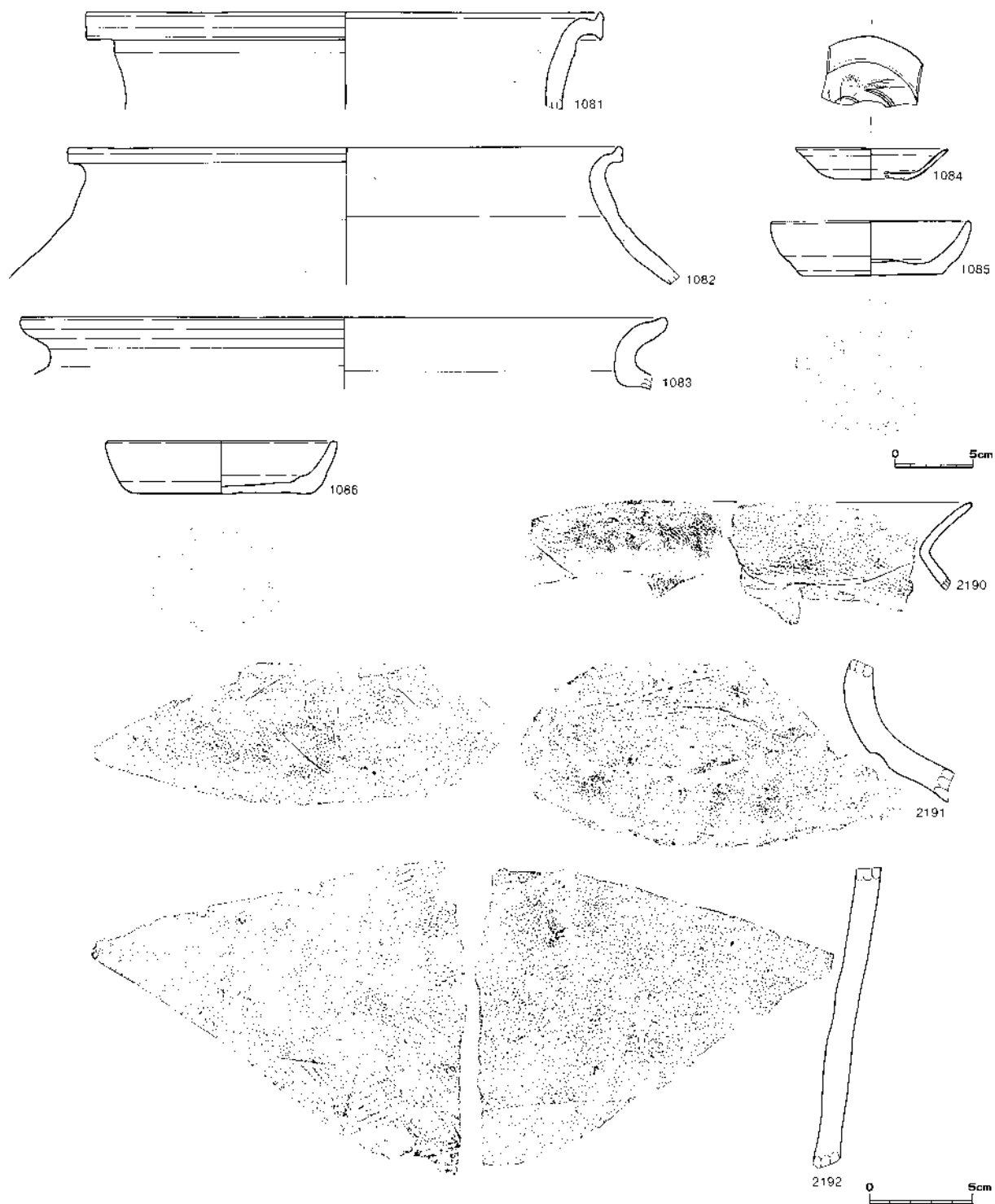


图45 1号井戸状遺構出土遺物実測図

はやや軟質である。底部外面には顕著なスノコ痕と僅かな回転糸切り痕が認められる。2190は甕形土器口縁部の破片である。内外面ともハケ目調整が施されているが、口縁部外面には横方向のナデが加えられている。色調は明褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には白色海綿体骨針を含む。2191と2192は常滑焼とみられる大型甕形土器の破片である。2191は頸基部から肩部にかけての破片で、内外面ともナデ調整が施され、内面は輪積みの痕跡が残されている。素地は内外面とも褐色を呈し、肩部外面には灰釉が見られる。2192は胴部破片で、外面はナデ調整、内面は横位のヘラ削り調整が施されている。外面には斜線を組み合わせた方形のスタンプ文が認められる。素地は内外面とも淡褐色を呈する。焼成はともに良好である。

坑底直上に集中して出土した礫は、16点のサンプルについて石質同定を実施した。結果は、砂岩4点、珪化流紋岩・珪化安山岩各2点、珪化岩（安山岩？）・輝石安山岩・変質安山岩・砂岩ホルンフェルス・ひん岩・凝灰岩・輝緑岩・石英斑岩各1点であった。これらの礫には、若干のかわらけや陶器破片が混在していた。出土状況から敷き詰められていたものとするよりも、投棄されたものと考えたい。

本址の所産時期は、出土遺物から14世紀前半を中心とする時期に比定されるものと思われる。性格については、湧水が見られた点から井戸と考えたが、深さの点から疑問も残している。

## E 土坑

### ・9号土坑（図46、写真94・95）

B8区東端部の基礎枠内で検出された。南側上部は攪乱により破壊されている。確認面は層上面である。南側に近接して2号溝状遺構が存在する。不整円形を呈し、他の遺構が重複している可能性もある。上端の径1.75cm前後、深さ35cm程を測る。覆土は層相当の軟質な黒褐色土を主体とする自然堆積土であった。

出土遺物は、かわらけ若干と軽石1点がある。これらは覆土上部から検出された。かわらけは1090を除き、いずれも口径が10cm未満の比較的小型品が主体をなす。1087と2193は口縁部のつくりがやや厚く、1088は薄い。1087と2190の底部は丸味があり、ナデ調整が施されている。2190の底部には重ね焼の痕跡が見られる。1088と2193の底部は回転糸切り後ナデが加えられ、1088にはスノコ痕が見られる。1089は回転糸切り放しである。法量は、1087が口径8.3cm、底径7.1cm、器高2.3cm、1088が口径9.5cm、底径6.8cm、器高1.1cm、1089が口径8.4cm、底径6.2cm、器高1.5cm、1090が口径10.3cm、底径4.9cm、器高2.1cm、



写真94 9号土坑（南より）



写真95 9号土坑遺物出土状況（北西より）

2193が底径6.8cm、1.6cmを測る。1087～1090の胎土には微量の白色海綿体骨針が含まれている。3010は不定形を呈する軽石で、一部を欠いている。擦痕が認められるところから砥石と推定される。長さ3.9cm、幅2.1cm、厚さ1.1cm、重量3.7gを測る。

本址の所産時期は、出土遺物から14～15世紀頃と考えられる。性格は不明である。

・10号土坑（図46、写真96）

B7区の南東部の基礎枠内に位置する。5号溝状遺構の覆土を掘り込んでいる。遺構確認面は層上面であった。平面形は隅円長方形を呈し、長軸方向ほぼ南北に向いている。北側を旧校舎の基礎掘り方により破壊されている。長軸上端1.2m、短軸上端0.92m、深さ15cm程を測る。遺存状況は良くない。覆土は層相当の軟質な黒褐色土であった。

出土遺物は僅少であった。1091は小型精製鉢形土器で、全体の3/5程度の破片である。口径10cm前後に復原される。内外面とも丁寧なミガキが施されている。2194は陶器甕ないし壺の胴部破片である。色調は暗灰褐色を呈し、焼成は良好である。外面には全面に褐色釉が見られる。器面の調整は内外面ともナデによっている。胎土には微細な白色海綿体骨針が少量含まれる。1091は古墳時代前期に比定される混入品である。

・11号土坑（図46、写真97）

B7区の南東隅部の基礎枠内に位置する。5号溝状遺構の一部を切って掘り込まれている。北0.6mの至近に10号土坑が存在する。遺構確認面は層上面である。平面形は比較的端正な隅円長方形を呈し、長軸方向は北東～南西を指向する。長軸上端で1.7m、短軸上端で1.2m、深さ約50cmを測る。覆土は層相当の軟質な黒褐色土であった。

10号土坑同様、出土遺物は僅少であった。2195は縄文土器片である。摩耗著しく、地文の有無も判別

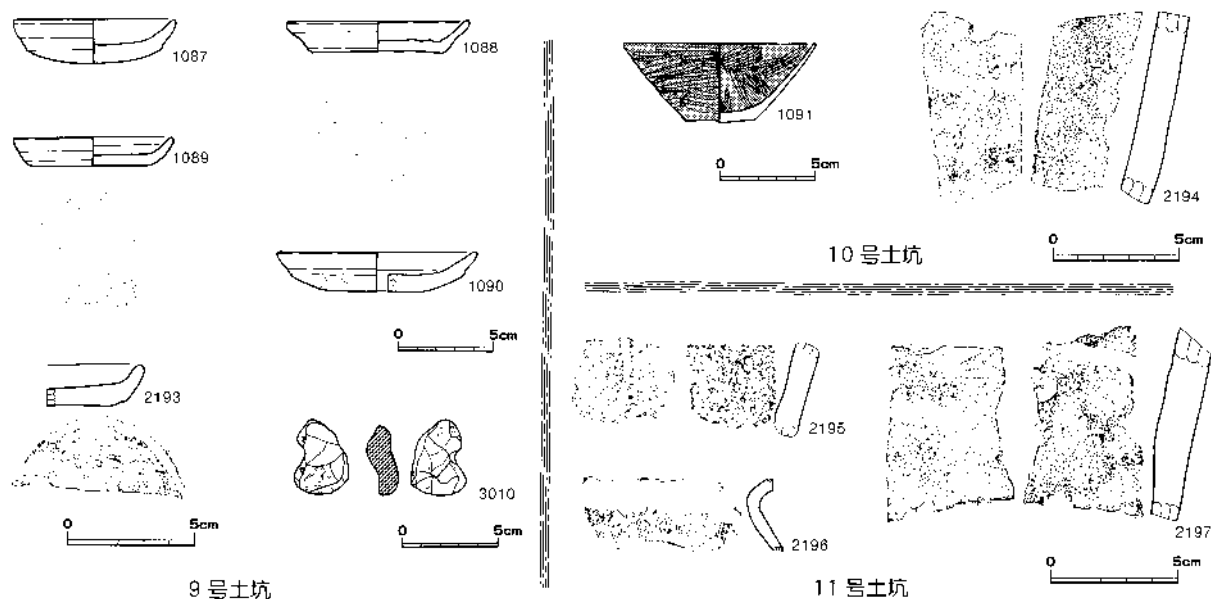


図46 9～11号土坑出土遺物実測図

しがたい。連弧状の沈線が認められ、胎土には繊維が含まれている。前期諸磯 a 式に比定されよう。2196はS字状口縁台付甕の頸基部から肩部にかけての破片である。淡褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は緻密で、細かな金雲母を混入する。2197は陶器甕の胴部破片である。外面には一部であるがスタンプ文が認められる。内外面ともナデ調整が施されているが、内面は成形時の指頭痕が明瞭に残されている。色調は暗灰褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には、細礫の混入が目立つ。

本址は、形態や位置関係等から10号土坑と同類の遺構と考えられる。所産時期は、陶器破片の混入が見られるところから中・近世に属するものと考えられる。墓の可能性はあるが、断定できない。



写真96 10号土坑（北より）



写真97 11号土坑（北より）

#### ・12号土坑（図47、写真98）

B 6 区東端部の基礎枠内で検出された。東側は基礎枠下に及んでいる。遺構確認面は 層上面である。長軸を東北東 西南西方向に向けるやや不整な隅円長方形を呈する。調査可能部分の長軸長約 2 m、短軸上端長1.45m、深さ25cm程を測る。南東部は掘り過ぎている。覆土は 層相当の黒褐色土であった。

出土遺物は少なく、2点のみ図示可能であった。

2198は須恵器高台付坏の底部破片である。高台は欠損している。底部外面は回転ヘラ削り後、ナデ調整が加えられている。調整技法と形態から奈良時代前半に位置づけられる。

2199は陶器甕の胴部破片である。内外面ともナデ調整が施され、内面には僅かに指頭痕が残されている。色調は暗灰色を呈し、外面には褐色釉が見られる。焼成は良好で、胎土には細礫を多含する。

覆土等から中・近世に属するものと考えられるが、その性格は明らかでない。



写真98 12号土坑（北西より）

#### ・13号土坑（図29・47、写真99）

B 2 区北端部の基礎枠内、 層上面で検出された。長軸の北西側が基礎枠の下に位置するため、全掘できなかつた。南東側に近接して7号溝状遺構と3号土坑が存在する。不整楕円形を呈し、長軸長推定

1.1m、短軸0.7m、深さ20cm程を測る。覆土は層相当の軟質黒褐色土である。

出土遺物は、ほぼ完形のかわらけ2点をはじめ若干検出されている。1092～1094はかわらけで、口径が12cm前後のものと7cm程の2者が存在する。1092は明褐色を呈し、他の2点は灰黄褐色を呈する。

1092はナデ調整が丁寧で、つくりが厚い割には焼成も良好である。底部外面はいずれも回転糸切り痕が残されている。1092はスノコ痕が顕著である。これらの胎土には微量の白色海綿体骨針が含まれている。



写真99 13号土坑（南東より）

2200は陶器鉢の口縁部から体部上半にかけての破片である。口唇部の断面は凹んでいる。口縁部外面から内面はヨコナデ、体部外面は不定方向のナデ調整が施されている。色調は灰褐色を呈し、焼成は普通である。内面には焼成時に灰を被っている。4019は完形の管状土錘である。棗玉形を呈し、長さ3.5cm、最大径1.6cm、重量9.8gを測る。混入品であろう。

出土遺物から14～15世紀の所産と考えられるが、性格については明らかでない。

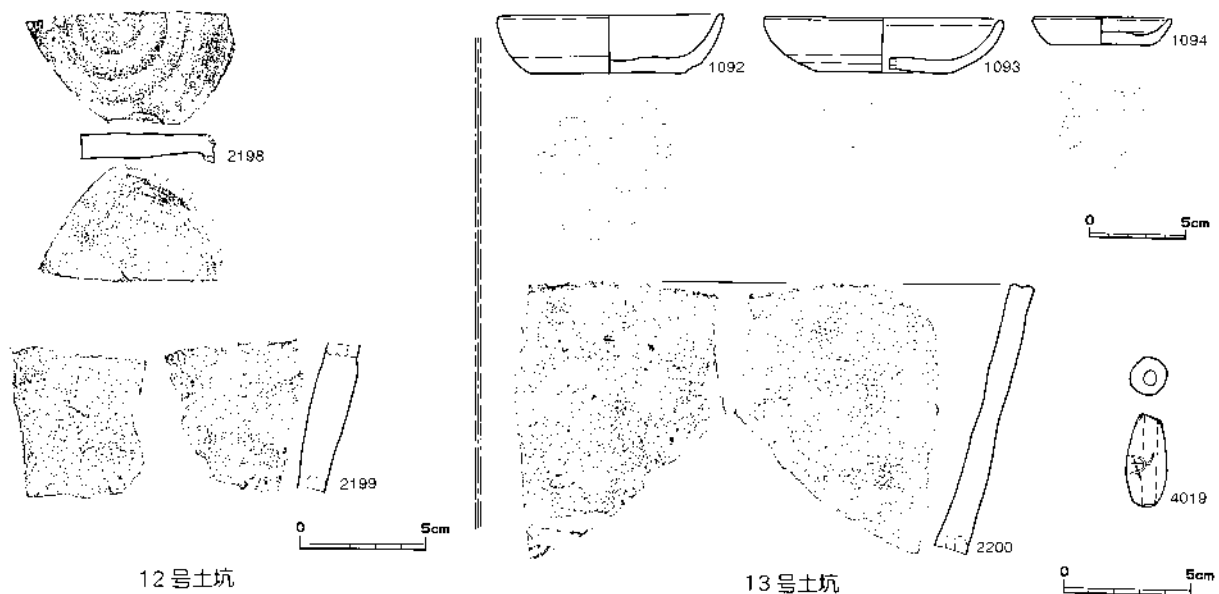


図47 12・13号土坑出土遺物実測図

・14号土坑（写真100）

C6区ほぼ中央部に位置する。北側は解体校舎の基礎工事により破壊されている。遺構確認面は層上面であったが、掘り込みは5cm程度で極めて浅い。本来の掘り込み面は、より上層に存在したと思われる。長軸が北西 南東を指向する楕円形を呈する。長軸遺存長1.75m、短軸長0.8mを測る。覆土は層相当のやや明るい軟質な黒褐色土であった。

出土遺物は皆無であり、所産時期・性格については明らかでない、中世以降の墓である可能性が高い。

・15号土坑（写真101）

C7区中央やや北西寄りに位置する。北西隅部は解体校舎の基礎工事により破壊されている。遺構確認面は 層上面であった。本址は確認調査11Tで検出されていたものである。長軸がほぼ南北方向を指向し、平面形が比較的整った隅円長方形を呈する。長軸上端1.56m、短軸上端1.06m、深さ15cm程を測る。覆土は 層相当の軟質な黒褐色土であった。小ピットが重複する。新旧関係は不明である。

出土遺物は皆無であった。所産時期・性格については、中世以降の墓である可能性が考えられる。



写真100 14号土坑（北西より）



写真101 15号土坑（東より）

F 墓・火葬址（図48～55、写真102～128、表2～4）

墓および火葬址は、D・E8・9区の調査区境付近に集中して存在し、調査区外にも広がりを見せている。また、D8区東端部に位置する1号道路状遺構の北東側にも散在する。1号道路状遺構と切り合う墓はなく、1号道路状遺構と墓地とは有機的な関連があるものと推定される。

墓は、明確な墓壙を伴うものと不明確なものが存在する。不明確なものは、壙底が 層に達していないもので、一定程度のまとまりをもって検出された人骨をもって「墓」とせざるを得なかった。中には、明らかに複数個体が認められるものに同一番号を付している例が生じている。なお、 層中や周辺の攪乱土中にも相当数の人骨片が含まれていた。

副葬品はかわらけと銭を主体としていた。銭は錆着しているものが多く認められ、重ねて袋等に入れられていたことを物語る。6号墓の覆土最上部で、小型銅鏡1点が検出されている点が特筆されるが、伴うものであるか確認に欠ける。

「火葬址」としたものは、墓が集中する西側縁辺部で3基検出されている。いずれも底面あるいは壁面が直接火熱を受けた痕跡があるものではないが、覆土中に火葬骨片や木炭を伴うものを火葬址として「墓」と区別することとした。3基のうち2基の火葬址に、炭化した「おにぎり」が伴っていたことは注目される。うち、1号火葬址のものには4枚の銭が含まれていた。3号火葬址のものは未確認である。

墓地全般の特徴としては、板碑や石塔類、火葬蔵骨器などが1点も見られなかった点があげられる。遺跡全体としては、中世陶器の甕や壺の破片は出土しているが、墓地部分ではほとんど出土していない。この現象は、被葬者集団の階層性を物語るものである可能性が高い。

以上については、個別の説明を省き、表4（85頁）によることとしたい。

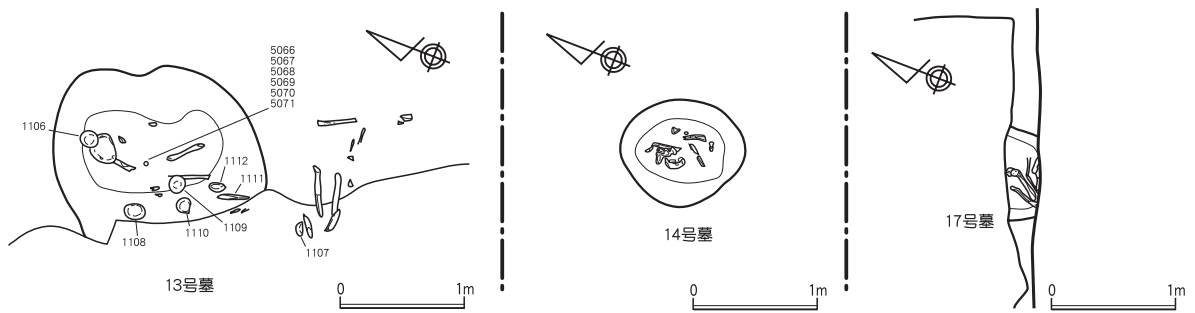
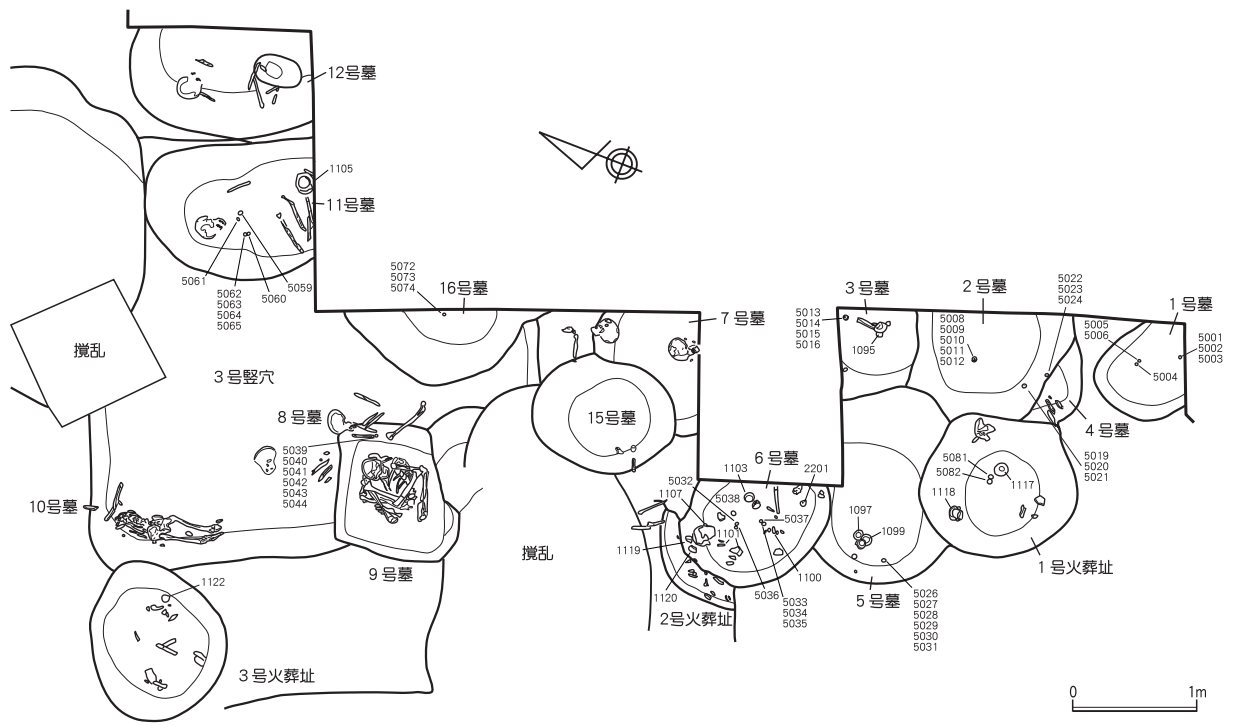


图48 墓群实测图 (S = 1/60)



写真102 墓地近景 1 (南西より)



写真103 墓地近景 2 (南西より)



写真104 1号墓(北西より)



写真105 2~4号墓・1号火葬址(南西より)



写真106 5号墓(南より)



写真107 6号墓・2号火葬址(南西より)



写真108 7号墓(西より)



写真109 8号墓(東より)

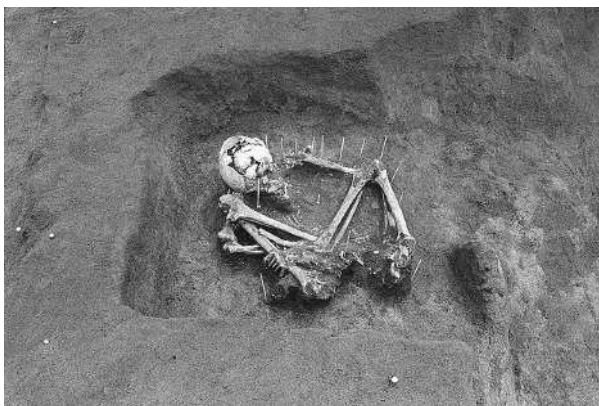


写真110 9号墓人骨・遺物出土状況(南西より)



写真111 9号墓人骨出土状況(南より)

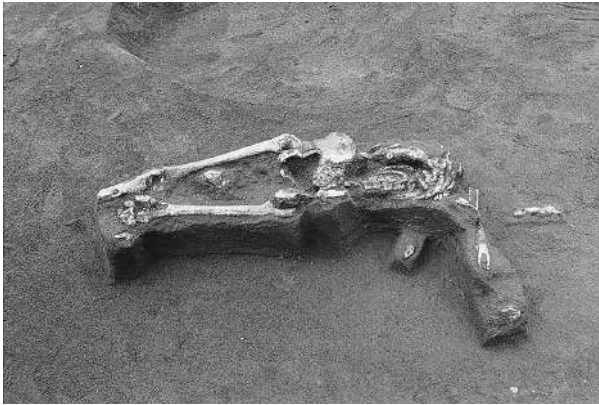


写真112 10号墓人骨出土状況(北東より)



写真113 11号墓(西より)

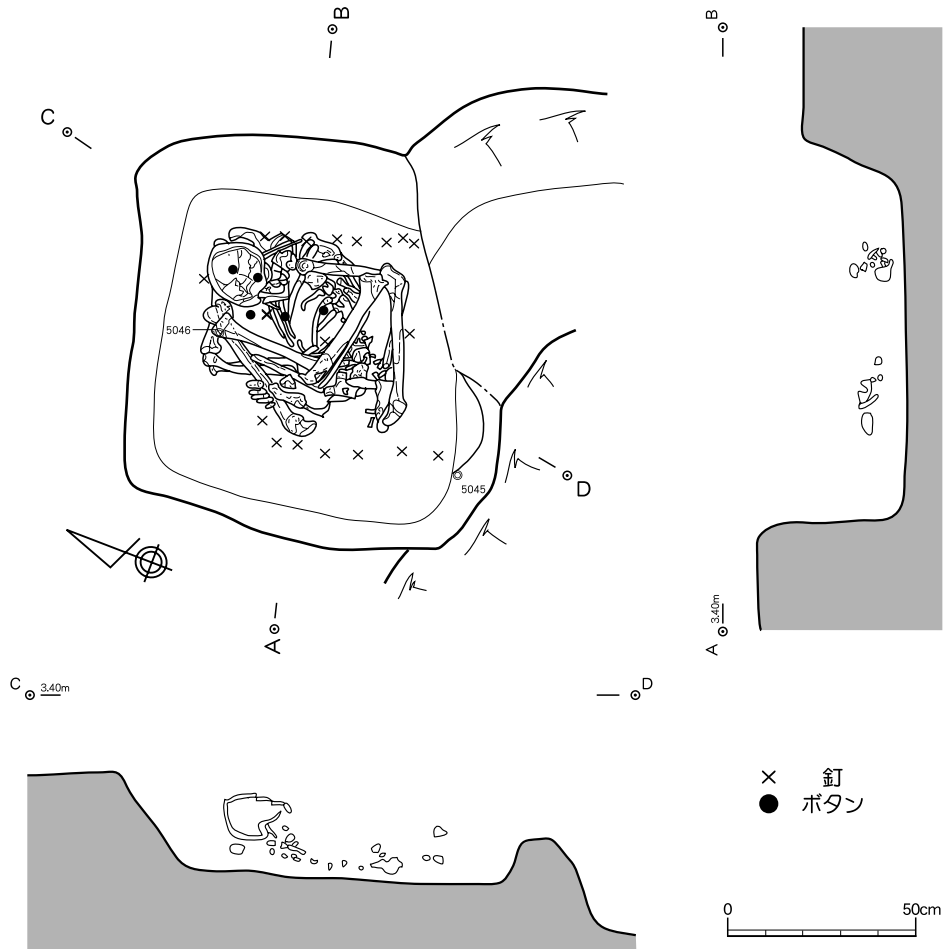


図49 9号墓実測図 ( S = 1/20 )



写真114 12号墓(南より)



写真115 13号墓(北より)



写真116 14号墓人骨出土状況(西より)

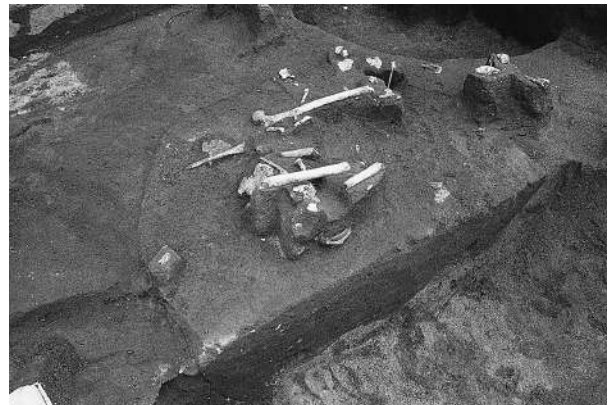
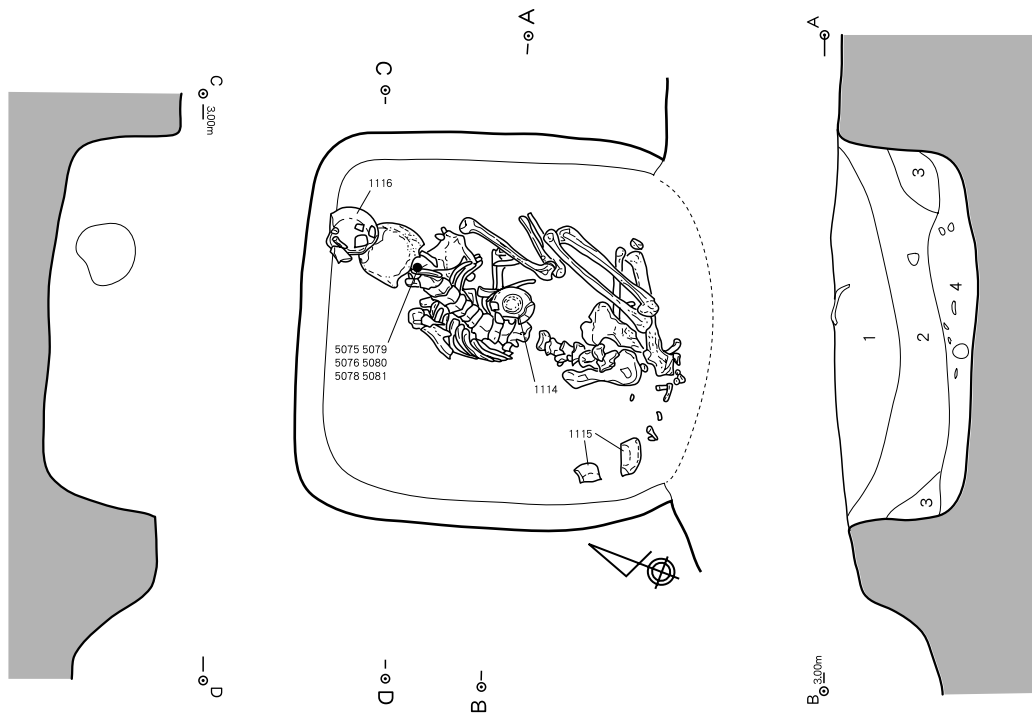


写真117 15号墓人骨出土状況(西より)



18号墓土層 (A-B)

- 1: 暗褐色土 砂質・脆弱。黒褐色土を混じる。シルト粒を若干含む。
- 2: 暗褐色土 1に比べやや脆弱。黒褐色土の混入はほとんどない。
- 3: 暗褐色土 1に似る。黒褐色土やや多い。1・2より黒味強い。
- 4: 暗褐色土 砂質。1~3に比べ、やや硬質。

図50 18号墓実測図 (S = 1/20)



写真118 15号墓発掘状況（西より）



写真119 16号墓（西より）



写真120 17号墓（北より）



写真121 18号墓上層遺物出土状態（東より）



写真122 18号墓人骨出土状況（南東より）



写真123 1号火葬址（南より）



写真124 2号火葬址（南南西より）



写真125 3号火葬址（北西より）

出土遺物のうち、銭等の金属製品については一括して図化し、表3にまとめた。表4とあわせて参照されたい。表3-3には包含層出土の銭をまとめた。土器類については本文中で個別に説明を加える。

**1号墓出土遺物** 3011は軽石製砥石と推定される。長さ4.65cm、幅2.8cm、厚さ1.56cm、重量3.1gを測る。一部に擦痕が認められる。覆土中の出土で、混入品とみられる。

**3号墓出土遺物** 1095はかわらけである。口径10cm、底径6.8cm、器高2.8cmを測る。見込み外周は指頭により強くナデが施され、窪んでいる。底部外面には回転糸切り痕とスノコ痕が見られる。淡褐色を呈し、焼成は普通である。胎土には少量の白色海綿体骨針が混入する。

**4号墓出土遺物** 1096はかわらけで、口縁部から底部にかけての1/5程度の破片である。底部外面には回転糸切り痕が認められる。淡褐色を呈し、焼成はやや軟質である。

**5号墓出土遺物** 1097~1099はかわらけで、まとめて出土した。いずれも小型ないし中型品である。1097は口径8.6cm、底径5.5cm、器高2.8cm、1098は口径8.5cm、底径4.9cm、器高2.5cmを測る。1099は口径10.0cm、底径6.5cm、器高2.9cmを測る。つくりが厚く、底部外面には回転糸切り痕が見られる。いずれも胎土に少量の白色海綿体骨針が混入する。淡褐色ないし橙褐色を呈し、焼成は良好である。

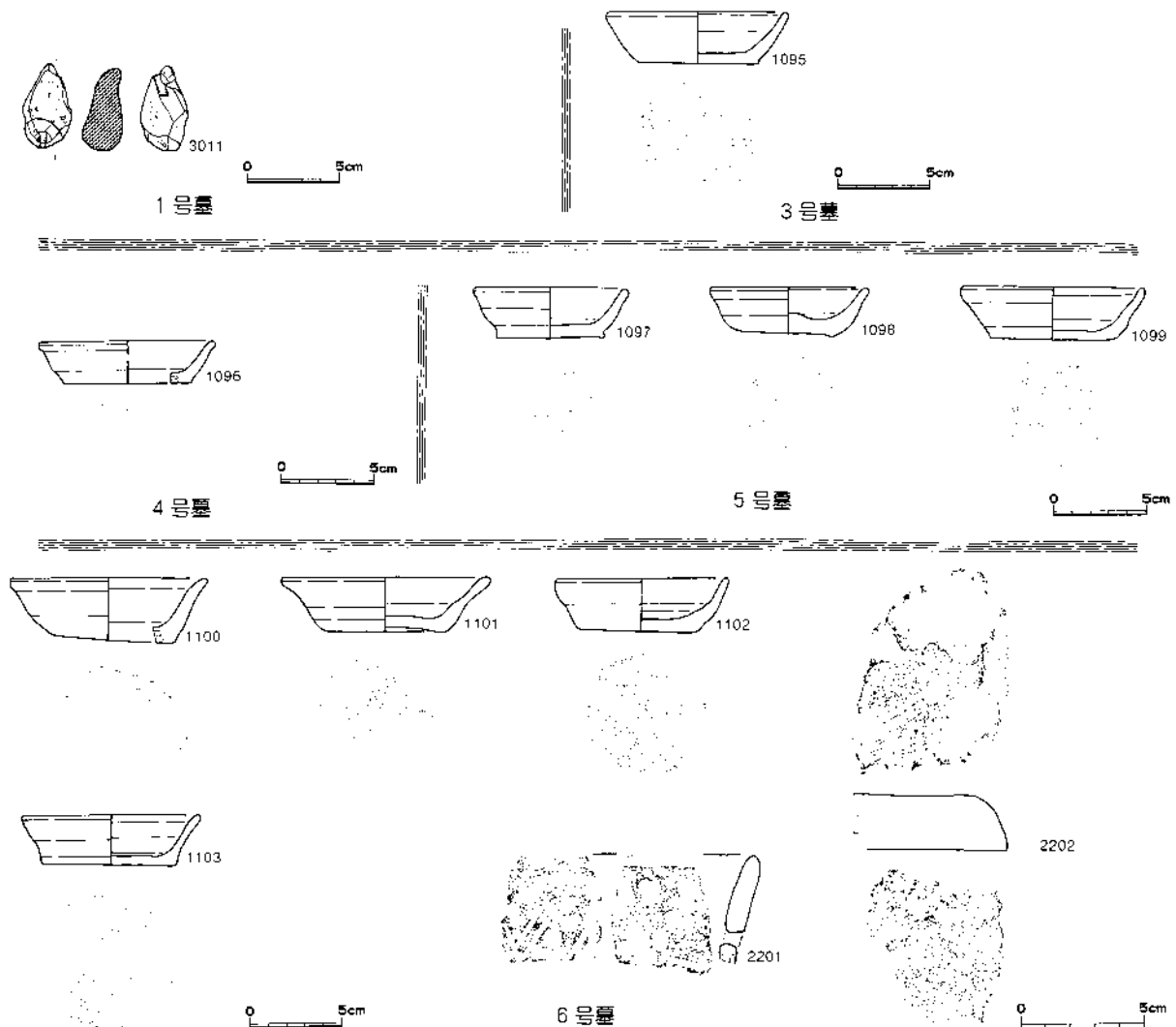


图51 1・3～6号墓出土遺物実測図

**6号墓出土遺物** 1100～1103はかわらけで、1102と1103は、口縁部の一部を欠くがほぼ完形品である。底部外面にはいずれも回転系切り痕が認められ、1102と1103はナデが加えられている。1100と1101は口径11cm前後を測る中型品で、色調は淡灰褐色を呈する。焼成は普通である。1102と1103は口径約9cmの小型品である。いずれも明褐色を呈し、焼成は良好である。1103の調整は丁寧である。1100～1103の胎土には白色海綿体骨針が混入し、1103には顕著である。2201は縄文土器口縁部の破片である。口唇部の内側に面を有する。補修孔が穿たれている。摩耗が著しく、文様が定かでないが、補修孔に直下に横位の沈線が巡らされ、その上部に斜位の条痕が認められる。胎土には繊維がふくまれており、早期後半の条痕文土器群の仲間であろう。2202は平瓦の破片である。側縁は断面逆「くの字」に2段階のヘラ削りにより面取りされている。二次的な火熱を受けており、表面がハせている。5038は素文の小型銅鏡で、遺構確認面に相当する覆土最上部から出土した(表3-1)。



写真126 小型銅鏡(5038)

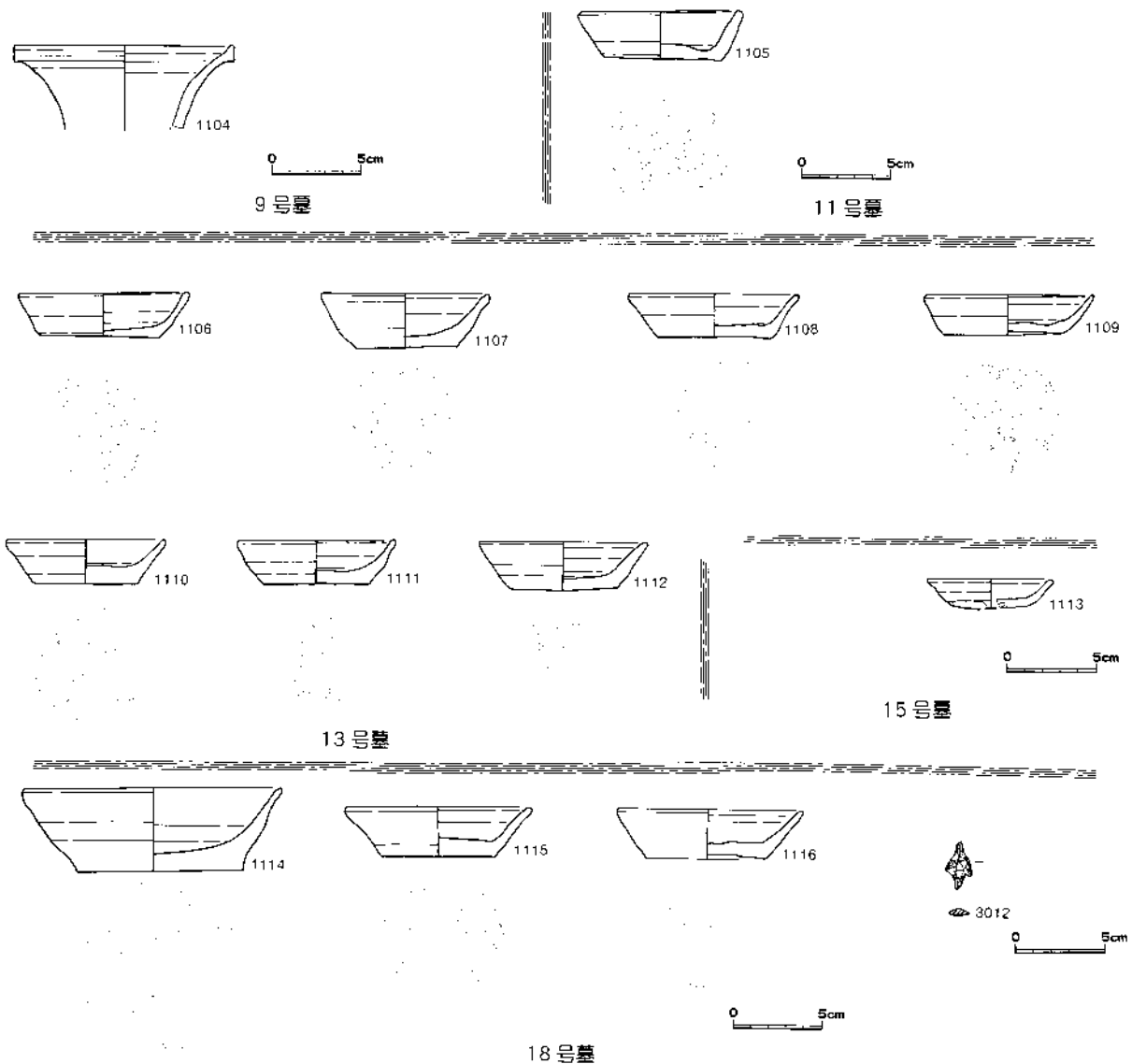


図52 9・11・13・15・18号墓出土遺物実測図

**9号墓出土遺物** 1104は灰釉陶器長頸壺の口縁部である。口径12.8cmを測る。内外面に灰釉が施釉されている。胎土は緻密で、焼成も良好である。

**11号墓出土遺物** 1105はかわらけである。南側調査区境から出土した。約60%が遺存する。口径9.4cm、底径6.5cm、器高2.8cmを測る。見込み外周は指ナデにより窪んでいる。底部外面には、回転系切り痕とスノコ痕が見られる。淡灰褐色を呈し、焼成は普通である。胎土には微量の白色海綿体骨針が混入する。

**13号墓出土遺物** 1106～1112はかわらけである。1112のみ半欠品で、他はほぼ完形品である。いずれも壙底より浮いた位置で出土した。口径はすべて10cm以下で、9.0～9.6cmの間にある。1110と1111の2点が9.0cm、1108が9.5cm、その他は9.6cmを測る。1106と1109は、底径も6.6cmと等しい。1106と1109は全体のつくりが薄く、1112は厚い。1107・1108・1110・1111は、口縁部に対する底部のつくりが厚い。1110は特に顕著である。底部外面にはいずれも回転系切り痕が認められ、1108と1111にはナデが加えられている。胎土にはいずれも白色海綿体骨針が含まれる。

**15号墓出土遺物** 1113は小型手づくねのかわらけである。口径7.2cm、底径約4cm、器高1.6cmを測る。口縁部が外反し、底部には丸味がある。腰部外面には指頭痕が認められる。ナデによる丁寧な調整が施されている。暗灰黄褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は緻密で、白色海綿体骨針が含まれる。

**18号墓出土遺物** 1114～1116はかわらけ、3012は縄文時代の石鏃である。1114と1116は遺構確認時に検出されたもので、1116は被葬者頭上に位置していた。1115は南西隅部付近の壙底で、2点に割れた状態で出土した。いずれも底部のつくりが厚い。底部外面には回転系切り痕が見られる。1114が口径14.6cm、底径9.4cm、器高4.5cm、1115が口径10.6cm、底径6.5cm、器高2.6cm、1116が口径10.6cm、底径6.7cm、器高2.8cmを測る。いずれの胎土にも白色海綿体骨針が含まれ、焼成は良好である。3012は長さ2.8cm、幅1.6cm、厚さ0.5cm、重量1.0gを測る流紋岩製の有茎石鏃である。混入品と見られる。

**1号火葬址出土遺物** 1117・1118はともに関係のかわらけである。1117は口径12.0cm、底径7.7cm、器高3.4cmを測り、底部と体部のつくりが厚い。口唇部が僅かに外反する。暗灰褐色を呈し、焼成は普通である。全体にススけている。1118は口径10.4cm、底径7.6cm、器高2.8cmを測り、底部に対して体部のつく



写真127 1号火葬址出土の炭化おにぎり

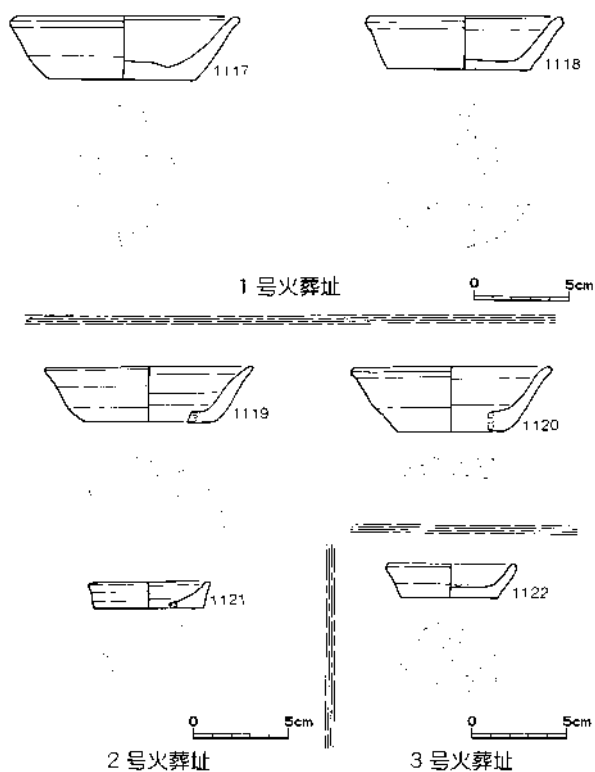


図53 1～3号火葬址出土遺物実測図

りが厚い。灰褐色を呈し、焼成は良好である。いずれも底部外面に回転系切り痕が認められるが、1118にはナデが加えられている。胎土にはともに微量の白色海綿体骨針が混入する。

なお、炭化おにぎりは覆土上部で検出され、調査中に破損したため、内部に銭4枚が確認された。

**2号火葬址出土遺物** 3点のかわらけを図示したが、遺構の遺存状況が良くないため、本址に伴うものが不確実な面もある。いずれも破片の状態で出土した。1119は口径11.0cm、底径7.0cm、器高2.9cm、1120は口径10.6cm、底径5.4cm、器高3.4cmと復元され、ともに口唇部が外反する。1121は口径6.4cm、底径5.8cm、器高1.4cmと復元される。小型で、体部は直立し、器壁が厚い。1119と1121の胎土には白色海綿体骨針が含まれ、1121は多い。底部外面は3点とも回転系切り後にナデ調整が加えられている。

**3号火葬址出土遺物** 1122は口径6.8cm、底径5.0cm、器高1.8cmを測るかわらけである。体部および口縁部内外面ヨコナデ、見込みは指頭ナデ、底部外面は回転系切り痕とスノコ痕が見られる。胎土には微量の白色海綿体骨針が含まれ、焼成は良好である。



写真128 3号火葬址出土の炭化おにぎり

炭化おにぎりは、南端部付近の覆土上層から出土した。不整楕円形を呈し、長さ9.9cm、幅7.1cm、厚さ5.1cm、乾燥した状態での重量64.7gを測る。収納後、乾燥の進行により縁辺部の一部が割れて2片となっている。X線等による内部の確認は実施していない。銭が含まれている可能性は残されている。

## 出土人骨について

墓群出土の人骨は、そのすべてについて同定を実施していない。本報告では、遺存状態が比較的良好な3例について、性別・推定年齢にターゲットとした同定結果のみを報告しておきたい。なお、10号墓については、遺構確認時に全身骨格出土地点から検出された2個体の頭蓋骨も含めて同定を依頼した。

表2 杉田東漸寺貝塚中世～近代墓出土人骨の同定結果

出土遺構	同定試料	同定部位	性別	年齢(歳)	特記事項
9号墓	1個体	頭蓋、下顎骨、上腕骨、尺骨、橈骨、鎖骨、肩甲骨、椎骨、肋骨、寛骨、大腿骨、脛骨、腓骨、足骨	男性	30～35	歯はすべて揃っており、咬耗は象牙質に至らない。
10号墓	個体1	頭蓋、下顎骨、上腕骨、尺骨、橈骨、椎骨、肋骨、寛骨、仙骨、大腿骨、脛骨、腓骨、足骨	女性	20～30	歯の咬耗は象牙質に至らない。頭蓋、下顎骨は表土除去作業時に出土。
10号墓	個体2	頭蓋、下顎骨	不明	30～40	頭蓋、下顎骨は表土除去作業時に個体1付近で出土。上顎骨と下顎骨とが重複し、個体1と別個体と判断できた。歯からみた年齢は、個体1の全身骨よりも高かったため、これとは別個体である。歯の咬耗は、象牙質が点状に露出した程度である。
18号墓	1個体	頭蓋、下顎骨、舌骨、上腕骨、尺骨、橈骨、手骨、鎖骨、肩甲骨、椎骨、肋骨、寛骨、仙骨、大腿骨、脛骨、腓骨、足骨	女性	30～40	下顎骨の歯槽はすべて閉鎖していた。上顎骨の歯は、左犬歯、左第一小白歯、左第一大臼歯が残っていたが、すべての歯の隣接面に齶蝕を認めた。

【聖マリアンナ医科大学解剖学教室 平田和明氏・長岡朋人氏の報告に基づいて作成】

表 3 - 1 杉田東漸寺出土銭等一覧表

番号	出土遺構等	種 類	大 き さ			備 考
			重 量 (g)	径 (cm)	縁 辺 厚 み (mm)	
5001	1号墓	淳熙元宝	3	2.35	1.2	5001～5003が表裏同一方向に錆着。
5002	1号墓	淳熙元宝	3.3	2.4	1.2	5001～5003が表裏同一方向に錆着。
5003	1号墓	淳熙元宝	2	2.21	1	5001～5003が表裏同一方向に錆着。
5004	1号墓	淳熙元宝	3	2.38	1.1	
5005	1号墓	淳熙元宝?	3	2.41	1.15	5005・5006が表裏同一方向に錆着。
5006	1号墓	淳熙元宝	2.8	2.36	1.15	5005・5006が表裏同一方向に錆着。
5007	2号墓	熙寧元宝	2.6	2.37	1.25	5007～5012点が錆着。裏面を外側に向ける。
5008	2号墓	元	2.9	2.41	1.2	5007と表裏同一方向に錆着。
5009	2号墓		3.3	2.34	1.2	5008表面同士が錆着。
5010	2号墓	熙寧?元宝	3.1	2.5	1.35	5009と表裏同一方向に錆着。
5011	2号墓	天元宝	3.4	2.43	1.1	5009・5010と表裏同一方向に錆着。
5012	2号墓	皇宋通宝	2.7	2.45	1.3	5009～5011と表裏同一方向に錆着。裏面外側に向ける。
5013	3号墓	宝	3.2	2.43	1.3	
5014	3号墓	紹?聖元宝	2.5	2.45	1	5014～5018が錆着。裏面を表側に錆着。
5015	3号墓	開元通宝	3.4	2.46	1.2	5014と表面同士が錆着。
5016	3号墓	紹聖元宝	2.7	2.33	1.25	5015と表裏同一方向に錆着。
5017	3号墓	淳熙元宝	3.5	2.41	1.3	5015・5016と表裏同一方向に錆着。
5018	3号墓	淳熙元宝	3.3	2.38	1.35	5015～5017と表裏同一方向に錆着。裏面外側。
5019	4号墓	大觀通宝	3.1	2.38	1.55	
5020	4号墓	開元通宝	2.6		1.1	3点に割れ、一部欠損。
5021	4号墓	開元通宝	0.5		1.35	残欠。
5022	4号墓	開元通宝	3.1	2.41	1.45	5022～5025が錆着。表面を外側に向ける。
5023	4号墓	永樂通宝	4.9	2.55	1.7	5022と表裏同一方向に錆着。
5024	4号墓	開元通宝	2.9	2.49	1.3	5022・5023と表裏同一方向に錆着。
5025	4号墓	永樂通宝	3.6	2.47	1.4	5022～5024と表裏同一方向に錆着。
5026	5号墓	元通宝	3.2	3.4	1.15	5027と錆着。表面を外側に向ける。
5027	5号墓	元通宝	3.3	2.35	1.3	5026と表裏同一方向に錆着。裏面を外側に向ける。
5028	5号墓	祥符通宝	2.5	2.49	1	5029～5031と錆着。表面を外側に向ける。
5029	5号墓	景德元宝	3.1	2.38	1.15	5028と表裏同一方向に錆着。
5030	5号墓	開元通宝	3.9	2.33	1.6	5029と裏面同士が錆着。
5031	5号墓	開元通宝	2.4	2.31	1.05	5030と表面同士が錆着。
5032	6号墓	永樂通宝	2.5	2.42	1.1	
5033	6号墓	永樂通宝	3.6	3.49	1.2	5033～5035が錆着。表面を外側に向ける。
5034	6号墓	政和通宝	3.7	2.46	1.55	
5035	6号墓	聖宋元宝	2.9	2.39	1.35	5034と裏面同士が錆着。
5036	6号墓	永樂通宝	3.8	2.45	1.2	
5037	6号墓	永樂通宝	2.7	2.45	1.2	
5038	6号墓	小形銅鏡	9.3	3.2	1.75	鏡面は凸面をなす。紐部分の厚み4.625mm。
5039	8号墓	永樂通宝	4.2	2.44	1.8	5040～5044が錆着。表面を外側に向ける。縁辺厚い。
5040	8号墓	永樂通宝	2.9	2.49	1.15	5039と表裏同一方向に錆着。
5041	8号墓	永樂通宝	2.8	2.5	1.05	5040と裏面同士が錆着。
5042	8号墓	永樂通宝	3.1	2.47	1.05	5041と表面同士が錆着。
5043	8号墓	永樂通宝	3.8	2.51	1.35	5040・5041と表裏同一方向に錆着。
5044	8号墓	永樂通宝	3.1	2.42	1.25	5043と裏面同士が錆着。表面を外側に向ける。

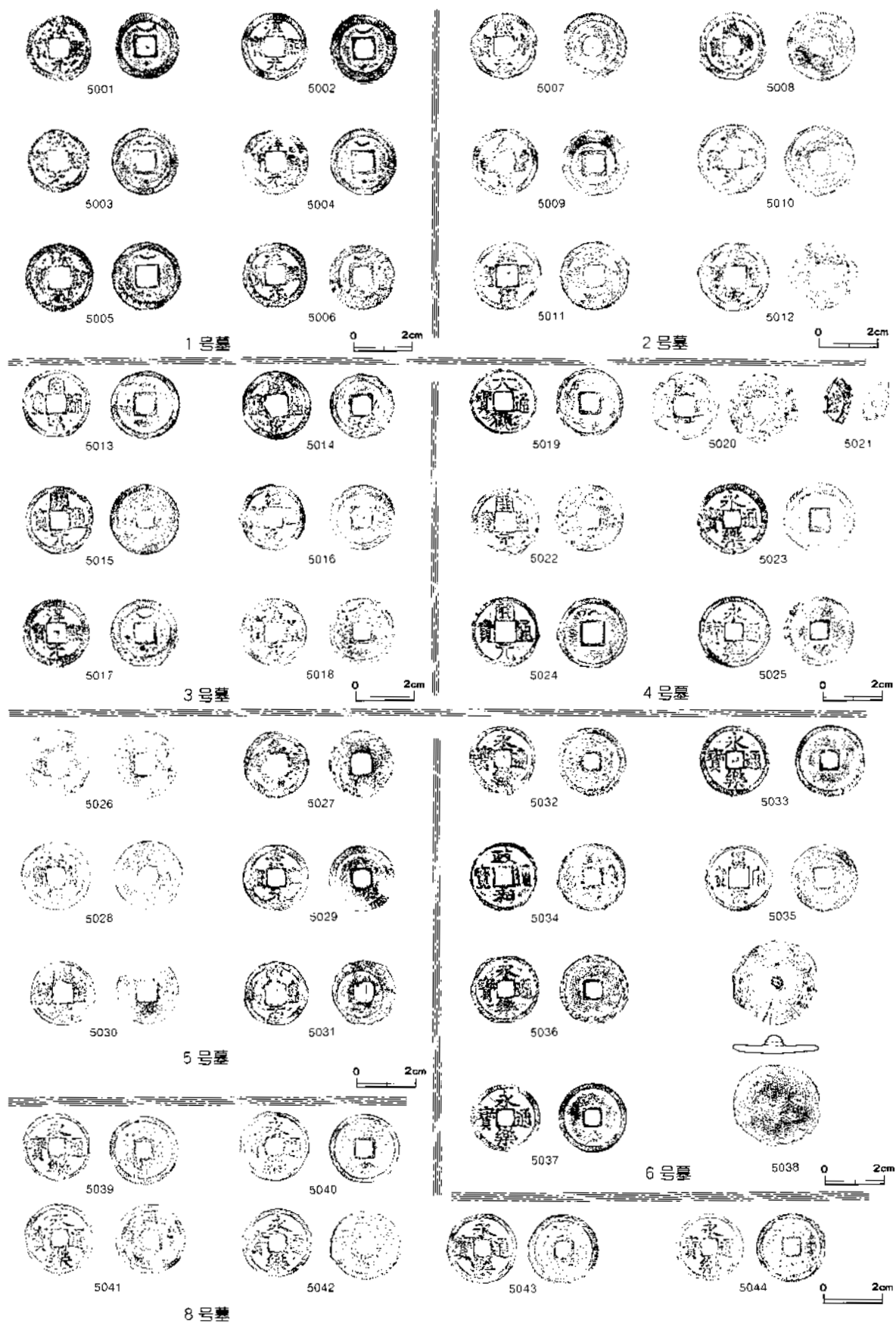


图54 墓群出土钱等拓影图1 (S=1/2)

表 3-2 杉田東漸寺出土銭等一覧表

番号	出土遺構等	種 類	大 き さ			備 考
			重 量 (g)	径 (cm)	縁 辺 厚 み (mm)	
5045	9号墓	寛永通宝	3.8	2.53	1.25	裏面に「文」。
5046	9号墓棺内	近代	2.6	1.82	1.55	布が付着。
5047	9号墓棺外	寛永通宝	3.7	2.45	1.25	
5048	9号墓棺外	寛永通宝	2.5	2.37	0.9	
5049	9号墓棺外	寛永通宝	2.2	2.24	1.05	
5050	9号墓棺外	寛永通宝	2.4	2.27	0.95	5051と裏面同士が錆着。
5051	9号墓棺外	寛永通宝	2	2.15	0.9	5050と裏面同士が錆着。
5052	9号墓棺外	寛永通宝	2.9	2.39	1.15	5053～5057と錆着。表面を外側に向ける。
5053	9号墓棺外	寛永通宝	2.6	2.31	1.05	5052と裏面同士が錆着。
5054	9号墓棺外	寛永通宝	3.2	2.45	1.3	5053と表裏同一方向に錆着。
5055	9号墓棺外	寛永通宝	3	2.38	1.15	5054と裏面同士が錆着。
5056	9号墓棺外	寛永通宝	3.1	2.4	1.15	5055と裏面同士が錆着。
5057	9号墓棺外	寛永通宝	3	2.48	1.05	5056と表面同士が錆着。
5058	9号墓棺外	鉄銭	3.8			腐食著しい。
5059	11号墓	祥符元宝	2.4	2.5	1.15	混入？
5060	11号墓	永楽通宝	3.1	2.46	1.05	
5061	11号墓	永楽通宝	3.5	2.49	1.1	
5062	11号墓	永楽通宝	3.4	2.5	1.15	5063～5065と錆着。裏面を外側に向けて錆着。
5063	11号墓	永楽通宝	3.9	2.47	1	5062と表裏同一方向に錆着。
5064	11号墓	永楽通宝	2.6	2.45	1.2	5062・5063と表裏同一方向に錆着。
5065	11号墓	永楽通宝	3.3	2.47	1.35	5064と表面同士が錆着。
5066	13号墓	景祐元宝	3.6	2.51	1.2	5067～5071が錆着。紐が通されていた形跡あり。裏面を外側に向けて錆着。布が付着。
5067	13号墓	符	2.9	2.47	1.05	5066と表裏同一方向に錆着。
5068	13号墓	景德元宝	3.3	2.39	1.2	5067と表面同士が錆着。
5069	13号墓	宋元通宝	3.1	2.45	1.05	5068と裏面同士が錆着。径1.5mmの孔あり。
5070	13号墓	熙寧元宝	3.9	2.36	1.35	5069と表裏同一方向に錆着。表面に布付着。
5071	13号墓	熙寧元宝	3.1	2.31	1.3	5070と表面同士が錆着。
5072	16号墓	永楽通宝	3.5	2.48	1.3	5073・5074と錆着。表面を外側に向けて錆着。
5073	16号墓	開元通宝	3.1	2.55	1.2	5072と表裏同一方向に錆着。
5074	16号墓	(聖宋?) 元宝	3.4	2.38	1.3	5073と裏面同士が錆着。
5075	18号墓	淳熙元宝	2.6	2.41	1.2	5076～5080と錆着。表面を外側に向けて錆着。
5076	18号墓	開元通宝	2.5	2.46	1	5075と表裏同一方向に錆着。
5077	18号墓	開元通宝	3.2	2.51	1.1	5075・5076と表裏同一方向に錆着。
5078	18号墓	淳元通宝	2.9	2.39	1.15	5077と裏面同士が錆着。
5079	18号墓	開元通宝	3.8	2.52	1.45	5078と表裏同一方向に錆着。
5080	18号墓	元	3.2	2.38	1.35	5079と表面同士が錆着。裏面を外側に向けて錆着。表面に布付着。
5081	1号火葬址	正隆元宝	2.6	2.5	1.55	破損し、錆着している。
5082	1号火葬址	聖宋元宝	3.2	2.47	1.2	
5083	1号火葬址	元豊通宝	3.3	2.36	1.15	炭化おにぎり内検出。
5084	1号火葬址	至和元宝	3.6	2.35	1.35	炭化おにぎり内検出。
5085	1号火葬址	開元(欠)庄	2.1	2.5	1.3	炭化おにぎり内検出。一部欠。
5086	1号火葬址	至和元宝	4.0	2.46	1.35	炭化おにぎり内検出。

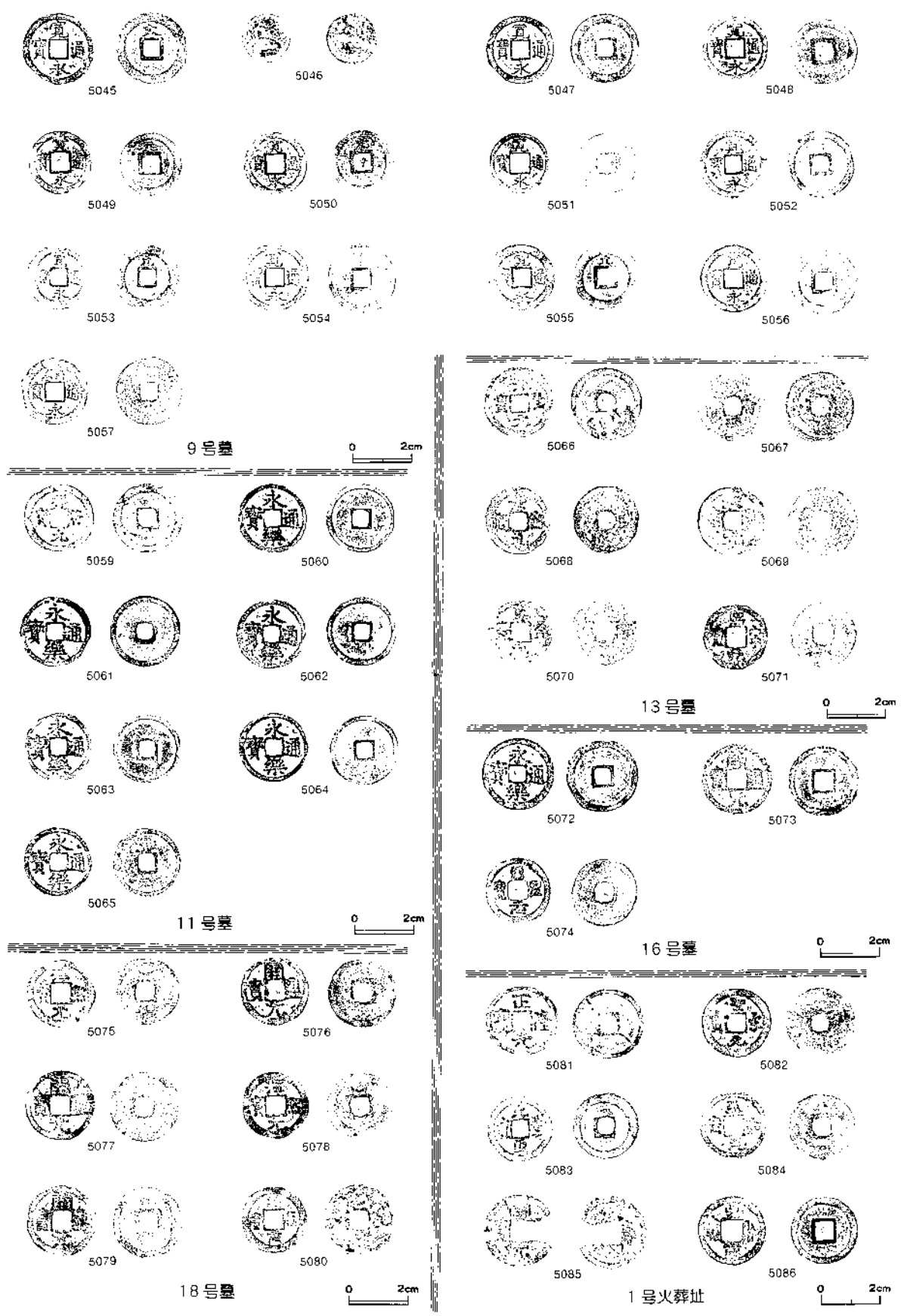


图55 墓群出土钱等拓影图2 (S=1/2)

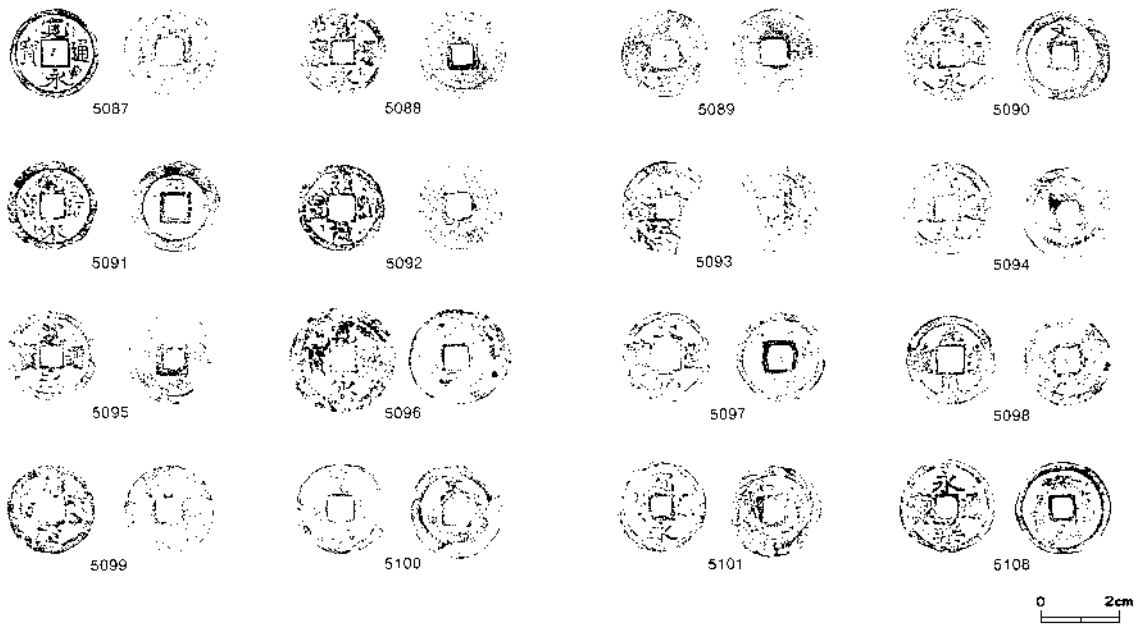


図56 包含層出土銭拓影図 (S=1/2)

表 3-3 杉田東漸寺出土銭等一覧表

番号	出土遺構等	種 類	大 小			備 考
			重量 (g)	径 (cm)	縁辺厚み (mm)	
5087	E 9 a 1	寛永通宝	2.5	2.38	1	
5088	E 9 攪乱	寛永通宝	3.5	2.42	1.1	
5089	E 8 b4・E 9 b1攪乱	元	3	2.36	1.05	遺存状態悪い。
5090	E 8 b4・E 9 b1攪乱	寛永通宝	3.7	2.52	1.55	裏面に「文」。歪む。
5091	E 8 b4・E 9 b1攪乱	寛永通宝	3.6	2.47	1.4	
5092	E 8 b4・E 9 b1攪乱	紹 元宝	2.7	2.35	1.2	歪みあり。
5093	E 8 b4・E 9 b1攪乱	寛永 (欠)宝	2.2		1.05	歪みあり。
5094	E 8 a4	寛永通宝	2.9	2.49	1.15	5095と裏面同士が錆着。表面を外側に向けて錆着。
5095	E 8 b4	寛永通宝	3.2	2.49	1.35	5094と裏面同士が錆着。
5096	E 8 a・b4攪乱	寛永通宝	4	2.68	1.75	表面側が膨らむ。
5097	E 8 d3・4	天聖元宝	2.9	2.45	1.15	
5098	D 9 d1	元豊通宝	2.8	2.46	1.15	5099と錆着。表面を外側に向けて錆着。
5099	D 9 d1	熙寧元宝?	2.7	2.37	1.3	5098と錆着。表裏同一方向に錆着。一部に亀裂。
5100	D 9 a・b1攪乱	寛永通宝	4	2.54	1.85	5101と表面同士が錆着。裏面に「文」。裏面側膨らむ。
5101	D 9 a・b1攪乱	寛永通宝	3.2	2.51	1.75	5100と表面同士が錆着。
5102	D 9 a・b1攪乱	寛永通宝				5103～5107が錆着。表面を外側に向けて錆着。遺存状態悪く、剥離困難。以下5107まで拓影図なし。
5103	D 9 a・b1攪乱					遺存状態悪く、剥離困難。寛永通宝?
5104	D 9 a・b1攪乱					遺存状態悪く、剥離困難。寛永通宝?
5105	D 9 a・b1攪乱					遺存状態悪く、剥離困難。寛永通宝?
5106	D 9 a・b1攪乱					遺存状態悪く、剥離困難。寛永通宝?
5107	D 9 a・b1攪乱					遺存状態悪く、剥離困難。裏面を外側に向けて錆着。寛永通宝?
5108	D 8 c3・4	永楽通宝	2.8	2.56	1.15	

表4 中世～近代墓一覧表

遺構番号	位置	時 期	墓 墳				備 考
			平面形	規 模 (m)			
				長軸長	短軸長	深さ	
1号墓	E-8	中世	楕円形	0.87+	0.73	0.16+	歯のみ遺存。淳熙元宝2点など銭6枚。うち3点と2点がそれぞれ錆着する。北東側が調査区外に及び、全体は不明確。
2号墓	E-8	中世	不整形円形	1.25+	0.86+	0.13	錆着する銭6枚。北東側が調査区外であり他の墓墳と切り合うため、全体は不明確。3号・4号墓より新。
3号墓	E-8	中世	不整形円形?	0.73	0.63+	0.23	人骨片、かわらけ1点、銭6枚。うち5点が錆着する。北東側が調査区外であり、他の墓墳に切られているため、全体は不明確。2号・5号墓より旧。
4号墓	E-8	中世	不整形円形?	0.57+	0.34+	0.29+	かわらけ1点、大観通宝1点、永楽通宝1点、開元通宝1点など銭6枚。うち4点が錆着する。2号墓に切られているため、全体は不明確。
5号墓	E-8・9	中世	不整形楕円形	1.53	1.06+	0.22+	歯、かわらけ3点、銭6枚。うち4点と2点がそれぞれ錆着する。北側が調査区外であり、1号火葬址に切られているため全体は不明確。3号墓より新。
6号墓	E-8・9	中世	不整形円形	1.16+	0.99+	0.28+	人骨片、かわらけ4点、永楽通宝3点など銭6枚。うち3点が錆着する。覆土上部より小型銅鏡。北東側が調査区外であるため全体は不明確。
7号墓	E-8	中世	不整形円形?	1.00+	7.80+	0.21+	人骨片(頭蓋骨等)。南東側が調査区外であるため全体は不明確。墓墳不明瞭。
8号墓	E-8	中世	?	-	-	-	人骨。永楽通宝2点など錆着する銭6枚。墓墳不明。
9号墓	E-8・9	近・現代	不整形方形	1.08	0.95	0.39	両腕を大腿の下にする仰臥屈葬人骨。釘の出土状況により、一辺60cm程の棺の存在を推定。棺内にボタン5点、明治時代以降の銭1点・棺外に寛永通宝1点。また覆土一括として銭12枚。うち6点と2点がそれぞれ錆着。陶器壺片など出土。南側を攪乱によって切られている。
10号墓	D-8・9	中世	?	-	-	-	仰臥伸展人骨。墓墳不明。頭蓋骨遺構確認時出土。
11号墓	D-8	中世	楕円形	1.35+	1.08	0.11	頭蓋骨含む人骨片。かわらけ1点。永楽通宝2点、祥符元宝1点など銭7枚。うち4枚が錆着する。南側が調査区外であるため、全体は不明確。12号墓より新。
12号墓	D-8	中世	楕円形	1.46+	0.91+	0.08	頭蓋骨含む人骨片。南側が調査区外に及び、11号墓に切られているため、全体は不明確。3号墓竪穴状遺構の覆土中に営まれている。
13号墓	D-8	中世	不整形楕円形	1.11	0.93+	0.29	頭蓋骨含む人骨片。かわらけ7点、錆着する銭6枚。銭に布が付着している。南西部が攪乱に切られている。
14号墓	D-8・9	中世	不整形円形	0.67	0.57	0.19	人骨片。
15号墓	E-8	中世	不整形円形	1.12	0.92	0.36	人骨片。
16号墓	D-8	中世	不整形円形?	1.75	0.62+	0.23	永楽通宝1点、開元通宝1点など銭3枚。東側が調査区外であるため、全体は不明確。
17号墓	D-7	中世	不整形円形?	0.89	0.37+	0.90	人骨片。50%以上攪乱により破壊。
18号墓	C-7	中世	隅丸方形	1.10+	1.02	0.38	左を下にする側臥屈葬人骨。かわらけ3点、錆着する銭6枚。南側が攪乱によって切られており全体は不明確。
1号火葬址	E-8・9	中世	不整形円形	1.26+	1.12+	0.38	焼骨片、かわらけ2点、銭2枚、炭化おにぎり(銭4枚入り・元豊通宝含む)。5号墓等に切られているため、全体の規模は不明瞭。4号墓より旧。5号墓より新。
2号火葬址	E-9	中世	円形?	0.95+	0.23+	0.27+	焼骨片。かわらけ1点。6号墓に切られているため、全体は不明確。
3号火葬址	D-9	中世	不整形楕円形	1.26	1.06	0.24	焼骨片、かわらけ片1点、炭化おにぎり出土。

## G その他

### ・単独出土の合わせ口かわらけ (図57、写真129)

C5区c3グリッドに位置する。確認調査12T東壁に接し、I～K貝層付近、2号落ち込み上部にあたる。検出層位はb層に相当する黒色土中であつた。1124を身とし、1123を蓋としていた。掘り方は確認されず、内部からは何も発見されなかつた。

#### 1124・1123と

も器壁が比較的均一で、腰部に丸味がある。底部外面には回転糸切り痕とスノコ痕が見られる。いずれも淡橙褐色を呈し、焼成は普通である。



写真129 合わせ口かわらけ出土状態 (北より)

胎土には少量の白

色海綿体骨針が含まれている。分量は、1123が口径13.2cm、底径7.8cm、器高3.0cm、1124が口径13.4cm、底径8.6cm、器高3.25cmである。

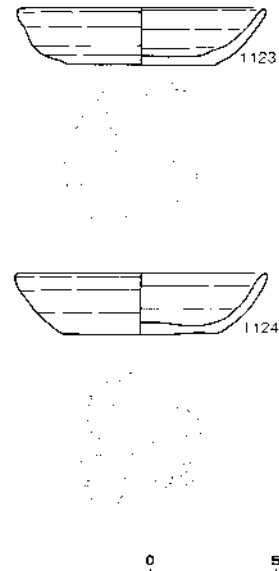


図57 合わせ口かわらけ実測図

## 第4項 ピットおよび包含層出土の遺物 (図58～64)

ピット群は調査区のほぼ全面に展開するが、遺跡の遺存状況が悪いことと相俟って一定のまとまり、あるいは組み合わせを把握することが困難であつた。ここでは、ほぼ調査を進めた順に従って配列し、ピットについては、遺物が出土したものについて大調査区単位に通し番号を付し、遺構全体図に示した。

2203は陶器甕ないし壺の胴下部から底部にかけての破片である。暗灰褐色を呈し、焼成は良好である。胴部は内外面ともナデ調整が施されている。内面には指頭圧痕とみられる凹凸が残されている。G9区ピット1出土。1125は緑釉陶器高台付壺の底部破片である。内外面とも暗黄緑色釉が施釉され、焼成は良好である。高台端部径7.8cm、高7mmを測り、付け高台である。G9区ピット2出土。

2204は土師器壺の口縁部から底部にかけての破片である。口縁部外面および内面はヨコナデ、体部外面ナデ、底部外面は不定方向のヘラ削り調整が施されている。奈良時代前半に比定される。C9区ピット1出土。

2205は土師器甕形土器口縁部の破片である。つくりが厚く、内外面とも横方向のナデが施されている。明灰褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には砂粒を多く含む。相模型に属し、奈良時代前半に比定される。C8区ピット1出土。

2206と2207は壺形土器の肩部破片である。外面および頸部内面はハケ目調整、肩部内面はナデが施

されている。内面には輪積み痕が認められる。胎土は緻密で、焼成は良好である。2207は、甕形土器口縁部破片である。いずれも口唇部に刻み目が施されている。器面の調整は、外面が斜め方向のハケ目後横方向のナデ、内面が横方向のハケ目後横方向のナデである。C7区ピット1出土。2208はC7区ピット1とピット2から出土したものの接合資料で、甕形土器口縁部破片である。口唇部に刻み目が施され、器面の調整は2207と同様である。

2209は壺形土器胴部破片である。外面はハケ目調整後、中位にはヘラによるナデが加えられている。内面には僅かに輪積みの痕跡が残され、この接合部を境に指頭によるナデとヘラによるナデが施されて

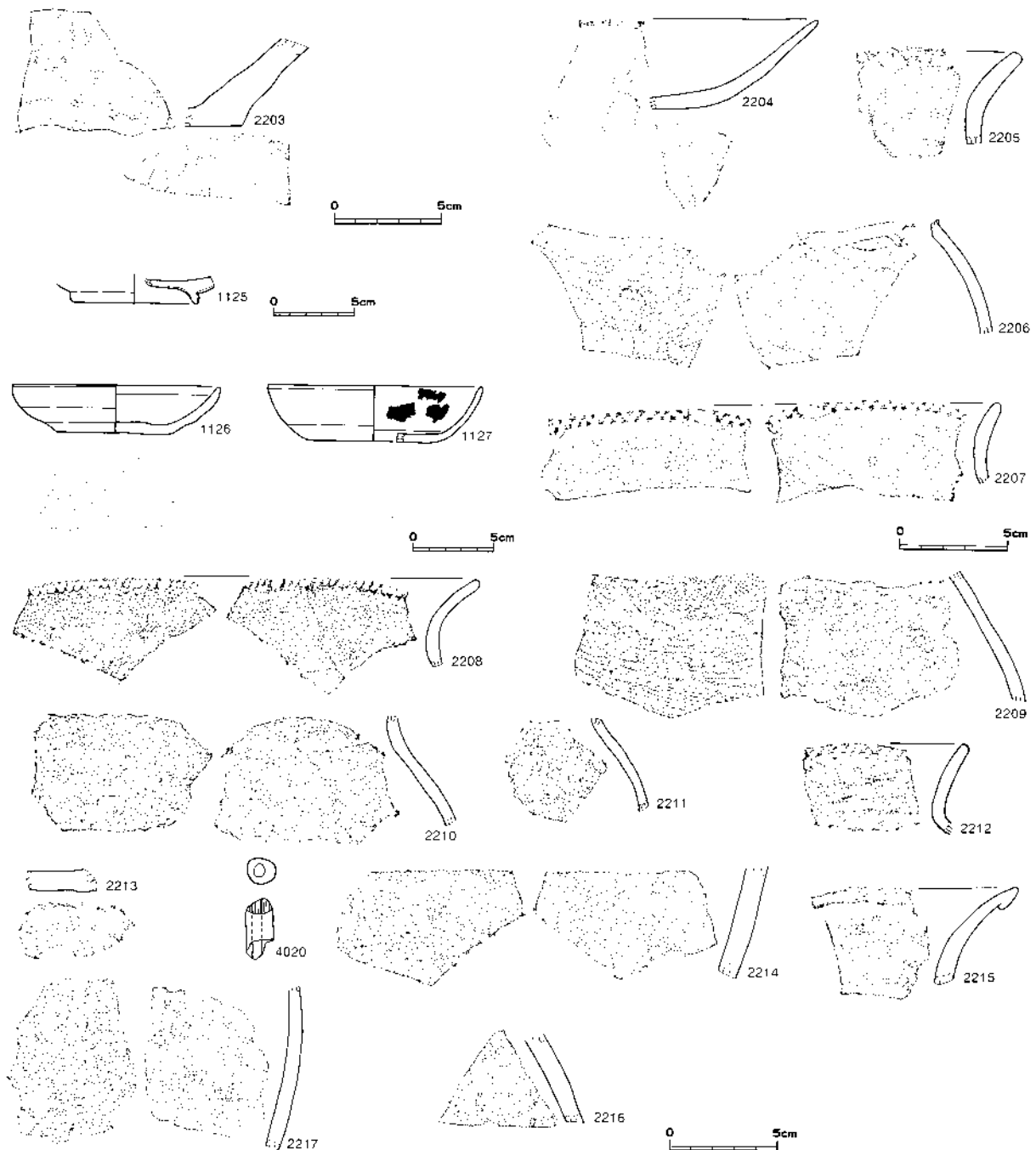


図58 ピット・包含層出土遺物 1

いる。C 6 区ピット 1 出土。2210は甕形土器の頸基部から肩部にかけての破片である。内外面ともナデ調整が施され、外面頸基部には輪積み痕がのこされている。暗灰色を呈し、焼成は普通である。胎土には粗砂粒を多含する。C 6 区ピット 2 出土。

2211は小型壺形土器の肩部破片である。外面は斜め方向のハケ目後ヘラナデ、内面は丁寧なナデが施されている。D 5 区ピット 1 出土。2213はかわらけの底部破片で、外面には回転糸切り痕とスノコ痕が認められる。D 5 区ピット 2 出土。

2212は甕形土器口縁部の破片である。口唇部に刻み目が施され、器面調整は内外面ともナデによっている。焼成は良好であるが、外面肩部は剥離している。C 5 区ピット 1 出土。2213はかわらけ底部破片である。外面には回転糸切り痕とスノコ痕が認められる。4020は管状土錘の残欠である。残存部の長さ3.0cm、外径1.35cm、重量3.4gを測る。2213と4020はC 5 区ピット 2 出土。

2214は陶器甕ないし壺の胴部破片である。内外面ともナデ調整が施されている。明褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には細礫がやや多く含まれる。B 5 区東半部ピット出土。2215は折返し口縁壺形土器口頸部破片である。頸部外面は細かなハケ目後ミガキが加えられている。内面は丁寧なナデである。胎土は緻密で、焼成は良好である。B 5 区ピット 1 出土。2216は陶器鉢の胴部破片と思われる。内外面ともナデ調整が施される。外面は灰褐色を呈し、内面にはススが付着している。B 5 区ピット 1 出土。

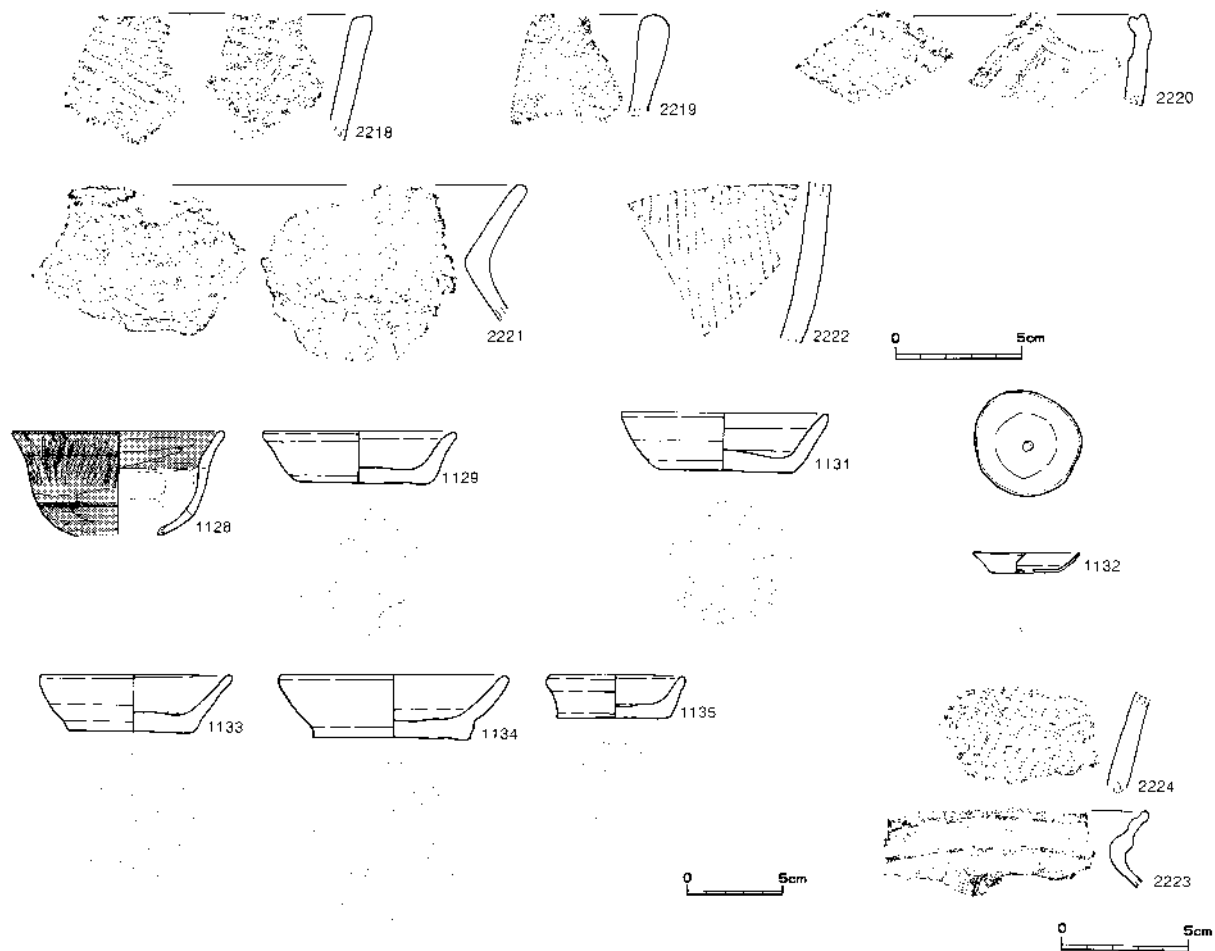


図59 包含層出土遺物実測図 2

2217は甕形土器胴部の破片である。外面はハケ目後一部にナデが加えら、内面はヘラ削りが施されている。焼成は良好である。C 3区ピット1出土。

1126はかわらけで、1/3程度の破片である。口縁部内面は若干内彎する。腰部外面は強い指頭ナデにより窪んでおり、底部外面には回転糸切り痕とスノコ痕を残す。口径12.8cm、底径6.2cm、器高3.0cmを測る。B 4区d 1グリッド出土。

1127はかわらけである。1/3程度の破片で、内面の一部にススが付着する。つくりが薄く、焼成は良好である。底部外面には、回転糸切り痕が認められる。胎土は緻密で、白色海綿体骨針が混入する。口径13.2cm、底径7.8cm、器高3.5cmを測る。C 2区ピット1出土。

2218～2220は縄文土器片である。いずれも摩耗著しい。2218は早期後半に比定される。内外面に条痕文が認められ、胎土には繊維が含まれる。2219は口縁部破片で、外面口唇直下に押引き文が巡らされている。2220は波状口縁を呈する。口唇部は内側に肥厚し、内面片側には口唇部に沿う沈線が認められる。頂部口唇に円形刺突が施され、外面口唇直下には刻み目が施された1条の隆帯が巡らされている。後期堀之内2式に比定される。2221は甕形土器口縁部破片である。口縁部は内外面ともハケ目調整後ナデが加えられ、肩部内面はヘラ削り調整が施されている。胎土には細礫をやや多く混入する。2222は須恵器甕の胴部破片である。外面には平行叩き目が認められ、内面はヘラ削りが施されている。淡灰色を呈し、焼成は良好で、胎土は緻密である。以上はG 9区表土層出土。

1128は埴形土器約1/4の破片である。最大径は口縁部にあり、11.2cmを測る。外面口縁部から体部上半は縦方向の丁寧なミガキ、下半部は横方向のナデ、内面はヘラナデ調整されている。外面と口縁部内面には赤彩が施されている。胎土は緻密で、焼成も良好である。F 9区表土層出土。

1129は、E 9 b3区表土層から完形で出土したかわらけである。つくりがやや厚く、口縁部が若干外反する。底部外面には回転糸切り痕が認められる。淡橙褐色を呈し、焼成は良好である。口径10.0cm、底径6.8cm、器高2.7cmを測る。1130は欠番とする。

1131～1135は墓群西側の攪乱部から出土したかわらけで、本来墓に伴うものと推定される。1131は体部が外傾して直線的に立ち上がり、つくりが厚い。底部外面には回転糸切り痕が認められる。胎土には白色海綿体骨針が含まれる。口径11.0cm、底径7.1cm、器高3.1cmを測る。1132は薄いつくりの小型品で、底部中央に径5mm程の焼成前穿孔が見られる。底部外面には明瞭な回転糸切り痕が認められる。口径5.6cm、底径3.7cm、器高1.1cmを測る。ともに焼成は良好である。以上は、E 8b4・E 9b1区出土。

1133は約1/5を欠く。口縁部・体部に対して底部のつくりが厚い。底部外面には回転糸切り痕とスノコ痕が認められる。口径9.9cm、底径6.5cm、器高3.0cmを測る。胎土は緻密で、少量の白色海綿体骨針を含む。焼成は良好である。E 8d3・4区出土。1134は完形である。口縁部が僅かに内彎し、底部のつくりが厚い。底部外面には回転糸切り痕とスノコ痕が認められる。口径11.8cm、底径8.3cm、器高3.3cmを測る。胎土は緻密で、白色海綿体骨針を混入する。E 9a・b4区出土。1135も完形で出土した。口径7.0cm、底径5.9cm、器高2.2cmを測る。小型品であるが、つくり厚い。体部のナデ調整は丁寧で、胎土には白色海綿体骨針が含まれる。焼成は良好である。口径7.0cm、底径5.9cm、器高2.2cmを測る。E 8b4区出土。

2223はS字状口縁台付甕の口縁部破片である。胎土は緻密で、焼成は良好である。E 8a3・4区出土。

2224は縄文土器片である。摩耗著しく、単節LR縄文が痕跡的に認められる。胎土に繊維が含まれ、

前期黒浜式に比定される。D 9 区表土層出土。

1136～1138はD 8 区から出土した。6 号土坑に伴うものが含まれている可能性がある。1136は甕形土器上半部の破片である。外面は八ケ目調整後横位のミガキが加えられている。内面は八ケ目調整後横位のナデが加えられている。色調は暗橙褐色を呈し、焼成は良好である。1137はS 字状口縁台付甕の口縁部から肩部にかけての約1/2破片である。口径15.6cmを測る。器壁薄く、肩部外面は八ケ目、内面はナデ調整、口縁部内外面横位のナデ調整が施される。灰褐色を呈し、焼成は良好である。1138は小型器台である。約1/3が遺存する。器受け部・脚部とも鉢形を呈する。口径7.0cm、脚端部径9.8cm、器高8.1cmを測り、最大径は脚端部にある。器受け部は内外面とも横位のナデ、脚部外面は八ケ目後横位の丁寧なナデ、内面は八ケ目調整が施される。色調は橙褐色を呈し、焼成は良好である。

1139は高坏坏部である。椀形を呈し、口径は11.9cmを測る。口縁部内外面とも横方向のナデ、体部は縦ないし斜め方向のミガキ調整が施されている。胎土は緻密で、焼成も良好である。D 8c3区 層出土。

1140は土師器坏である。口縁部外面および内面はヨコナデ、外面底・体部は不定方向のナデ調整が施されている。口径は14.0cmと復原される。淡橙褐色を呈し、焼成は良好である。胎土に少量の白色海綿

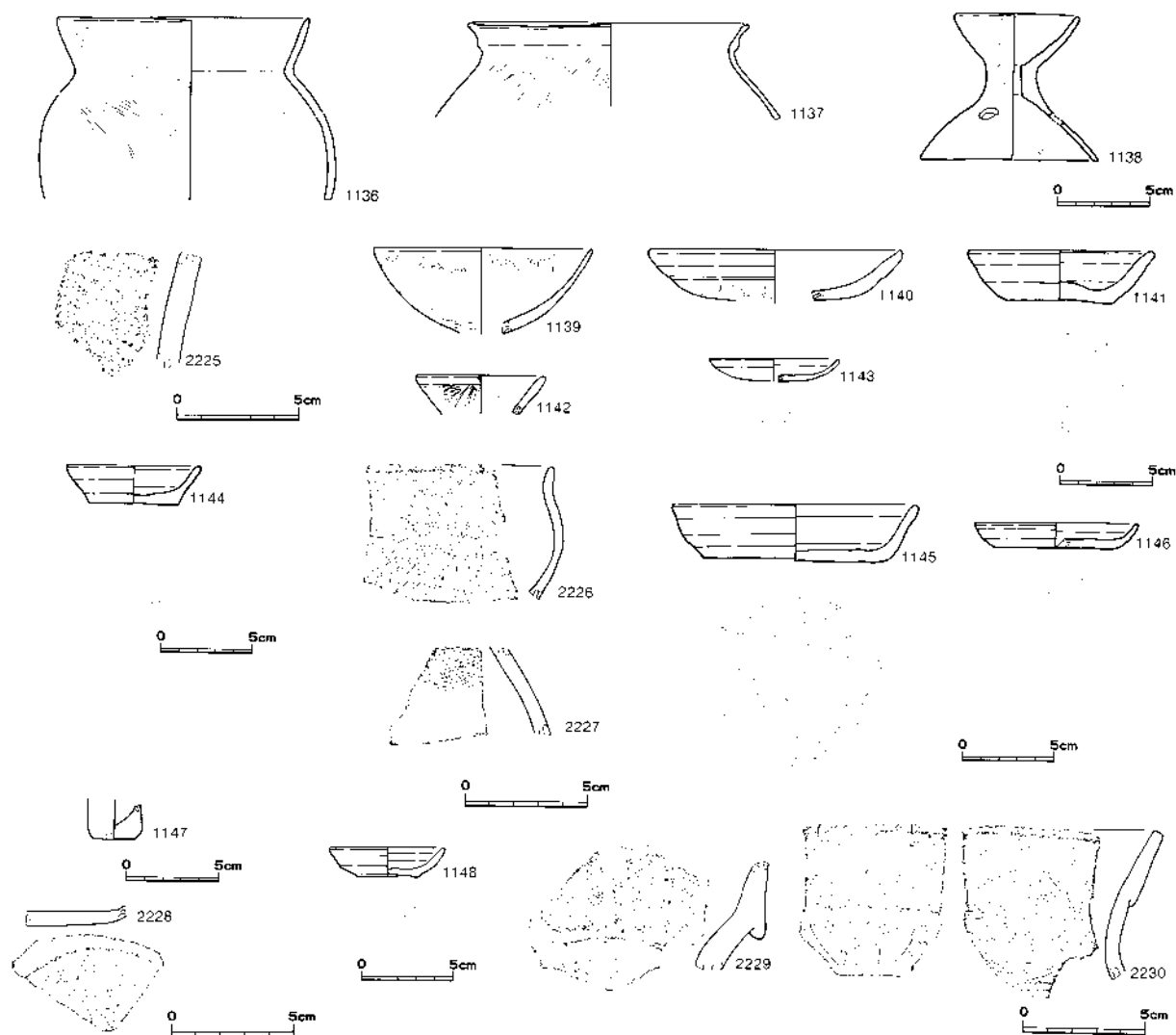


図60 包含層出土遺物実測図 3

体骨針が含まれる。D 8a・b3区出土。

1141～1143はD 8区表土層の出土である。1141はかわらけで、つくりが厚く、口縁部が僅かに外反する。見込み外周は強いナデにより窪んでいる。底部外面には回転系切り痕が認められる。口径10.2cm、底径6.0cm、器高2.8cmを測る。胎土には少量の白色海綿体骨針が混入する。1142は小型壺形土器口縁部の破片である。口径7.2cmを測る。外面は八ケ目調整後丁寧なミガキ、内面はヘラナデが施されている。胎土は緻密で、焼成は良好である。1143は浅い椀状を呈する鉄釉の小皿である。つくりは薄く、口径7.2cm、底径3.4cm、器高1.2cmを測る。底部は回転ヘラ削りが施されている。近世に属するものであろう。

2225は縄文土器片である。摩耗著しく、痕跡的に単節LR縄文が認められる。胎土には繊維が含まれ、前期黒浜式に比定される。C 8区表土層出土。

1144はかわらけである。口径7.4cm、底径4.8cm、器高2.1cmを測る小型品で、見込み部に少量のスガが付着する。胎土に白色海綿体骨針を含み、焼成は良好である。C 7区表土層出土。

2226は埴形土器の口縁部から胴部中位にかけての破片である。外面は八ケ目調整の後口縁部のみヨコナデが加えられている。内面は口縁部に横位の八ケ目の痕跡が残され、胴部は丁寧なナデが施されている。C 7区表土層出土。

1145は完形のかかわらけである。器壁のつくりは比較的均質である。口径13.6cm、底径10.0cm、器高3.2cmを測る。底部外面には回転系切り痕とスノコ痕が認められる。胎土は緻密で、少量の白色海綿体骨針を含む。焼成は良好である。B 7区中央部表土層出土。

1146は1/3程度のかかわらけである。口径に対して器高低い。底部外面には回転系切り痕が認められる。口径9.0cm、底径6.6cm、器高2.0cmを測る。胎土は緻密で、焼成は良好である。C 6区表土層出土。

2227は壺形土器の肩部破片である。外面には網目状文が見られ、無文部はミガキが施されている。内面は丁寧なナデ調整が施される。弥生時代後期後半に比定される。C 6d1区出土。

1147は小型手捏ね土器の下半部である。円筒形を呈し、外面底部との境界部はヘラ削りが施されている。底径2.2cm、残存高2.2cmを測る。1148は約1/2のかかわらけである。口径6.4cm、底径3.4cm、器高1.6cmを測る。胎土は緻密で、焼成は良好である。これらはB 6区東半部出土。

2228は須恵器杯の底部破片である。底部外面は回転ヘラ削りが施されている。暗青灰色を呈し、焼成は良好である。胎土は緻密で、白色海綿体骨針を多含する。B 6区東半部出土。

2229と2230は、B 5区西半部表土層出土の折返し口縁壺形土器の口縁部破片である。口縁部外面には単節LRとRLの羽状縄文が施され、棒状浮文が少なくとも3本貼付されている。下端には刻み目が加えられている。頸部外面は細かな八ケ目が残され、内面は丁寧なミガキ調整が施されている。内外面ともに赤彩されている。2230は内外面細かな八ケ目調整が施されているとも。口縁部外面には横方向のミガキ、内面にはナデが加えられている。胎土は緻密で、焼成は良好である。2229は弥生時代後期後半、2230は古墳時代前期に比定される。

1149は高坏脚部である。外面は縦位のミガキによる調整の後、赤彩が施される。内面は横位のナデ調整が施されている。胎土は緻密で、焼成は良好である。1150は約1/2が遺存するかかわらけである。器壁が比較的均一で、体部は内彎して立ち上がる。底部外面には回転系切り痕とスノコ痕が認められる。胎土は緻密で、少量の白色海綿体骨針を含む。焼成は良好である。2231は折返し口縁壺形土器の口縁部破

片である。頸部外面は斜め方向の細かなハケ目が残され、口縁部および内面は横方向の細かなハケ目調整後ナデが加えられている。2232は有段口縁壺形土器の口縁部破片である。口縁部下端の段はヘラ削りによって作出されている。内外面とも丁寧なミガキ調整が施され、焼成は良好である。2233～2235は甕形土器の口縁部破片である。2233の口唇部には刻み目が見られ、内外面ともナデ調整が施されている。2234は口唇部に面を有し、内外面とも横位のハケ目調整が施されている。2233と2234の胎土には粗砂を多含する。2235は小型台付甕の口縁部破片と思われる。外面にはススが付着し、やや粗いハケ目と細かなハケ目が認められる。口縁部外面はヨコナデ、内面はナデが加えられている。内面には粗いハケ目の痕跡が僅かに残る。2236は瓢壺の口縁部破片である。口唇部の内側に面を有する。内外面とも丁寧なミガキ調整が施され、赤彩されている。胎土は緻密で、焼成も良好である。2237は高坏の口縁部破片で、内面に複数の細い横位沈線と連弧状の沈線が交互に巡らされている。

以上はC 5区出土で、1150は表土層、2231と2235はd 4グリッド 層からの出土、2234はc 2グリッド 層からの出土である。2231は弥生時代後期に比定され、1150を除くその他は古墳時代前期に比定される。2236と2237は東海系に属するものである。

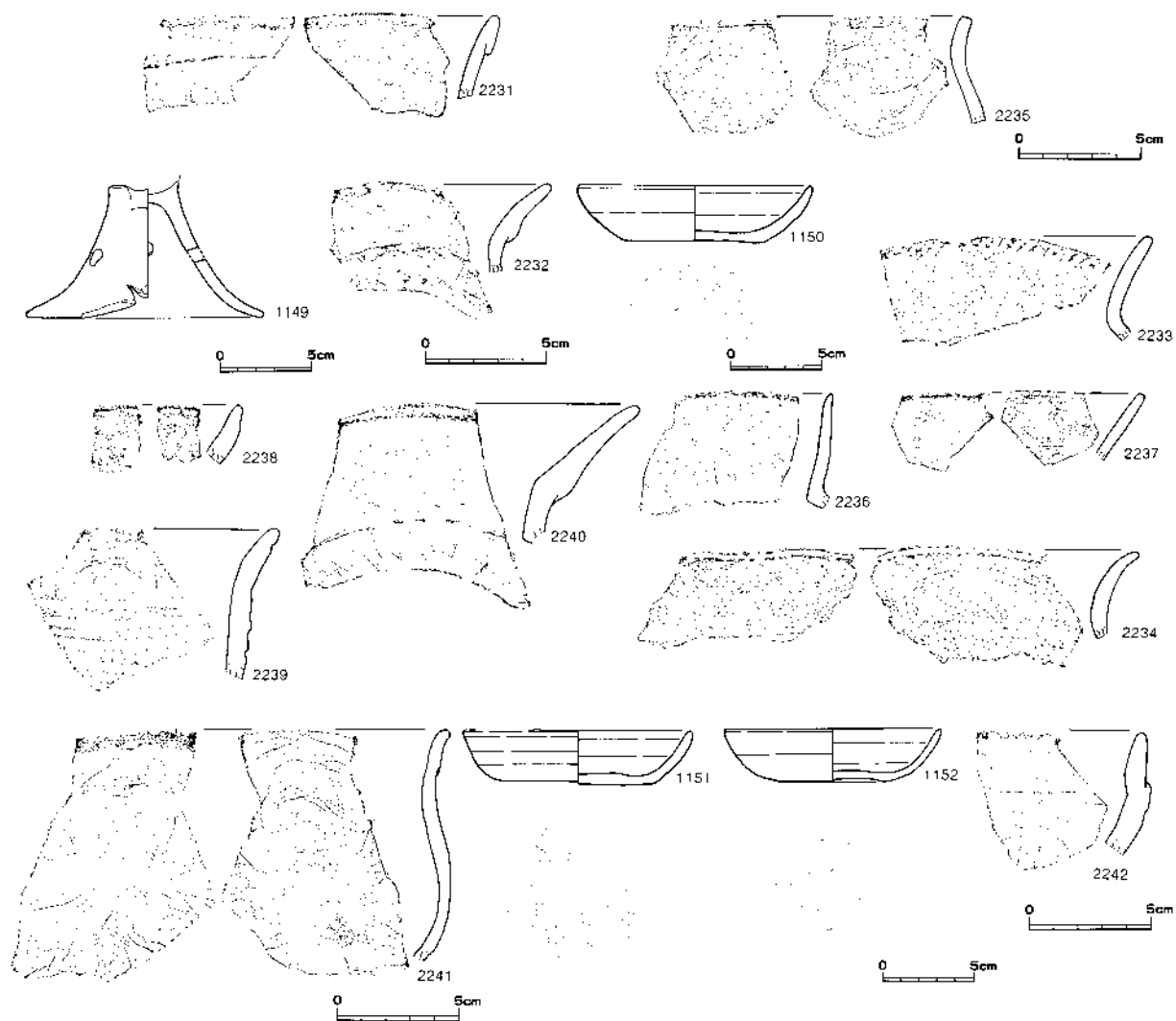


図61 包含層出土遺物実測図 4

2238はかわらけ口縁部破片で、内面に糸の圧痕が認められる。淡灰褐色を呈し、焼成は良好である。B 5 区東半部 層出土。

2239は無頸壺の口縁部から肩部の破片と思われる。摩耗やや著しい。外面口唇部直下に1条の沈線が巡らされ、肩部にも同様の沈線が3条巡らされている。その下にも斜位の沈線が見られるが、全体の構成は不明である。淡褐色を呈し、焼成は普通である。2240は有段口縁壺形土器の口頸部破片である。頸基部の内外面に明瞭な稜を有する。内外面とも丁寧なミガキが施され、赤彩されている。胎土は緻密で、焼成は良好である。2241は無形壺形土器口縁部から胴部下位にかけての破片である。口縁部は折返し風のつくりで、下端外面に接合痕が見られる。肩部はなで肩状を呈する。口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面がハケ目後ヘラミガキ、内面がヘラ削り調整である。胴部内面に輪積み痕が認められる。褐色を呈し、焼成は良好である。2242は土師器壺形土器口縁部破片である。口縁部と体部の境界に明瞭な段を有する。外面口縁部から内面にかけてがヨコナデ調整、体部外面ヘラ削り後ナデが加えられている。1151と1152はかわらけで、口径が大きい割に器壁のつくりが均一である。ともに胎土は緻密で、焼成は良好である。胎土には白色海綿体骨針が含まれ、1152に顕著である。1151は口径12.6cm、底径8.0cm、器高3.0cm、1152は口径12.0cm、底径5.6cm、器高3.0cmを測る。以上はC 4 区出土で、1151と1152は層からの出土品である。2242はC 4d4区出土。

2243は須恵器甕胴部破片である。外面には平行叩き目が見られ、内面は丁寧なナデ調整により当て具痕は残されていない。暗灰色を呈し、胎土は緻密である。焼成は良好で、外面には白斑が認められる。B 4 区b1グリッド出土。

1153は有段口縁壺形土器の口頸部である。内外面ともハケ目調整後丁寧なミガキが加えられ、赤彩が施されている。胎土は緻密で、焼成は良好である。口径は17.6cmを測る。1154は甕形土器口縁部である。外面にはススが付着する。内外面ともハケ目調整が施され、口縁部外面は横方向のナデが加えられている。胎土は緻密で、焼成も良好である。口径は14.2cmを測る。1155は小型器台脚部である。円形の透し孔が3孔穿たれている。外面は丁寧なミガキ調整で、赤彩が施されている。内面は横位のナデ調整が施されている。脚端部径は9.6cmと復原される。1156は小型器台脚部である。上部と裾部外面および内面は横方向のナデ、外面中位は縦方向のミガキ調整で、外面には赤彩が施されている。端部径9.1cmを測る。2244は甕形土器口縁部破片である。肩部内面を除きハケ目調整が施されている。口縁部外面はナデが加えられ、ハケ目が消されている。肩部内面はナデ調整が施されている。焼成は良好で、胎土には砂粒が多く含まれている。以上はB 3 区中央部の出土で、1153と1156はc3グリッド 層、1154と1155は表土層、2244はc2グリッド 層である。

1157は小型手捏ね土器である。鉢形を呈し、約1/4が遺存する。内外面ともハケ目調整にナデが加えられている。口径6.6cm、底径2.4cm、器高4.0cmと復原される。胎土には粗砂をやや多く含み、焼成は良好である。2245は甕形土器口縁部破片である。内外面ともハケ目調整が施され、内面にはミガキが加えられている。暗赤褐色を呈し、焼成は良好である。C 3 区出土。

1158は土師器杯の破片である。盤状を呈し、口径・底径とも図より大きくなる。外面口縁部および内面はヨコナデ、体部は横位のヘラ削り後ナデ、底部外面不定方向のヘラ削り後ナデ調整が施されている。2246は甕形土器口縁部破片である。内外面ともハケ目調整が施されており、口縁部外面のみ斜め方向、

その他は横方向である。灰褐色を呈し、焼成は良好である。以上の2点は、B3区表土出土。

2247はS字状口縁台付甕の肩部破片である。つくりが薄く、焼成は良好である。斜め方向のハケ目に横位のハケ目が加えられている。B3区c4グリッド出土。

2248はかわらけの破片で、口縁部から体部外面および内面はヨコナデ調整、底部外面には回転系切り痕が残る。B3区d4グリッド出土。

1159は須恵器高台坏境の底部である。高台部径7.0cm、高さ8.0cmを測り、付け高台であろう。端部内側は回転ナデにより面取りされている。外面底部中央には回転系切り痕が残されている。暗灰褐色を呈し、焼成は普通である。B2 b1区 層出土破片とB2表土層出土破片の接合資料である。

2249は折返し口縁壺形土器口縁部破片で、口唇部を欠いている。口縁部外面には単節LR縄文が施文され、内外面とも赤彩が施されている。B1・2区表土層出土。

2250は壺形土器底部破片である。底部外面には木葉痕が認められる。色調は淡灰褐色を呈し、焼成は良好である。C2・3区出土。

2251は須恵器甕の胴部破片である。つくりが薄く、焼成は良好である。外面は平行叩き目、内面は丁寧なナデが施されているが、僅かに細かな線の同心円当て具痕が観察される。B1・2区表土出土。

1160は甕形土器上半部である。最大径は胴部上位にある。内外面とも比較的丁寧なナデ調整が施されている。口径は15.65cmと復原される。D3区 層出土。

1161は小型器台脚部である。裾部でやや強く外反し、端部で僅かに内彎する。上位に小さな透し孔が

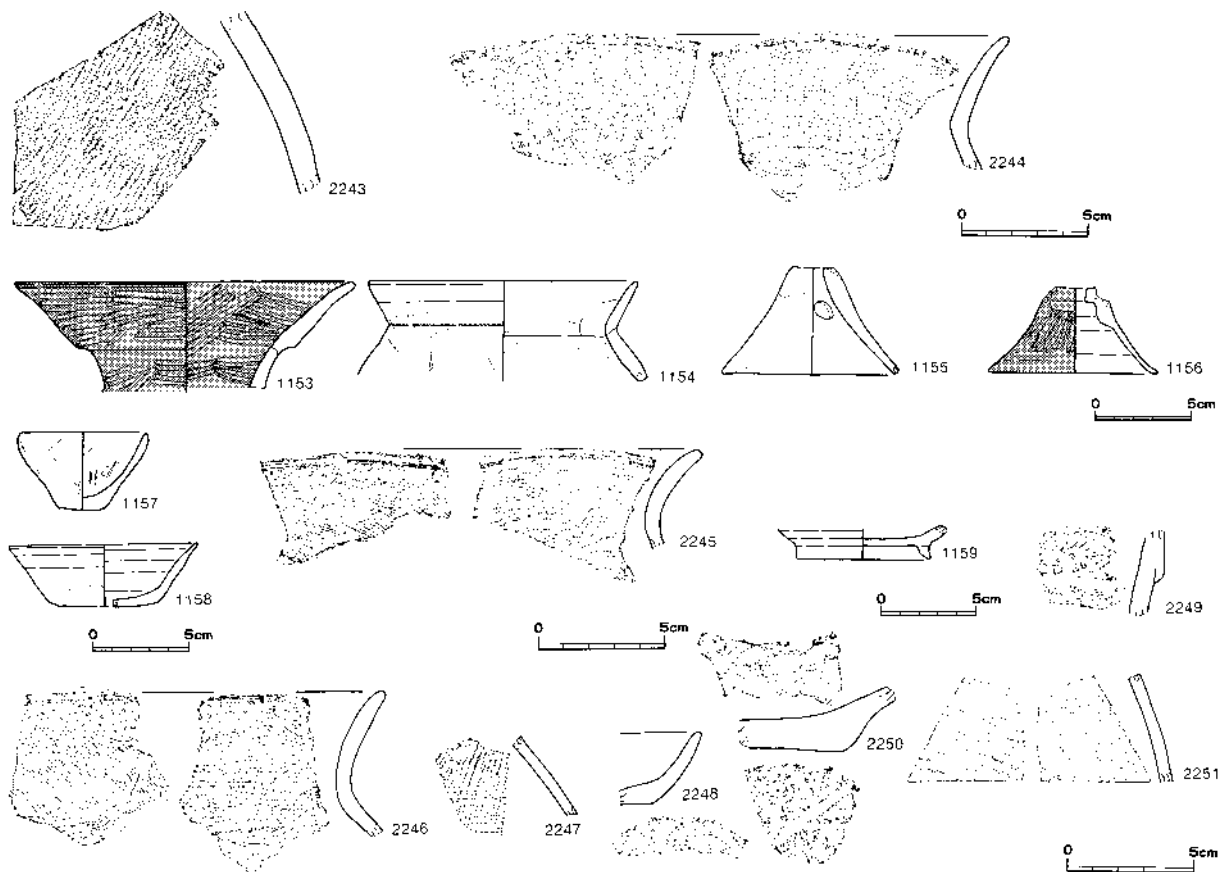


図62 包含層出土遺物実測図5

穿たれている。外面は従位の細かなミガキ、内面は横位のナデ調整が施されている。端部の径は10.8cmを測る。橙褐色を呈し、焼成は良好である。1162はかわらけである。器壁の厚さはほぼ均一で、底部外面には回転系切り痕とスノコ痕が認められる。口径8.1cm、底径5.25cm、器高1.8cmを測る。淡橙褐色を呈し、焼成は良好である。以上はD4区出土。

1163は小型台坏甕脚台部である。外面は八ケ目、内面はナデ調整が施される。端部の径は6.8cmを測る。1164は鉢形土器である。広口で、口縁部に最大径を有する。内外面とも八ケ目調整後丁寧なミガキが加えられ、外面には赤彩が施されている。頸部内外面に八ケ目の痕跡をとどめる。口径は16.7cmと復原される。胎土は緻密で、焼成は良好である。1165は高坏脚部である。端部付近が若干内彎する。上部に透し孔が3孔認められる。外面は縦方向のミガキ、内面は横方向のヘラナデが施されている。端部の径は10.4cmと復原される。2252は甕形土器口縁部破片である。口唇部に面を有し、内外面とも八ケ目調整が施されている。つくりが薄く、焼成は良好である。以上はD5区出土で、1163・1165・2252がa1グリッド、1164がa3グリッド出土である。

2253は甕形土器口縁部から肩部にかけての破片である。口縁部内面は内彎する。口縁部内外面および肩部外面は八ケ目調整、口縁部内外面はナデが加えられている。肩部内面はナデ調整で、指頭圧痕の凹凸が見られる。焼成は良好で、胎土には細礫の混入がやや目立つ。2254はS字状口縁台付甕の肩部破片

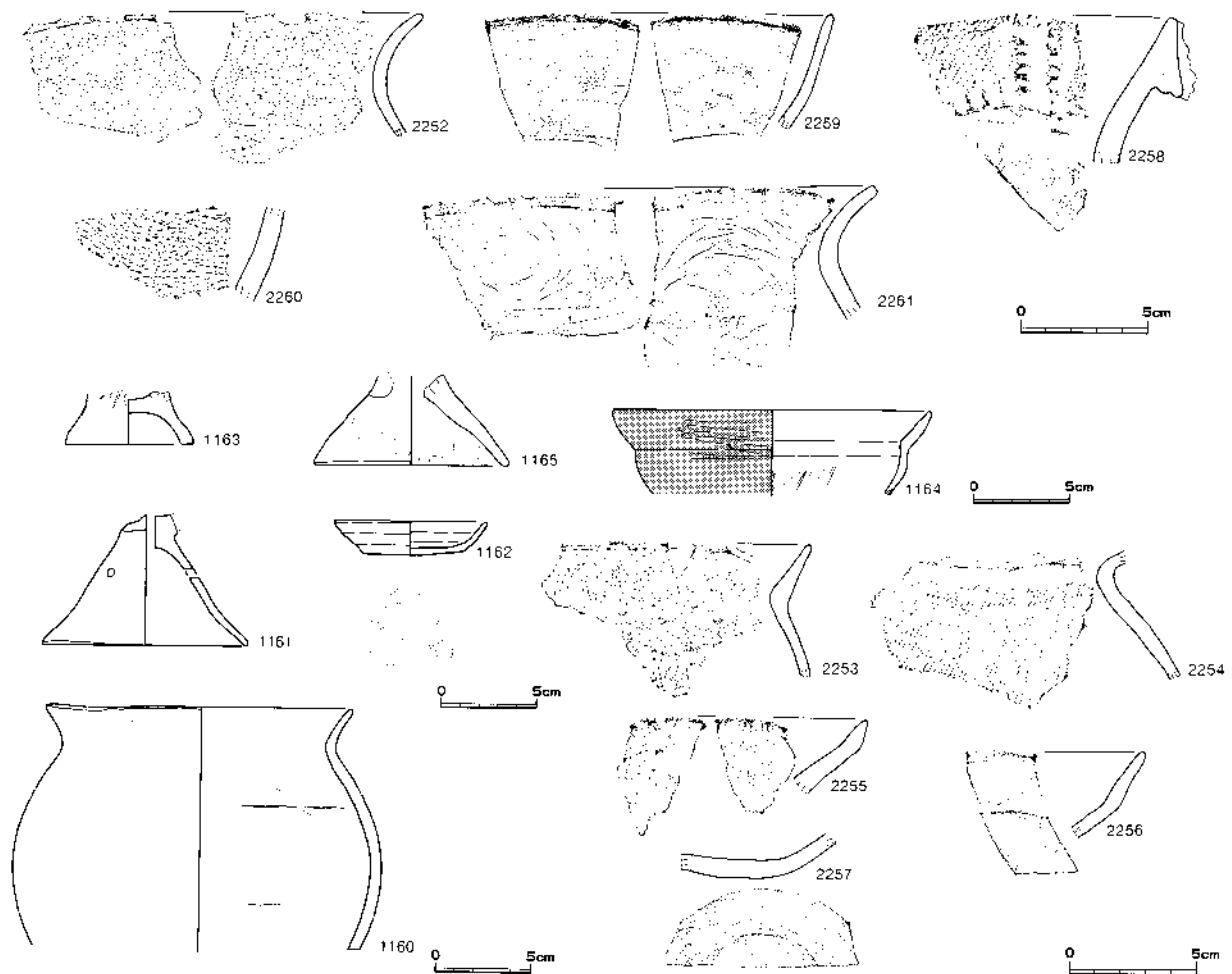


図63 包含層出土遺物実測図 6

である。外面はやや粗いハケ目調整が施され、指頭によるとみられる横位の弱いナデが加えられている。頸部は内外面ともヨコナデが施され、肩部内面には指頭痕が顕著である。淡灰褐色を呈し、焼成は良好である。2255は小型の壺形土器口縁部破片と考えられる。口縁部は受け口状に立ち上がり、口唇部に刻み目が施されている。内外面とも丁寧なナデ調整が施されている。色調は淡褐色を呈し、焼成は普通である。胎土には粗砂をやや多く混入する。2256は土師器杯の口縁部から体部にかけての破片である。境界部に稜が認められ、口縁部および内面はヨコナデ、体部外面はヘラ削りが施されている。焼成は良好である。古墳時代後期に比定される。以上はD4区表土出土。

2257は須恵器壺の底部破片である。体部下半は腰が張り、丸味が強い。底部外面には中央部に回転系切り痕が残り、周囲は回転ヘラ削りが施されている。暗青灰色を呈し、焼成は良好である。D4区出土。

2258は折返し口縁壺形土器口縁部破片である。口唇部および口縁部外面には単節LR縄文が施文され、刻み目を有する棒状浮文が貼付されている。口縁部下端には刻み目が施されている。頸部外面は縦方向のミガキ、内面は丁寧なナデ調整が施されている。胎土には粗砂をやや多く含み、焼成は普通である。D5区出土。

2259は灰釉陶器壺の口縁部破片である。体部外面下部は無釉で、内面は口縁部のみ施釉されている。浸け掛けであろう。胎土は緻密で、精選されている。焼成も良好である。2260は壺形土器肩部破片である。網目状文が施文されている。焼成は普通で、胎土には粗砂の混入が目立つ。外面には僅かに赤彩の痕跡をとどめている。2261は壺形土器口縁部の破片である。外面口縁部斜め方向のハケ目後横位ナデ調整、肩部横方向のハケ目調整が施されている。内面は口縁部が横方向ハケ目後、同方向のミガキ、肩部はナデ調整である。胎土は緻密で、白色海綿体骨針を少量含む。焼成は良好である。以上はD6区出土で、2259と2261は表土層から出土したものである。

包含層出土の土製品については、図64に示し、以下にまとめて記述する。

4021～4024はG9区表土層から出土したものである。4024は縄文時代の土器片錘で、他は中央部に膨らみを有する管状土錘である。4021は両端を欠損する。残存部長4.3cm、最大径1.3cm、重量6.1gを測る。4022は完形品である。長さ4.2cm、最大径1.3cm、重量7.1gを測る。胎土には白色海綿体骨針が含まれる。4023は一端を欠く。残存部長3.2cm、最大径1.0cm、重量2.4gを測る。4024は摩耗が著しい。隆帯区画と内部に集合沈線が認められる。長さ5.9cm、幅4.5cm、厚さ1.0cm、重量45.3gを測る。中期加曽利E式に比定される。

4025は管状土錘である。一端を僅かに欠く。中位に最大径を有する。残存部長3.5cm、最大径1.1cm、重量2.9gを測る。F9区表土層出土。

4026は縄文時代の土器片錘である。無文で、全体の摩耗著しい。長さ6.0cm、幅4.7cm、厚さ1.1cm、重量48.2gを測る。F9・10区表土層出土。

4027と4028は球状土錘である。4027は1/3程度の残欠品で、径2.8cm、重量11.8gを測る。4028は焼成がやや軟質で、表面がかなり剥離している。径3.4～3.6cm、重量30.8gを測る。4027はE8d3・4区、4028はD8区出土。

4029～4033はC5区から出土した土錘である。4029・4030・4033は筒形を呈し、4031・4032は球状を呈するものである。4029・4030はともに半欠品で、4029が長さ3.9cm、外径3.4cm、重量31.5g、

4030が長さ4.1cm、外径4.6cm、重量47.7gを測る。4031・4032もともに欠損品である。4031は径3.5×3.9cm、重量26.8g、4032は4031は径3.1×3.2cm、重量14.2gを測る。4032のつくりはやや雑で、成形時の皺が残されている。4033は残欠品で、詳細は明らかにできない。胎土に白色海綿体骨針の混入が顕著である。4029はc4グリッド層、4032はb4グリッド層、4033はb3グリッド層の出土で、K貝層ないし2号落ち込みに伴う可能性が高い。4030は表土層の出土である。

4034は球状土錘である。約1/3を欠く。表面には凹凸が認められ、表面の調整はやや雑である。径4.3×4.4cm、重量45.4gを測る。B 3d3区 層出土。

4035は筒形を呈する土錘の半欠品である。表面の調整は丁寧である。長さ6.1cm、外径5.5cm、重量88gを測る。胎土は緻密で、砂粒を多く含む。B 5区東半部 層出土。

4036は管状土錘である。端部の一部を欠くが、ほぼ完形品である。最大径は中位にあるが、円筒形に近い。長さ6.1cm、最大径3.0cm、重量40.4gを測る。B 7・8区境界部付近表土層出土。

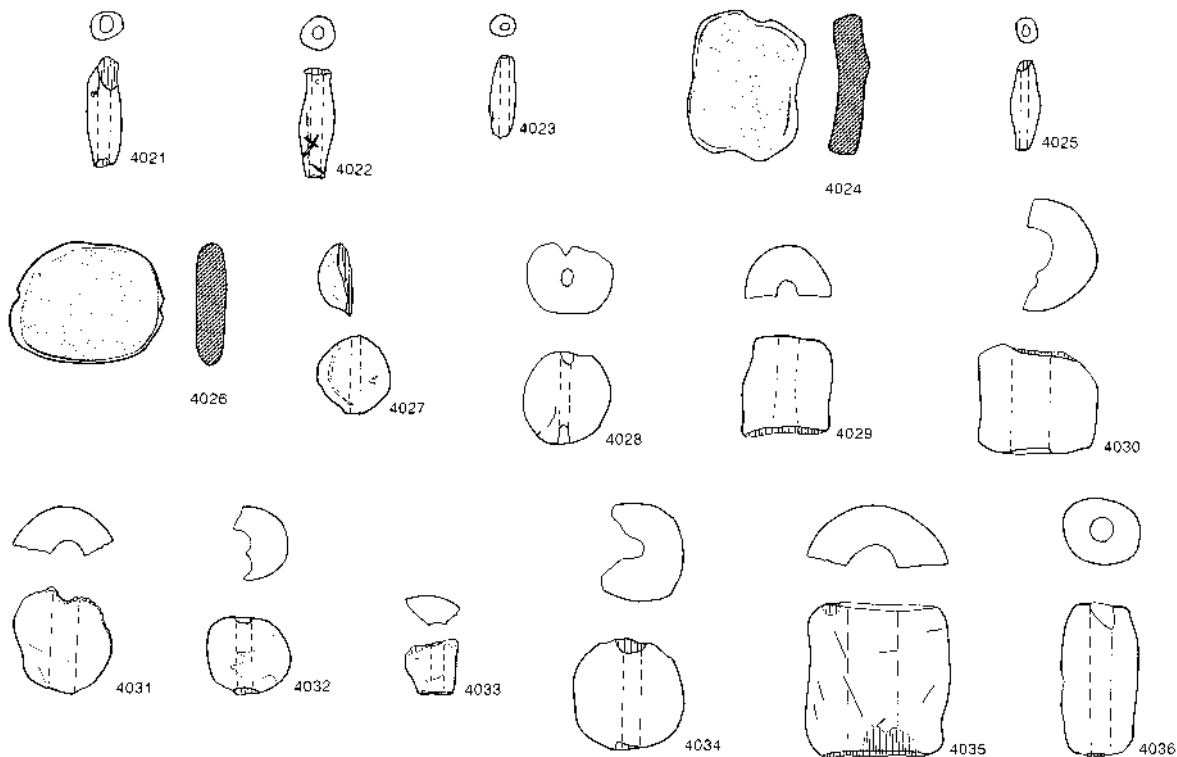


図64 包含層出土土製品実測図

## 第4章 まとめ

平成14・15年度の2次にわたり、およそ1,500㎡の発掘を実施した結果、古墳時代前期と中世を主体とする遺構群が発見された。古墳時代前期の遺構群は、竪穴住居址1軒、溝状遺構6条、土坑7基、土器集中出土地点1カ所、および貝層が大別3カ所である。中世の遺構群は、竪穴状遺構3基、溝状遺構3条、道路状遺構1条、井戸状遺構2基、土坑7基、墓18基（うち1基は近代）、火葬址3基である。このほか、奈良・平安時代に属するものと推定される多量の炭化米を伴う土坑1基（8号土坑）などがある。柱穴状の掘り込みは各地点で検出されたが、明確な組み合わせを把握できるものはなかった。

出土遺物は、古墳時代前期と中世の土器群が主体をなすが、縄文時代早・前・中・後期の土器片・土器片錘および石器類、後期弥生土器片、古墳時代後期～平安時代の土器片類が極少量ずつ検出された。縄文時代の遺物は、いずれも摩耗が著しく、海水に洗われていたことを物語っている。古墳時代前期の土器類以外の遺物では、土錘が目立つ。少量であるが獣魚骨や加工痕のある鹿角、ふいごの羽口と考えられる土製品や鉄滓が出土した。中世の土器群の中には少量の青磁片が見られた。墓群関係の遺物では、6号墓覆土最上部出土の小型銅製素文鏡が注意されるが、当該墓に伴う副葬品であるかは即断できない。2基の火葬址から「炭化おにぎり」各1点が出土し、うち1号火葬址のものは内部に銭4枚が含まれていた。複数の銭が錆着した状態で検出される例が比較的多く認められたが、布袋等に入れて副えられたもの以外に、おにぎりに握り込まれていたものが相当数存在したことを想像させる。また、本文中でもふれたとおり、寺域の墓地にありながら、板碑や石塔類・火葬蔵骨器が1点も発見されなかった点も注意されるところである。

貝層は、層の混貝土層として存在し、堆積層の層厚はいずれも薄い。堆積土と出土遺物から形成時期を古墳時代前期と判断した。一部、層中に盛り上がり、層に覆われる自然貝層が存在した。人為的に形成された貝層に類似する状況であったが、砂層に含まれること、無遺物層であること、破碎貝層に挟まれ、岩礫性の貝種がほとんど含まれないなどから、自然貝層と判断した。竪穴住居址は、占地場所を除けば、その属性において通有のものと何ら変るところがないが、浜辺の作業施設であるとする考え方も可能である。一方、それとは矛盾することにもなるが、3・4号溝を一体のものとして一辺17～18mの方形周溝墓を想定することも可能であろう。これらについては、本遺跡の性格を究明していく上で重要であるが、ここでは結論を留保し、今後の検討に俟ちたい。中世の遺構群については、当然のごとく、東漸寺に関連するものと予想される。しかし、墓群と道路と溝等との相互の関連性も明確でない。墓群は、道路の西側に密な分布を示し、東側は散在する傾向が窺える程度である。現状では、1号溝状遺構と2号溝状遺構の性格はもとより、それらが一連のものであるかということすら不明である。

1928年の木造校舎の建築に始まり、その後の増改築に伴う基礎工事により遺構は削平され、あるいは分断され、遺物は攪乱された。また、見学会の際、地域の方から先の太平洋戦争の時に防空壕が掘られたことを知らされた。攪乱として処理し、調査の対象としなかったが、3・4号溝および墓群周辺の大きな攪乱に防空壕が含まれている可能性が高い。このような遺跡の遺存状況の中で、遺構の性格が明確なものは、古墳時代前期の竪穴住居址と貝層、中世以降の墓および道路遺構のみである。今回の調査成果は、非常に断片的なものであったが、海浜部の低地遺跡の一端を垣間見ることができたといえる。



調査終了時の遺跡 北東より杉田貝塚方面を望む

---

---

## 杉田東漸寺貝塚発掘調査報告

横浜市立杉田小学校改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

編集 / 財団法人 横浜市ふるさと歴史財団  
〒224 0034 横浜市都筑区勝田町760 TEL045 (593) 2406  
発行 / 横浜市教育委員会  
発行日 / 平成16年3月31日  
印刷所 / 株式会社ナデック

---

---

## 抄 録

ふりがな	すぎたとうぜんじかいづかはくつちようさほうこく							
書名	杉田東漸寺貝塚発掘調査報告							
副書名	横浜市立杉田小学校改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	鈴木重信・橋本昌幸・平子順一							
編集機関	財団法人横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター							
所在地	〒224-0034 神奈川県横浜市都筑区勝田町760 TEL. (045) 593-2406							
発行年月日	西暦2004年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コ	一	ド	北緯東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号		" / " ° / "		m <sup>2</sup>	
すぎたとうぜんじかいづか 杉田東漸寺貝塚	かながわけんよこはまし すぎたいちちようめ 神奈川県横浜市 杉田一丁目8-1	141071	磯子区 No.31		35° 139° 22' 37' 56" 13"	第1次本発掘 20020910 ～ 20021018  確認調査 20030303 ～ 20030317  第2次本発掘 20030403 ～ 20030723	約60       約1,430	校舎改築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
杉田東漸寺貝塚	集落址  墓地他  散布地	古墳時代前期  中・近世	貝層大別3カ所、竪穴住居址1軒、溝状遺構6条、土坑7基、土器集中1		縄文土器・石器、弥生土器、土師器・須恵器、陶器・かわらけ	・扇状地上に立地する海浜部の遺跡。 ・遺存状態悪く、遺構相互の関係等、把握し難いものが多い。 ・中心となる時期は古墳時代前期と中世で、中・近世の遺構は東漸寺に関係するであろう。 ・古墳時代前期の竪穴住居址の発見は、貴重な資料を提供するものである。		
		縄文・弥生・古墳後期～平安時代	奈良・平安時代と推定される炭化米を伴う土坑1基					